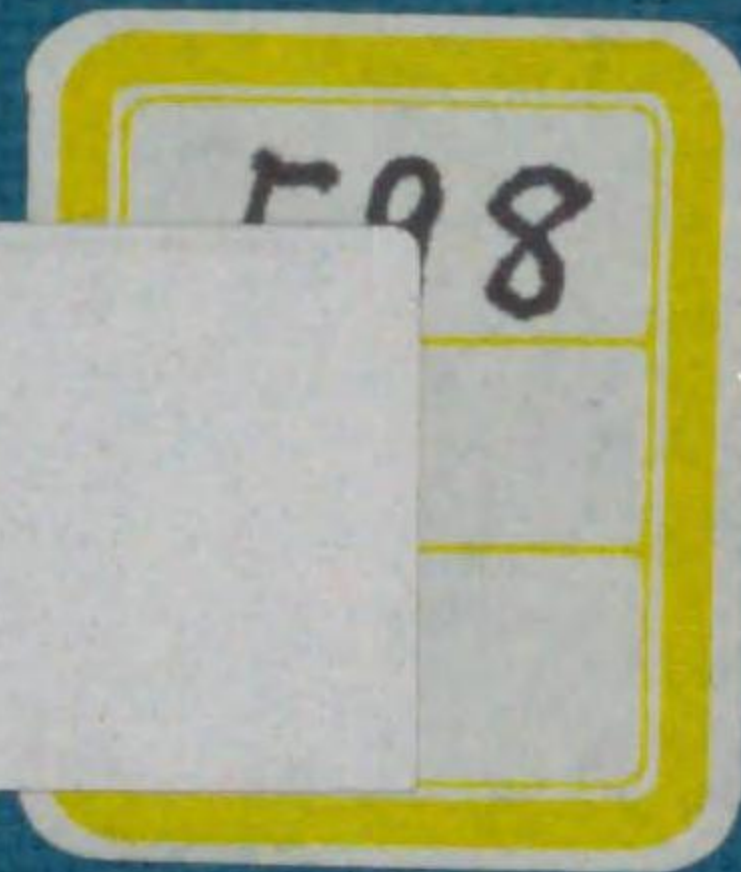
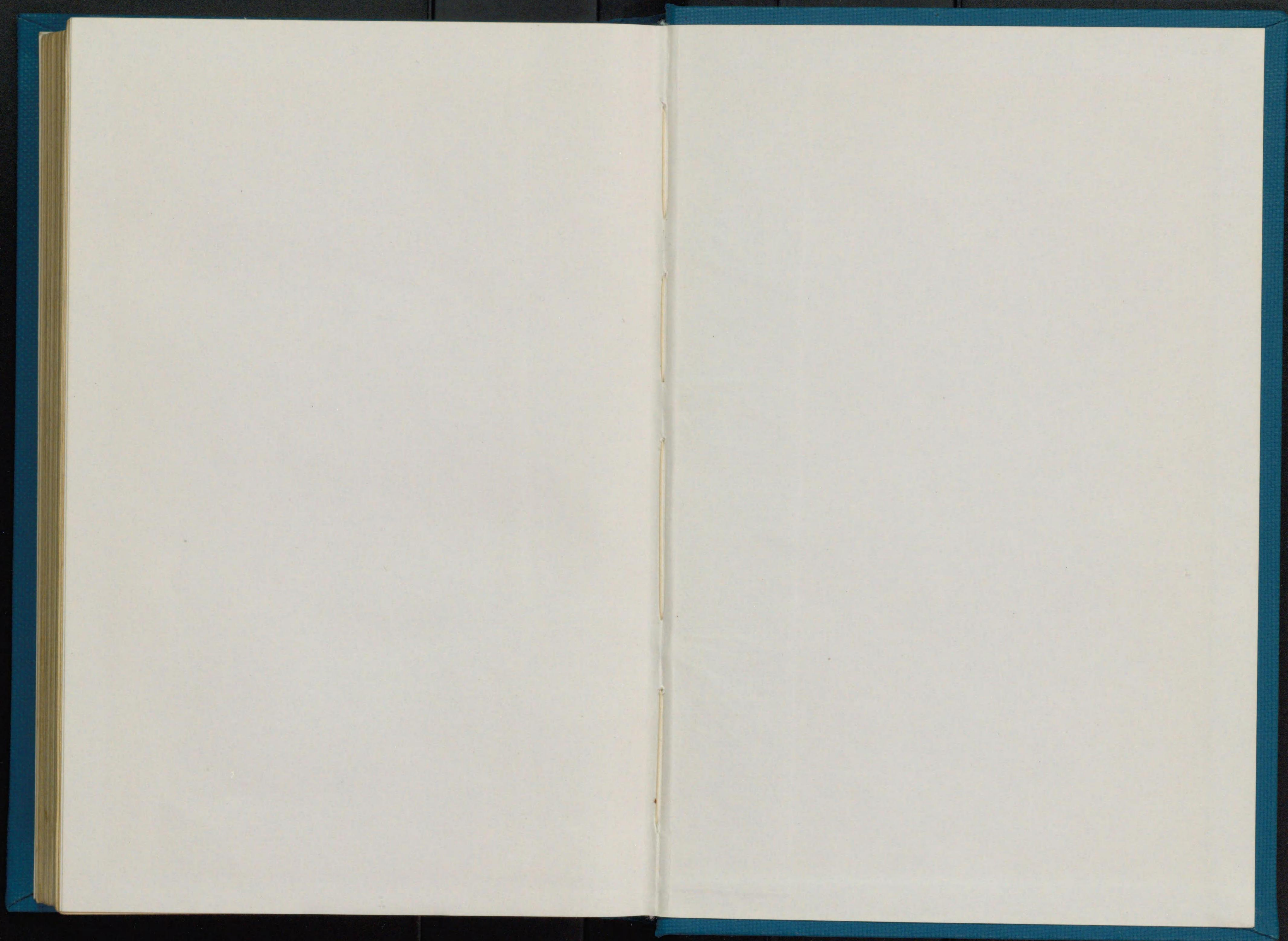


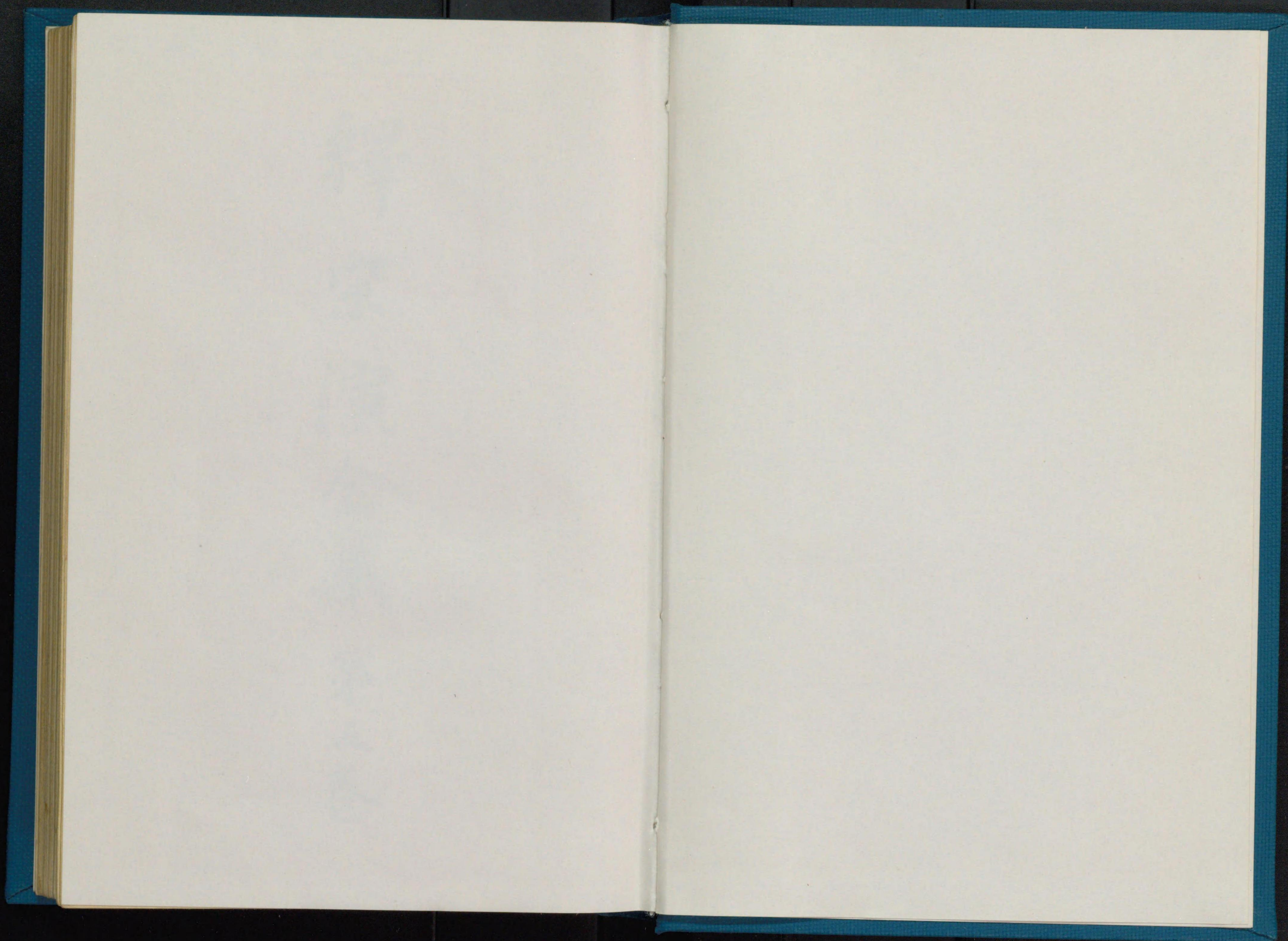
598-1



1200501528741





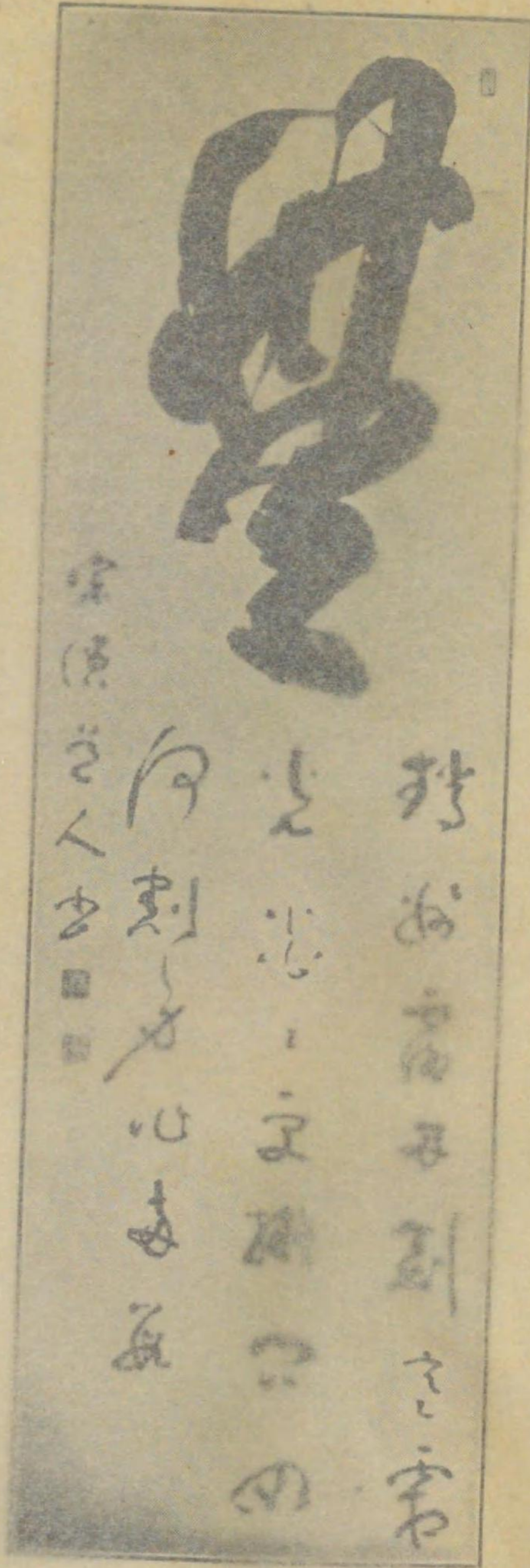
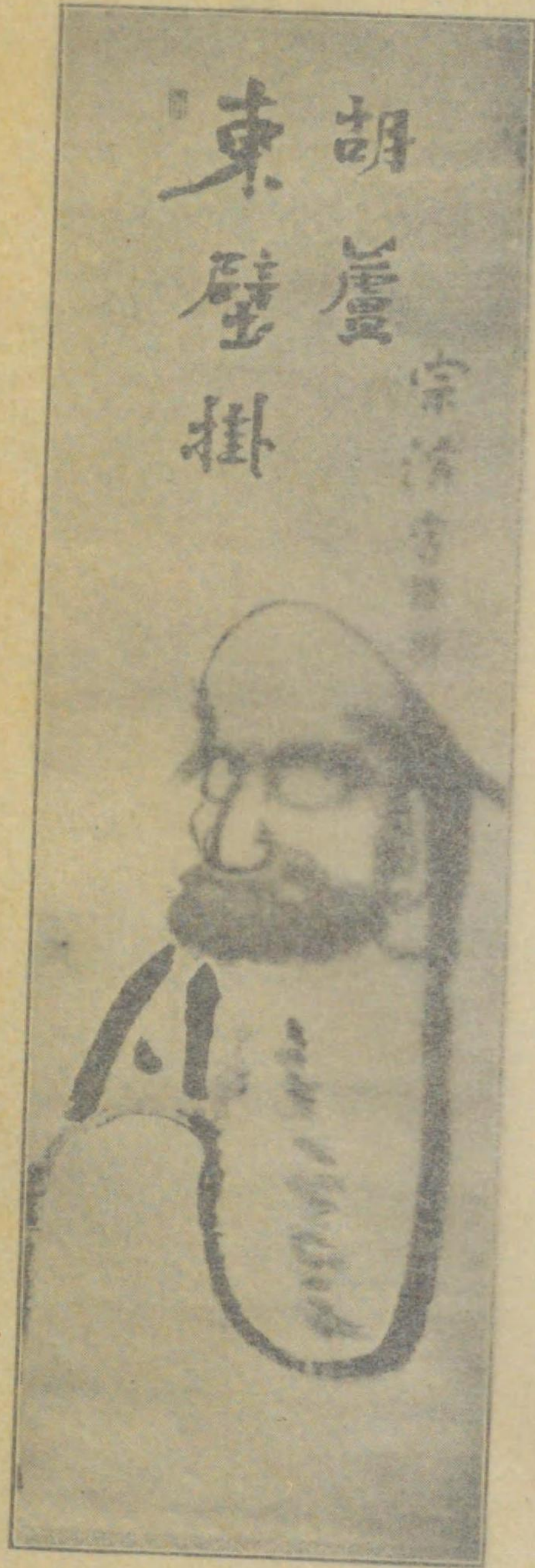


工R-24 598-1

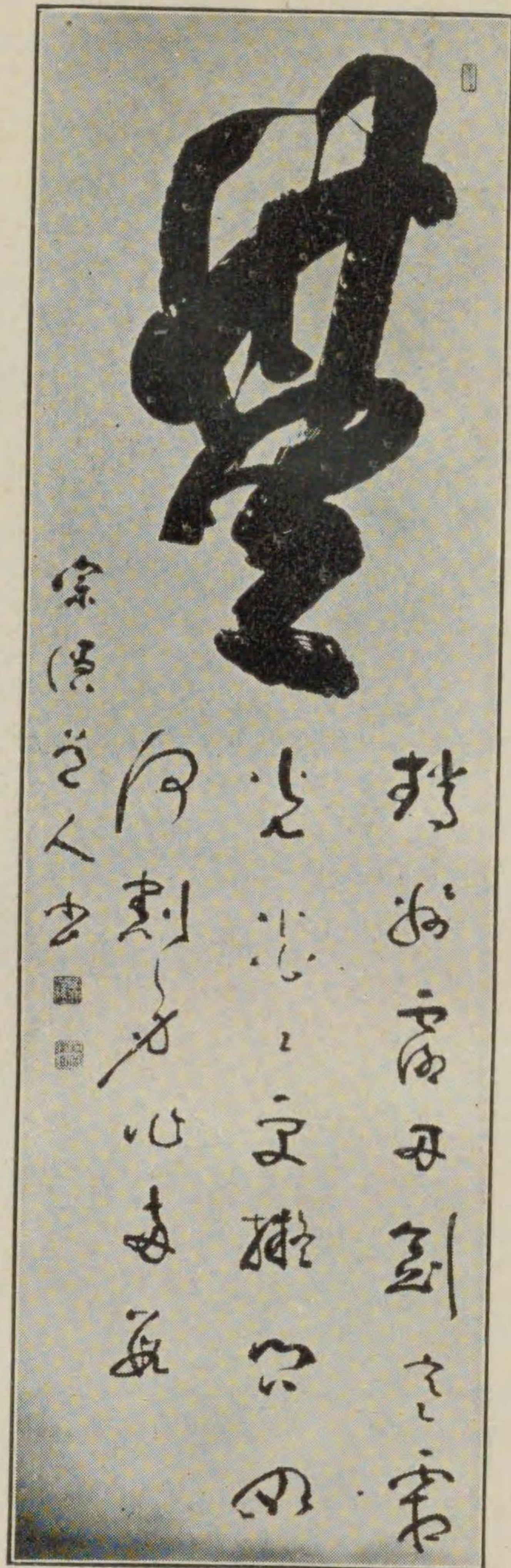
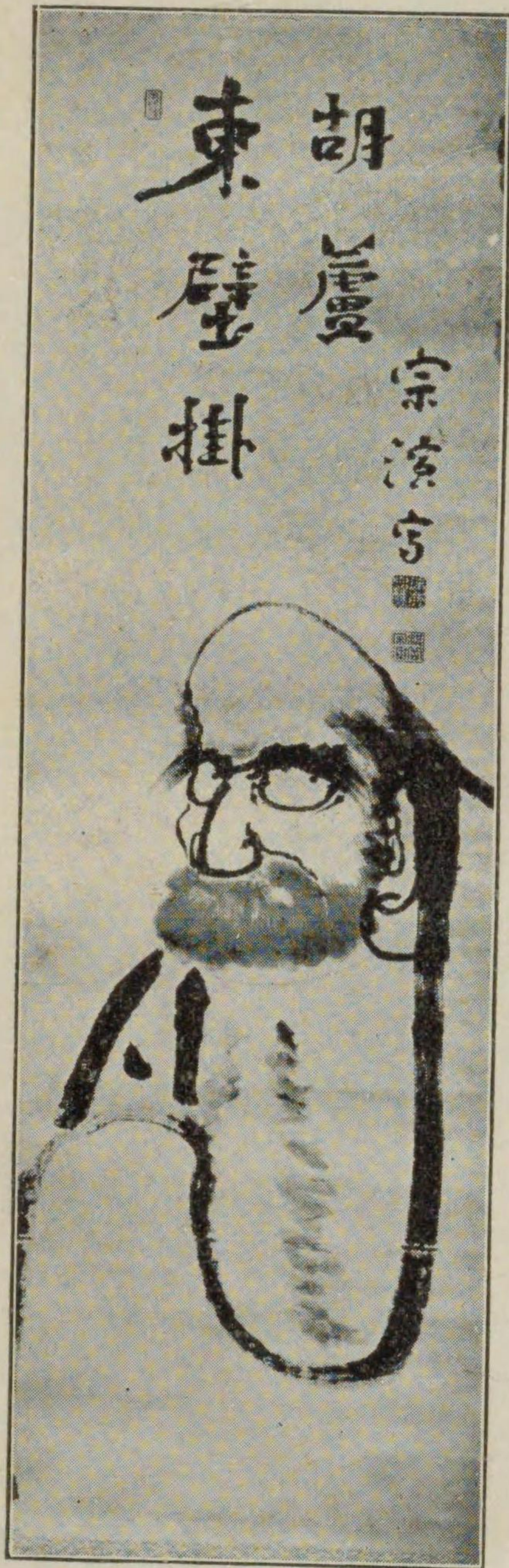


釋宗演全集 第五卷





宗漢さく



598-1

無門關講話 目次

| | | |
|-------|------|----|
| 緒 | 言 | 三 |
| 表 | 文 | 五 |
| 禪宗無門關 | | 二 |
| 一 | 趙州狗子 | 二七 |
| 二 | 百丈野狐 | 三 |
| 三 | 俱胝豎指 | 六 |
| 四 | 胡子無鬚 | 六 |
| 五 | 香嚴上樹 | 七 |
| 六 | 世尊拈花 | 八 |

| | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 三〇 | 二九 | 二八 | 二七 | 二六 | 二五 | 二四 | 二三 | 二二 | 二一 | 二〇 | 一九 |
| 即 | 非 | 久 | 不 | 二 | 三 | 離 | 不 | 迦 | 雲 | 大 | 平 |
| 心 | 風 | 響 | 是 | 僧 | 座 | 却 | 思 | 葉 | 門 | 力 | 常 |
| 即 | 非 | 龍 | 心 | 卷 | 說 | 語 | 善 | 刹 | 屎 | 量 | 是 |
| 佛 | 幡 | 潭 | 佛 | 簾 | 法 | 言 | 惡 | 竿 | 槩 | 人 | 道 |
| | | | | | | | | | | | |
| 三三五 | 三三〇 | 二九八 | 二九二 | 二八五 | 二七八 | 二七二 | 二六六 | 二四八 | 二四二 | 二三五 | 二二九 |

| | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 一八 | 一七 | 一六 | 一五 | 一四 | 一三 | 一二 | 一一 | 一〇 | 九 | 八 | 七 |
| 洞 | 國 | 鐘 | 洞 | 南 | 德 | 巖 | 州 | 清 | 大 | 奚 | 趙 |
| 山 | 師 | 聲 | 山 | 泉 | 山 | 喚 | 勘 | 稅 | 通 | 仲 | 州 |
| 三 | 三 | 七 | 三 | 斬 | 托 | 主 | 庵 | 孤 | 智 | 造 | 洗 |
| 斤 | 喚 | 條 | 頓 | 猫 | 鉢 | 人 | 主 | 貧 | 勝 | 事 | 鉢 |
| | | | | | | | | | | | |
| 三三〇 | 二〇九 | 一九八 | 一八七 | 一七八 | 一六六 | 一五五 | 一四四 | 一三三 | 一一〇 | 一〇四 | 七 |

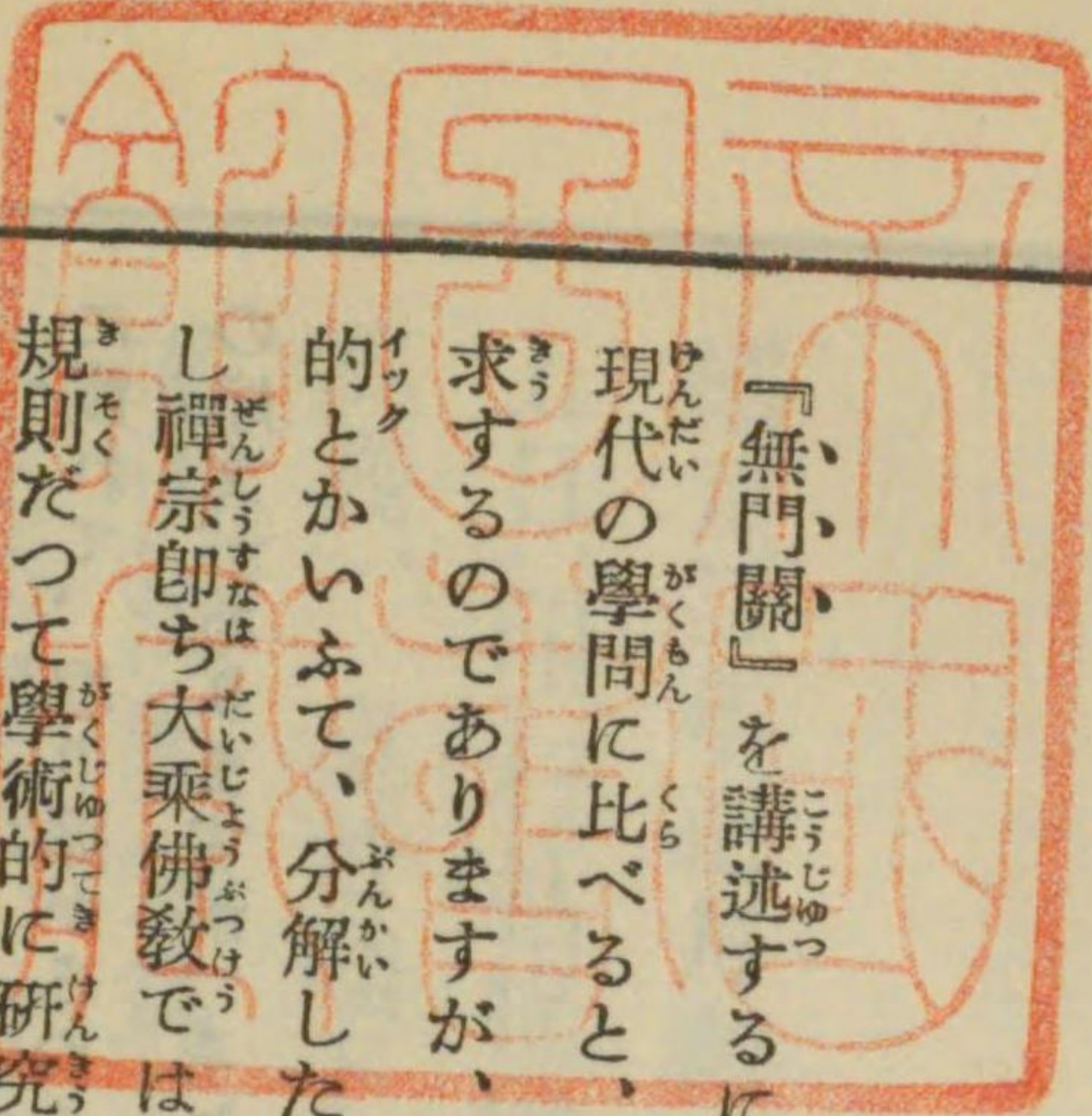
| | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 四八 | 四七 | 四六 | 四五 | 四四 | 四三 |
| 乾 | 兜 | 竿 | 他 | 芭 | 首 |
| 峰 | 率 | 頭 | 是 | 蕉 | 山 |
| 一 | 三 | 進 | 阿 | 拄 | 竹 |
| 路 | 關 | 步 | 難 | 杖 | 筇 |
| | | | | | |
| 四〇二 | 四〇三 | 三九九 | 三九四 | 三九〇 | 三六六 |

| | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 四二 | 四一 | 四〇 | 三九 | 三八 | 三七 | 三六 | 三五 | 三四 | 三三 | 三二 | 三一 |
| 女 | 達 | 耀 | 雲 | 牛 | 庭 | 路 | 倩 | 智 | 非 | 外 | 趙 |
| 子 | 磨 | 倒 | 門 | 過 | 前 | 逢 | 女 | 不 | 心 | 道 | 州 |
| 出 | 安 | 淨 | 話 | 窓 | 栢 | 達 | 離 | 是 | 非 | 問 | 勘 |
| 定 | 心 | 瓶 | 墮 | 櫺 | 樹 | 道 | 魂 | 道 | 佛 | 佛 | 婆 |
| | | | | | | | | | | | |
| 三七九 | 三七二 | 三五五 | 三六一 | 三五七 | 三五二 | 三三八 | 三四四 | 三四一 | 三七七 | 三三二 | 三五五 |

無門關講話

聖智聖聖聖聖聖聖聖聖聖聖
有也也也也也也也也也也也也
山嶽嶽嶽嶽嶽嶽嶽嶽嶽嶽嶽嶽
谷田田田田田田田田田田田田
道道道道道道道道道道道道道

道道道道道道道道道道道道道



緒言

「無門關」を講述するに當り、先づ一言して置くのは、佛教の中でも、禪宗は様子が異つてゐるが、現代の學問に比べると、一層其様子が違ふてゐます。凡そ佛教にしる、科學にしる、何れも眞理を探求するのでありますが、其眞理の捜し方にも二様あります。現今所謂科學と言はるゝ方では、科學的とかいふて、分解したり、組織したり、系統附けたりして、眞理を探求して往くのであります。併し禪宗即ち大乘佛教では、實に不規則、尤も不規則といふても、規則を無視する譯ではありませぬ。規則だつて學術的に研究するのではなく、全く實行するので、直覺的に眞理に接しようとするのであります。即ち禪宗などは、直覺的に、直接眞理に我が心が相應することを覺知するのを以て、本領としてゐるのであります。例へば火は、何んの作用に依つて熱いか、水は何んの作用で冷たいかを研究するのが、科學の遣り方でありすが、禪宗は水を飲んで冷しと感知し、火に觸れて熱しと覺知するので、冷たいとか、熱いとかいふ講釋は、後廻しとして、直ちに冷熱を自覺せしむる方針を執つてゐ

無門關講話

るのであります。去ればこれは禪宗、これは何といふてゐるのは、全く其道程で、眞理に到達してしまへば、眞理に二つはないのであります。禪の書物を讀んだり、禪の講話を聞かうとするには、先づ此ことを心得て置かねばなりません。洵に禪宗の話は、バツとしてゐますし、不規則でもありません、捉へやうがありません。併し其中に眞理の光りが、チラ／＼として輝いてゐますから、其眞理の光りに觸れて、取り遁がさぬやうにして往かねばなりません。さて此「無門關」の初めに、習庵といふ人の序文がありますが、それは略することにします。

辭言

表 文

紹定二年正月初五日恭遇 天基聖節、臣僧慧開預於元年十一月初五日、印行拈提佛祖機緣四十八則、祝延 今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬君、四海樂無爲之化。

慈懿皇后、功德報因、佑慈禪寺前任持傳法臣僧慧開謹言。

(訓讀) 紹定二年正月初五日恭しく天基の聖節に遇ふ。臣僧慧開預め元年十一月初五日に於て、佛祖機緣四十八則を印行拈提して、今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬歲を祝延し奉る。皇帝陛下恭しく願くば、聖明日月に齊く、

叡算乾坤に等く、八方有道の君を歌ひ、四海無爲の化を樂まんことを。
慈懿皇后、功德報因、佑慈禪寺の前の住持傳法の臣僧慧開謹言。

これは「無門關」を奉る時の表文であります。往昔は天子様の御祝日には、臣下は種々の品物を奉獻しました。宗教家ならば、種々の書物を作つたり、或は表を奉つたり、或は經典を書寫したりして、之れを獻納し、天子様の御祝日を御祝ひしたのであります。此「無門關」を著作しましたのも矢張其天子様の聖節を祝する趣意で、拵えたのだと慧開禪師自ら此表に言ふてゐます。紹定二年は、宋朝の理宗皇帝の年號であります。其紹定二年の正月の五日に、恭しく天基の聖節に遇ふた。即ち天子様の御祝日に限つて、天基の聖節といふので、此時の聖節は、丁度天子様の即位の日に當つてゐます。此聖節に遇ひ奉つた臣僧慧開は、此「無門關」を作つたので、慧開自身の名を出したのであります。「臣僧」は、支那の書き方で、印度の律部に依りますれば、一端出家したものは、國王天子に對しても、決して臣とは言はず、又親に對しても子とは言はぬ定めであります。支那の風習に依つて、「臣僧」といふたのであります。普天の下、卒土の濱、總て王土に非ざるなく、如何なる者も、此王者に對しては、臣といふのが、支那に於ける定めであります。さて此慧開といふ人は、「無門關」を作つた無門開道者のことでありまして、其無門開道者が説いたところの語を、宗紹といふ人が、編纂

したのであります。無門開道者は、月林禪師の法嗣で、「續傳燈錄」に其傳記が掲げてあります。此無門開道者は、名を慧開といふて、外見は更に構はぬ世に所謂道者の風采でありました。初め道を禪に求め、心を潜めて思禪しましたが、「狗子無佛性」の話に遇ふて、疑團「無」の一字に集り、六年間といふもの、此「無」の門を開かうと思ひました。世には禪といふものは、面白さうだから、鳥渡遣つて見やうなどいふて、禪堂に入り來る者も尠くないが、これは飛んでもないことで、凡そ物に當るには、其志願鐵石の如く、其熱心寢食を忘るゝといふやうに、眞劍で取りかゝらねばなりません。此無門開道者の如きは、僅に一無字の爲めに、六年の月日を費して、熱心に「無」の門を開かうとしましたから、食時を報ずる太鼓の音を聞いて、豁然として無門を開いたのであります。其無門の開けた時は、桶の底の抜けたやうに開かれ、直ちに愉快なる一偈頌を吐きました。

青天白日一聲雷、大地群生眼豁開、
萬象森羅齊稽首、須彌踔跳舞三臺。

といふのが、其時の偈であります。何んと痛快な偈ではありませんか。其後密かに修めて、大道の蘊奥を究めました。此無門開道者の蒐めた四十八則を掲げ編んだのが、即ち「無門關」であります。臣僧慧開が預じめ紹定元年十一月五日に、此書を作つたといふことが、次ぎに書いてあります。「印、行拈提佛祖機緣四十八則、祝、延、今、上、皇、帝、聖、躬、萬、歲、萬、歲、萬、歲」と佛祖の教へ四十八則を提出して、皇帝

陛下の萬歳を祝すといふたのであります。此處で心得て置かねばならぬことは、吾々が宗教とは甚麼ものであるかと、突然問題を發したら、何んと答へませう。西洋は西洋、東洋は東洋で解釋がありません。そして各多少の理屈を言ふてゐますが、柄は恚う考へる。凡そ世の中で、眞理としてゐる宗教なら、其定義を下せば、必ず一致する所があります。今其定義を一言にして現はせば、宗教とは宇宙と自己との一致を發見するものであるといふに過ぎませぬ。勿論之れを擴げていへば限りがあります。絶對無限なるもの、所謂不生不滅の眞理を立て、其活きた眞理に、自身がピッタリ一致するところまで進む、所謂宇宙と自己と同化した境界に達せねばなりません。これが即ち眞の宗教であります。佛教に、自力門とか、他力門とかいふのは、人々の根機に依つて分つたもので、向ふから來て一致に爲るのは、他力的一致、又自分から進んで一致に爲るのは自力的一致であります。我が禪宗の如きも、自ら眞理に對向して進み、一切の事物を、自分の方へ引き附けて、眞理に一致させようとするのが、佛の本懷であります。併し此自力、他力といふのは、佛の本懷でなく、眞理に一致させようとするのが、佛の本懷であります。富士山に登るにも、其道筋は、大宮口とか、御殿場口とか、吉田口とか種々ありますが、其道筋は目的ではなく道程に過ぎませぬ。要は登り詰めるといふことにあります。去れば頂上に到り達して見れば、全く變りはないのであります。我が禪宗でも、本來の面目とか、法性とか、菩提とか、涅槃とか、限りなく効能を現はした名目がありますが、學問に依れば、直

ちに事實に遠ざかつて來ます。依つて古人は段々と工夫を凝して、其眞理なるものを人間に接近せしめて了しました。即ち之れを人格に用ゐて現はしたと言へば、今上皇帝と爲ります。此今上皇帝を見付ける。誰れも彼れも共通に頂いてゐます。活きた今上皇帝陛下に、御目にかゝらうといふこととであります。事實に於て言ひ現はしますれば、吾々は日本の勅聖文武此上もなき今上天皇陛下の臣子たるものであります。即ち天皇陛下は、禪宗の一番最初に見付けようと思ふ目的に爲る御方であり、其處で今天基即位の聖節に遇ふて、聖壽の萬歳を祝する爲めに、佛祖の教へ四十八則を提擧したといふのであります。『皇帝陛下恭願、聖明齊二日月、敕算等二乾坤』と、眞に至尊の光明は、日月の光りよりも明かに、陛下の聖壽は、天地日月と共に窮りなく、千代八千代萬歳萬々歳なりと祝したのであります。『八方歌有道之君、四海樂無爲之化』とは、四海悉く陛下の德遍くして、其有道の德を喜び歌はざる者なく、天下到る所其德化を蒙りて、其仁政を樂まざる者はないと、皇帝の德を讃稱したのであります。之れ即ち禪宗の悟りで、悟りといふても、別に遠い所にあるものを掴んだといふのでもなく、何か或る物を捉へ得たといふのでもなく、至極近い、至極易い所にあるものを、容易に我が物として了つたところにあるのであります。『慈懿皇后、功德報因、佑慈禪寺前住持傳法臣僧慧開謹言』とは、理宗皇帝の母慈懿皇后が、功德の爲めに建立した佑慈禪寺の前の住持である傳法の臣僧慧開が謹んで言上すると名を記したのであります。因みに慈懿皇后は、寧宗皇帝の母で、即ち光

宗皇帝の皇后だといふ説もあります。

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '宗' and '帝'.

禪宗無門關

禪宗といふ宗旨は、達磨が九年間説法してゐたが、禪宗の説法といふものは、一向舌を動かさぬ説法で、併し唯黙つてゐたかといふに、黙つてゐたのでなく、矢張説法してゐたのであります。説法といふたところで、敢て舌の説法ばかりが、説法ではありません。口業説法があれば、身業説法もあり、又意業説法もあります。だから禪宗の禪定三昧が、直ぐさま説法といふものであります。吾々が舌を振つて、禪宗の活きくしたことを説かうと思ふても、却つて眞理に遠ざかつたことに爲ります。そして此禪宗といふことは、世間の科學のやうな學問と思ふてゐるものがあるが、之は大なる間違ひであります。佛の心を以て、心として見た以上は、之れは禪宗、彼れは何宗と差別すべきものではありません。併し後世分業と爲りましては、互に専門を立て、分擔せねばなりません。此場合に於ては、禪宗といふ語も、佛心といふ語も、退くべからざるであります。元來禪宗といふ名は、不知不識の間に出來たので、教外別傳といふてゐます。教外別傳といふのは、一切經の外に禪宗はない。

禪宗の外に各宗もない。佛教が即ち禪宗、禪宗が即ち佛教と爲つて了ふたのであります。「無門關」とは、佛法は奥座敷が廣いから、入り口が種々あります。ところが禪宗の入り口は、門の無い所に入り口があります。門は出入の口であるけれども、其門がないならば、出入の口もない筈であります。其出入の口のない所に、入り口があるといふのであります。之れは何んといふたとて、語弊は免かれませぬ。唯關門の無い所に、入り口が開いてゐるといふことで、去れば親しく其入り口を尋ねて、實證するより外致し方はないのであります。

無門關

佛語心爲宗、無門爲法門。

(訓讀) 佛語心を宗と爲し、無門を法門と爲す。

此序分の初二句は「楞伽經」の文であります。此文の意味は、敢て「楞伽經」ばかりでなく、他の經にもあるやうであります。而して此「佛語心」とある語の字は、此處では極めて軽く見て、「佛語心」を直ぐ佛心と見て可い。其處で禪宗と言はるゝ宗旨の宗とするところは何かといふに、「佛語心」を以て宗とする。即ち佛心をば眞の宗とするのであります。何にも其宗とするところを、遠方に持つて行つて捜すには及ばぬ、極めて手近いところにあるのであります。吾々は寢ても覺めても、常に其佛心の中にあります。吾々が臥たり、起きたり、食つたり、働いたりしてゐるのも、全く此佛心の中に於てしてゐるのであります。故に吾々は、其宗とする佛心を求めさへすれば宜しい。言ひ換へれば吾々が常に棲息してゐる佛心を求めるのであります。去れば禪宗は何を宗とするかと言へば、佛心即ち心を宗とする宗旨であるといふのであります。次の「無門爲法門」といふのは、無門の入口の無いところを以て法門とするので、右から這入れとも、左から這入れとも、何うして這入れとも、恚うして這入れとも言ひませぬ。全く入口の無い所から這入るのだから却々難しい。普通ならば、聲聞の者は四諦の門から這入れ、緣覺の者は十二因縁、菩薩の者は六度萬行と、其門戸を指示してやるのだが、

禪宗に於ては、其入口が一定して居らぬから其入口を教へる譯には往かぬ。さア這入れ、何處からでも這入れ、別に門はないぞ。其門の無いところが、禪宗の禪宗たる法門であります。爰に至りては却々筆端を以て、能く其消息を傳ふことは能きませぬ。例へば他の宗義などでは、佛とは何んぞと問へば、佛は自覺覺他覺行共滿のものだとか、或は悲智圓滿のものだとか、種々に其門戸を開いて示すけれども、禪宗では其門戸が無いから、「云何か是れ佛」と問ふても、單に「佛」と反覆して答へるより外はありません。併しこれで充分の答へであります。恁く禪宗は其無門の所に於て、入口を求めて這入り込むを以て、眞實法門とするので、若し之れに門を造つて與へたならば、蛇を畫いて足を添えるやうなものであります。

既は無門、且作麼生透、豈不見道、從門入者、不是家珍、從緣得者、始終成壞。

(訓讀) 既に是れ無門、且く作麼生か透らん。豈に道ふことを見ずや、門より入る者は、是れ家珍にあらず、緣に從つて得る者は、始終成壞すと。

既に是れ無門であるが、其無門を如何にして這入るかといふに、無門であるからといふて、他に門を求めて這入らうとするな。矢張無門の所から這入り込めといふのであります。豈に聞かざるや門より入る者は家珍にあらずといふことを。是れ岩頭和尚の格言でありますが、岩頭和尚が、雪峰和尚を取立てる時、喝して門より入る者は家珍にあらずと言はれました。恁ういふ學問をして、恁ういふ修行をした。何んの經に恁うある、何の學者が恁う言ふたといふのも、或は寶でありませう。けれども自家の寶ではありませぬ。何んの學問、何んの修行、又は何の學者は恁う言ふた、何の經には恁うあるといふのは、畢竟是れ門より入るものであります。恁く其門から入つたのは、同じ寶でも、自家の寶ではありませぬ。斯る寶は、自己の腑肉とならぬ寶であるとして、岩頭和尚は門より入る者は家珍にあらずと喝したのであります。實に痛快極まる一喝であります。總ての眞理を活かして働かすには、自家の寶を持ち出し、自己の腸から取出して、天を蔽ひ、地を蓋ひ去るべしといふ氣焰であります。

「縁に従つて得る者は始終成壞す」といふも又之れと同意義であります。縁に従つて得る者は、即ち或る縁といふ門に依つて得る者、是れ「從門入者」の徒輩であります。因縁に依りて得たる者には始終あり成壞ある、眞理は絶對であつて始終なく、成壞なきものであります。眞理は不生不滅不成不壞で、一切の時、一切の處に於て、歴劫常存するものであります。去れば佛心を得んとする者は、縁なる門を尋ねて入るな、無門の所から入りて佛心を求め、以て自家の寶とし、自己の腑肉とせよといふのであります。若し恁う言ふと、其無門から入れといふ無門は、又無門といふ門ではないかと難する者もありませんが、それは語弊といふもので、説明する時には、恁ういふより外仕方がない。最う此處に至りては、言説も之れ門と爲る。宜しく點するに如かずであります。

恁麼說話大似無風起浪好肉剗瘡、何況滯言句覓解會、掉棒打月、隔靴爬痒、有甚交涉。

(訓讀) 恁麼の說話は、風無きに浪を起し、好肉に瘡を剗くるに似たり。何んぞ況んや言句に滯りて、解會を覓むるをや。棒を掉つて月を打ち、靴を隔て、痒きを爬く、甚の交渉か有らん。

「恁麼の說話」といふのは、之れから後の本文に擧げたる四十八則の公案を指すのであります。恁く四十八則並べては見たけれども、之れ全く風無きに浪を起し、好肉即ち美しい肌を剗けるも同じである。即ち無門の所に門を立て、縁を與へるも同様であれば、徒らに眠るが如き靜穩な海面に波浪を起し、美しい肌に瘡を付けるやうなものである。古人は佛と言つてすら、口を漱ぐこと三年せよと言つてゐます。既に佛とか、神とか言へば、佛に遠ざかり、神に遠ざかる、絶對の眞理は、到底吾の口説を以てすることは能きぬ。況して其言句に滯つて、其言句の解釋など覓めてゐるなど、言へば、層一層眞理に遠ざかつて、終に言句のみ見て、眞理は獲べからざるのであります。是れ恰も棒を取つて、月を指せば、其月を認めずして、唯棒のみ守つて月と思ひ、靴を隔て、痒きを爬くが如く、眞の月も認めず、眞の痒き場所をも爬かぬのであります。恁ういふ風に記してあつたと、其言句に滯

つて、言句のみを解釋し得たからとて、其言句のみ見て居つて、益々眞理に遠ざかるといふことは、實際の上に能くある例であります。去れば學問をすればする程、疑問が増すばかりで、其疑問を解決しようとする研究すれば、又疑問を増長するばかりで、到底今の學問位では、其疑問を解決し盡すことはできませぬ。恠く其言句に滯れば、其眞理に遠ざかるのみならず、又其言句其物も正しく解釋できなく爲るので、眞の月を認むることもできねば、又眞の指をも見ることもできぬのであります。去ればとて其指を以て示さなければ、月を示すこともできませぬ。已むを得ず指を以て、其月の在り場を示すので、眞理は如何なるもの、恠く恠くなり示す言句を藉りねばなりません。其言句に絡まれば滯らず、言句に依りて言句を離れて求むるならば、眞理を捕捉することを得るのであります。故に一概に其言句や、文字や、學問を退くべきではないが、去りて言句文字を頼りとしてゐては、終に眞理は遠く去つて得べからざるのであります。

慧開紹定戊子夏首衆于東嘉龍翔、因衲子請益、遂將古人公案、作敲門瓦子。隨機引導學者。

(訓讀) 慧開は紹定戊子の夏、東嘉の龍翔に首衆たり。因みに衲子請益す。遂に古人の公案を將つて、門を敲くの瓦子と作して、機に隨つて學者を引導す。

『紹定戊子』は紹定元年であります。『東嘉』は地名で、『龍翔』は寺號であります。即ち慧開無門道者は、紹定元年の夏に、温州永嘉縣の東嘉といふ所に在る龍翔寺といふ寺の首座を占める身に爲つたと、自ら言ふてゐるのであります。其時寺内の衆僧が、寄り集つて、教へを請ふて熄まなかつたから、風無きに浪を起すに似たことだが、遂に古人の公案を將つて、衆僧に示し、以て門を敲くの瓦子としたのであります。元來此公案といふのは、心を明かにする手段でありまして、決して公案其ものが目的ではありませぬ。之れを目的とすると、終に指を見て月とする誤りに墮ちます。公案の言句形式に心を奪はれて、公案の指し示す月を失ふやうでは、眞の學者ではありませぬ。古人の公案は、全く國家の憲法のやうなもので、國家の憲法は正しき政を布き、國家を治むるの手段でありますれば、其時勢に鑑みて、之れを發せねばなりません。公案も心を明かにする爲めの瓦でありまして、其門を敲く

瓦子たるに過ぎませぬ。故に人々其面貌の異なるが如く、其根機差別するを見、其機に随つて、公案を授けねばなりません。今我れ慧開も、衆僧の爲めに、古人の公案を將つて、門を敲くの瓦子と爲し、其機に随つて、之れを授け以て學者を引導したと「無門關」四十八則の由來を述べたのであります。

竟爾抄録不覺成集、初不以前後叙列、共成四十八則、通曰無門關。

(訓讀) 竟に抄録するに覺えず集を成す。初めより前後を以て叙列せず、共に四十八則と成す。通して無門關と曰ふ。

「爾」は助字で讀まぬで可い。竟に古人の公案を擧げて示し、以て之れを抄録したるに、覺えずして爰に一集を成したのである。元より其初めよりして、前後を考へ、章段を分別して作つたのではない。問ふに従つて向ひ、向ふに従つて説き、説くに從つて記録したので、一向規則立つた系統とか、組織とかいふものがない。之れが禪宗の禪宗たる所であります。勿論禪宗は前章にも説いた通り、言句文字を用ゐないのであります。學者が門を敲く頼りにもがなと思つて、前後を顧みず問ふに従つて對へたものを叙列したに、覺えずして四十八則を得たのであります。四十八則は我が禪門に入るべき四十八手であります。此四十八則を通じて「無門關」と名付けたのであると、正しく「無門關」の出來上つた來由を述べたのであります。

若是箇漢、不顧危亡、單刀直入。八臂那叱攔他不住、縱使西天四七、東土二二三只得望風乞命。

(訓讀) 若し是れ箇の漢ならば、危亡を顧みず單刀直入せん。八臂の那叱他を攔れども住らず、縱使西天の四七、東土の二二三も、只風を望みて命を乞ふを得ん。

『若し是れ箇の漢』は、元來『漢』とは惡漢とか、無賴漢とかいふ罵詈の言葉に爲つてゐますけれども、此處では心ある底の者といふことに見れば可い。それで學者の中でも、少し氣の利いた者で、眞に眞理を探らうといふ心ある底の者ならば、其危險をも敢て顧みず、猛進して單刀直入するであらう。『單刀直入』は、一と振りの刀刃を揮ふて、猛然進入する形であります。恠く身の危險を冒して單刀直入すれば、其勢ひ猛にして、『八臂の那叱』は、四面八臂の大力鬼王のことで、其大力鬼王の力を以て、遮り止めやうとしても、遮り止むることは能きぬ『縱使西天の四七』とは、西天は天竺のことで、四七は摩訶迦葉より初祖達磨大師に至るまで、四七即ち二十八祖といふことで、又『東土の二三』とは、東土は支那のことで、初祖達磨大師から二三が六祖の慧能禪師までといふことであります。それで縱使西天印度の迦葉尊者より達磨大師まで、四七二十八祖の祖師でも、支那東土の達磨大師より、

二三が第六祖の慧能禪師までの列祖と雖も、寄り附くことも能きぬ勢ひである。是れ即ち明眼の學者が、眞理を探求する状態で、外魔も窺ふべからず、佛祖も近づくべからざる有様であるといふのであります。

設或躊躇、也似隔窓看馬騎。貶得眼來、早已蹉過。

(訓讀) 説し或は躊躇せば、也た窓を隔て、馬騎を看るに似たり、眼を貶得し來れば、早く既に蹉過せん。

併し明眼の漢に反して、物事に躊躇、逡巡する愚昧遲鈍の漢ならば、眼前に來る眞理をも能く捕捉することは能きぬ。恰も窓を隔て、競馬でも見てゐるやうなものである。「貶」は目叩きすることであり、ちらつと見たかと思ふと、馬は既に遠くに走り去つて、其相をも止めぬといふのであります。來たかと思へば、早くも既に馬は去つてあらざるが如く、公案などを頼りにしてゐるから、來る所の眞理も、唯一寸其顔を見せたばかりで、愚圖々々してゐる中に、眞理は遠く去つて、再び來らず、終に眞理を捉ふることは能きぬ。去ればといふて、猛然進み、單刀直入の勢ひなき故、斯る底の者は、斯の道に入るに能はず、チラと眞理の影を見た位で、茫然としてゐる中に、眞理は遠く過ぎ去つて了ふのであります。

頌曰

大道無門、千差有路、透得此關、乾坤獨步。

(訓讀) 頌に曰く、大道門無く、千差路有り、此關を透得すれば、乾坤に獨歩せん。

「頌」は、梵語の伽陀でありまして、別に題を立てずして句を作り、其中に廣き意義を含蓄して、諷誦に便ならしめたのであります。或は之れを偈とも稱します。今此「大道門無く、千差路有り、此關を透得すれば、乾坤に獨歩せん。」の四句の頌は、前からの序に述べ來つたところの意義を、包含して漏すことなく、一括して能く言ひ表はし盡してゐるのであります。天下の大道は士農工商、上は萬乗の大君より、下は萬民百姓に至るまで、誰れも獨歩して通り得る大道である。眞理は亦然り、天地到處所に遍在して、誰れも遠慮なく捉へ得る眞理、時間に亘りて邊際なく、空間に涉りて邊際なき眞理であります。誰れでも通り得る大道であるから無門であります。平等の方面から言へば、大道無門であるけれども、差別の方面から見れば、千差路ありて、汽車路あり、電車路あり、馬車路あり、人車路あり、又人の通る路ありと言ふやうに、平等に即した差別あり、差別も永く差別されてゐるのでなく、差別に即した平等があるのであります。若し平等でも、平等のみに傾いて、差別の即することを

知らねば、悪平等といふものに爲つて了ひます。眞理の大道は、實は平等無門であるが、其平等無門の裏面を見れば、千差門ありであります。此門を見得るものありや。此門は肉眼では見られませぬ。二つの眼球があつても及びませぬ。此門を見るには、唯一隻眼を以て見るのであります。一隻眼は心眼のことで、心眼を以て眞理の裏面から觀察すれば、萬別千差の門があるのであります。故に若し此關を透得すれば、乾坤に獨歩することが能きるのであります。一隻眼を以て、無門の門を看破し去り、大手を振つて、此門を通過し、宇宙の眞理を自己掌中に握り込んで了へば、天下に敵なく、乾坤何れの所にか、我れに對するものあらんやで、我れは實に宇宙の主人公であります。これで「無門關」の序文だけ終りましたから、次ぎに本文に入るのであります。禪宗は文字上の解釋では、其全幅を披瀝することが能きませぬ。此處が不立文字の所で、若し文字上で悟りが得らるゝならば、此後の「無門關」四十八則と言はず、此中の一則でも解することが能き者は、悟り得られるのであります。悟りは文字以上の所にあるのであります。文字の上のことは、實參する時の助けとするに止まつてゐるのでありますから、我が禪に志ある者は、須らく實參實究を旨とし、文字に拘泥せぬやうに希望するのであります。要するに禪は、坐る所に利益があります。

一、趙州狗子

趙州和尚、因僧問、狗子還有佛性、也無、州云無。

(訓讀) 趙州和尚、因みに僧問ふ。狗子に還つて佛性有りや。也た無きや。州云く無。

先づ初めに説いて置くことは、「無門關」四十八則の中で、此無字の一則を冒頭に掲げたのは、大いに理由があります。「無門關」といふ表題も、之れから來てゐまして、四十八則一々評がありますが、就中無字の評が、簡潔にして要を得てゐるといふて、古人も讚歎してゐます。趙州和尚の所に、僧が出て來て問ふて云く、

「狗子に還つて佛性有りや、也た無きや。」と、狗を代表に出したのであります。佛は一切衆生悉く如來の智慧徳相を具有してゐると明言せられてゐるから、此僧はそれを擔いでゐます。蛆虫にも佛性

ありといふのでありますから、彼のキャン／＼鳴いてゐる狗の子にも、佛性がありませうかといふ問ひであります。すると趙州和尚は「無」と言ひました。「無」は無といふ字であります、それでは無いといふことか、有無の「無」か、斷無の「無」か、何ういふ「無字」でありませうか。菩提とか、涅槃とかいふても不可ぬ。佛陀とか、神とか言ふても不可ぬ。趙州は「無」と切り出しました。ところが此僧は一向眼が明いて居らぬから仕方がない、佛性は無いと言はれたものと取つたから、理屈を言ひました。

「一切衆生皆佛性有りといふのが佛法の定則ではござらぬか。然るに今和尚は何故に無いと言はるゝか。」

と恚う言ふた。これでは話に爲りませぬ。有繋は趙州和尚で、

「伊は業識性の在る有るが爲めなり。」

と答へられました。又或る時一人の僧が、趙州和尚の所へ来て、先きの問題と同じく、

「狗子に還つて佛性有りや、也た無きや。」

と問ふと、今度は趙州和尚

「有」

と言はれました。これは又何ういふ譯か。此僧は、以前の僧とは反對に、無いといふことを擔いでゐ

るから、矢張り屈を言ひました。

「既に佛性の有るものが、何故に狗の腹などに飛び込みましたか。」

と。すると趙州和尚は、

「他の知つて故に犯すが爲めなり。」

と答へられました。「業識性」云々から「知つて犯す」の答話まで、趙州和尚の肚は何うか、無字を透過した上に於て、一々分明に穿鑿して見ねばなりません。唯一箇の無字であるが、此爲めには後來幾多の英雄豪傑が、皆悉く玉の汗を絞り、血の涙を滴らしました。「傳燈錄」を繕いて見ましても、屈指に違ありませぬが、其他或る時代の宰相とか、或る時代の將軍とか云ふ人々にしましても、此無字の爲めに、骨を折つた人は澤山あります。恚ういふ問題に爲ると、學問を以て當て簞めることも能かねば、又智慧を以て解釋することも能きませぬ。分別思想の範圍内で、捌かうと思へば、棒を揮つて月を敲き落さうといふのと同じであつて、到底及ばぬことであります。何うしても眞實參究して、透徹するより方法はありませぬ。先づ無門和尚の評を、とツくりと見るが宜しい。

無門曰、參禪須透祖師關、妙悟要窮心路一絶、

(訓讀) 無門曰く、參禪は須らく祖師の關を透るべく、妙悟は心路を窮めて絶せんことを要す。

暗照黙照の禪、此身此儘の悟りでは、物の用には立たぬ。佛祖の堂奥に至るには、一つく關門を透過した後でなければなりません。古則公案を見ない悟りは、多くは偽せ悟りに爲つて了ひます。世間の學問や道理は、智慧分別を以て、捌いて往くのでありますが、それは皆意識上の働きであります。ところが此處では心路を絶するといふてありますが、禪宗では、先づ最初に於て平等正位の當體、絶對界の眞ツ唯中に飛び込ませるので、此處に至つては、如何に智慧分別の力を振つたところで、到底届くべきものではありません。眞個骨を折つて、究め來り、究め去る時に於ては、何うしても心路絶する所まで行くのであります。大死一番すると言ふのも、此處の端的を言ふたのであります。眞實見性の眼を開くには、是非一回大死一番の境涯を經過せなければなりません。

祖關不_レ透、心路不_レ絶、盡是依草附木精靈。

(訓讀) 祖關透らず、心路絶せずんば、盡く是れ依草附木の精靈ならん。

白隱和尚は、此白隱の隻手音聲を聞かぬ内は、何を言ふたところが、皆糟妄想の塊りだと言はれてゐますが、如何なる玄妙の道理を覺えたといふても、如何なる有難い悟りを得たといふても、實際に祖師の關門を透過し、親しく大死一番、命根斷絶の境涯を経たのでなければ、皆無明の種子邪見の本に過ぎませぬ。草に依つたり、木に附いたりする化物とけなしてあります。

且道如何是祖師關、只者一箇無字、乃宗門一關也。遂目之曰禪宗無門關。

(訓讀) 且く道へ如何んか是れ祖師の關、只者の一箇の無字、乃ち宗門の一關なり。遂に之れを目して禪宗無門關と曰ふ。

一千七百則の公案は、皆祖師の關門であります。眞實悟つたか、僞せものか、邪か正かを辨別し、證明するには、古則公案の關門が是非なければなりません。孟嘗君が函谷關を越えるには、鶏の聲を眞似ても越えられぬことはなからうが、禪宗の關門は、口眞似などで通ふことは、決して許しません。先づ一番無字の關門を透過して見るが可い。只一箇の無字でありますが、此中には、佛の一代藏經、五千餘卷も、祖師の公案千七百則も、悉く含蓄してあります。そればかりではありません。森羅萬象天地間のこと一として具備して居らぬはない。去れば無字が直ぐに手丈夫に、吾が物に爲つたら、隨つて他の多くの關門も、一々分明に透過して行けなければなりません。「無門關」といふ表題の意義も、此處に於て明かに爲つてゐます。

透得過者、非但親見趙州、便可與歷代祖師把手共行、眉毛厮結、同一眼見、同一耳聞。豈不慶快。

(訓讀) 透得過する者は、但だ親しく趙州に見ゆるのみに非ず。便ち歷代の祖師と手を把りて共に行き、眉毛厮結びて、同一眼に見、同一耳に聞す可し。豈に慶快ならずや。

白隱和尚は、釋迦も彌陀も今に修行最中と言はれてゐますが、有難い語であります。一無字を嚙み破つたなら、趙州和尚に御目にかゝる位のことは何んでもない。達磨大師も、臨濟禪師も、今に息災で居られる。朝から晩まで、常に顔突き合せてゐることが分るのであります。一舉手一投足、悉く佛祖の當體、咳唾掉臂も皆祖師西來意と現はれて來ます。佛祖の見聞と、自己の見聞と、寸分も異りないといふ活きた眼が開き、活きた耳が具はつて來ます。此慶快眞個透徹し得て、始めて味ふことが能きるのであります。「厮」は相と同じ意義であります。

莫有要透關一底麼將三百六十骨節八萬四千毫竅、通身起箇疑團、參箇無字。

(訓讀) 透關を要する底有る莫らんや。三百六十の骨節、八萬四千の毫竅、通身に箇の疑團を起して、箇の無字に參せよ。

自分こそ一番徹底して無字を見破つて遣らうといふ健氣な輩があるとしたなら、何ういふ有様に工夫したものか、「三百六十の骨節八萬四千の毫竅」とは、孩兒が母の胎内に在りて、三百六十の骨節、八萬四千の毛孔を生ずと古書に見えます。それで三百六十の骨節も、八萬四千の毫竅も、皆通身の意味でありまして、此五尺の形骸頭のギリ／＼から、足の爪先まで、一個の大疑團、無字全提で一直線に進むのであります。

晝夜提撕莫作虛無會、莫作有無會、如吞了箇熱鐵丸相似、吐又吐不出。

(訓讀) 晝夜提撕して、虛無の會を作すこと莫れ、有無の會を作すこと莫れ。箇の熱鐵丸を吞了するが如くに相似て、吐けども又吐き出さず。

參禪工夫は、管に座布團の上ばかりには限りませぬ。又晝夜の隔てもありませぬ。起きる上、寝る上、應對の上、作務の上、一切時一切處に於て、無字三昧に成り切れといふのであります。古人も動中の工夫は、靜中の工夫に勝ること百千萬倍すと言つてゐます。工夫の仕方が鈍いと、種々の邪解を生じます。理の究むべきなく、言の陳ぶべきなく、手の付けやうがないから、只無といふより外はないとか、恚ういふ道理を言ふたものであらうとか、あゝいふ意味を現はしたものであらうとか、そんな推察見解では、到底無字は見えぬ。小信狐疑の死工夫を、百千萬年行つて見たところが、何んの役にも立ちませぬ。眞赤に焼けた熱鐵丸を口に入れたら、吐き出すことも、吞むことも何うも恚うも能きまいが、工夫も恚ういふ工合に行かねばなりません。進むに前なく、退くに後なく、進退維れ谷まるといふ所まで至つて、初めて一條の活路を見出すことが能るのであります。窮すれば變じ、變ずれば通するのは必然の道理で、何んでも一度窮し切らねばなりません。



蕩盡從前惡知惡覺、久久純熟、自然內外打成一片如啞子得夢、只許自知、驀然打發、驚天動地。

(訓讀) 從前の惡知惡覺を蕩盡し、久々に純熟して、自然に内外打成一片ならば、啞子の夢を得るが如く、只自知することを許す。驀然として打發せば、天を驚かし地を動せん。

本性を味まし、悟りを妨ぐる上に於ては、三毒五慾の迷ひは勿論であります。學問智慧に縛られてゐるのも、亦同じく迷ひであり、邪魔物であります。學問とか、見識とか、そんな物は、一端スツクリと打ち捨て、了ふが可い。惡知惡覺と激しい文字で退けてあります。此事は素より歲月の長短、時日の如何には關しないのであります。決して急速を貴びませぬ。要するところは、親切の工夫にあります。眞に純一無雜に骨折つて行く時には、恰も果物が熟するやうに、工夫が純熟して來るのであります。萬境が眼の前にちらついたり、妄念が少しでもあつたりする間は「打成一片」とは言はれませぬ。盡十方世界一箇の無字と現はれて來るところまで行らねばなりません。此處まで到る時に於ては、悟らうと思はないでも、悟りは自然と現前します。其時の境界に至りては、啞子が夢を見たのと同じで、人に話す譯には行かず、自分で成程と合點するより外はありませぬ。工夫の上は「久々

純熟』であるが、悟る時に當りては、『驀然打發』で、更に時刻は要しませぬ。得る時は一時に得るのであります。大死一番絶後に再び甦り來つて、豁然大悟すといふのも、此處の端的であります。『驚天動地』の働きは、皆此處から出て來るのであります。圓覺寺の開祖佛光國師の如きは、無字三昧に入つて、一日一夜呼吸の息が絶えて居つたが、首座寮前の板聲を聞いて、大悟したといふことであります。其時の投機の偈に、

一槌擊碎生露窟、突出那咤鐵面皮、
雙耳如雷口如啞、等閑觸着火星飛。

と言はれてゐますが、如何に痛快に透徹したかと思ひやられます。

如奪得關將軍大刀入手、逢佛殺佛、逢祖殺祖、於生死岸頭得
大自在、向六道四生中遊戲三昧。

(訓讀) 關將軍の大刀を奪ひ得て手に入るが如く、佛に逢へば佛を殺し、
祖に逢へば祖を殺し、生死岸頭に於て大自在を得、六道四生の中に向つ
て遊戲三昧ならん。

「關將軍」とは、三國の關羽のことで、關羽の青龍刀は、向ふところ敵なしであります。それを奪ひ取つて、我が物にした如く、無字の吹毛劍が手に入つたら、觸るゝもの總て切れぬものはありませぬ。「殺レ佛殺レ祖」といふ文句がありますが、恚ういふことは誤解されぬやうにしたい。病を癒すには、藥でなければならぬが、病が癒つた後は、藥に要はありませぬ。藥の毒が、後に残つてゐては、矢張健康に害があります。迷ひを退くるには、悟りに依らねばなりません。迷ひが除かれたら、悟りは要りませぬ。けれども一端は何うしても悟りの見識といふものが生じます。所謂悟りの糟が残ります。何時々々までも、そんなものに引ツついてゐては、眞個大解脱大安樂の境界に達することはできません。禪宗では悟りの見識に引ツついてゐるのを佛見法見、又は佛病祖病などいふて、賤しめてあります。此無字の銘刀を以て、佛見も法見も、迷ひも悟りも、ズダ／＼に截斷して了ひます。尙

ほ八萬四千の法門も、千七百則の公案も、手に任せてスラ／＼と切れます。生死は迷ひの代名詞と見れば宜しい。迷ひが怖いから、悟りの中へ逃げ込むといふではありません。迷ひの中へ飛び込んで、大自在を得るといふので、世間を捨て、山の中へ引つ込むではありません。紅塵萬丈の中にて、快活に仕事をして往くのであります。それには先づ一つ、自己の脚根下を固めて置かねばなりません。『六道』は天上、人間、修羅、餓鬼、畜生、地獄をいひまして、『四生』は胎卵濕化であります。其自由自在の働きに至りては、畜に人間の中ばかりではなく、地獄界へでも、畜生道へでも、ドシ／＼這入つて往つて仕事をする。言ひ換へれば到る處に主人公と爲つて働くのであります。臨濟和尚は、
「地獄に入るは園觀に遊ぶが如し」
と言ふて居られます。

且作麼生提撕、盡平生氣力、舉箇無字。若不間斷好、似法燭一點便著。

(訓讀) 且つ作麼生か提撕せん。平生の氣力を盡して箇の無字を舉せよ。若し間斷せずんば好し、法燭の一點すれば便を著くに似ん。

此處まで叮嚀に言ふたら、後は人々の骨折次第でありますが、畢竟何う工夫を下したのか、彼れ是れと思議するには及ばぬ。我が心身全體をすつくりと一個の無字に打ち込んで、如何と驀進するのであります。果して親切に骨折つて、間斷なき時に於ては、大悟徹底の時節あることは、決定して疑はない。僅に撥轉する時は、我が法藏の光明、一時に赫耀として、天を照らし、地を照らす底の慶快を見ることが能きるのであります。

頌曰

狗子佛性、全提正令、纔涉有無、喪身失命、

(訓讀) 狗子佛性、全提正令、纔に有無に涉れば、喪身失命す。

狗子に還つて佛性あるや、也た無きやといふ僧の問ひに對して、趙州和尚が無と切り出したところは「全提正令」で、腹の中丸出し、現金懸値なしであります。趙州和尚の露双劍を眞甲に振り翳したところでありすが、此處で何うの恚うのと、少しでも分別思想に涉つたら、眞二つに爲つて了ふ。疾うに命はなくなつてゐる程に、纔かたりとも、有とか無とかいふ有無の見に涉つては不可ぬ。若し涉つたならば、其時即ち身命は奪はれて了はねばなりません。「正令」とは、王者號令を以て天下に告ぐるので、宗門では法王の號令の正しきを正令といふと。又「喪身失命」とは、臨濟云く大衆夫れ法の爲めにする者、喪身失命を避けずと評註に見えます。

編者曰く、一章毎に其高僧の傳記閱歷を附記することにした。これは未知の人の參考としての婆心に過ぎぬ。趙州從諗は支那山東省曹州郝郷の人、姓は郝氏、稚童の時、本州扈通院で難髮し、未だ納戒せずして、池陽に南泉普願に參じ、師の提撕に依りて契悟し、嵩嶽の瑠璃境に於て、戒を受けて南泉に歸つた。爾來黃檗、寶壽、鹽官、夾山等を歴訪し、衆の請ひによりて趙州觀音院に住した。早く北方に南頓の玄風を振ふもの、禪師實に其著

しきものとする。時に傳へて趙州の門風といひ、聞くもの悚然として信伏せざるはなかつたと。乾寧四年十一月寂す、壽百二十、眞際大師と謚された。

（調讀）百丈和尚、凡そ參の次で、一老人有りて、常に衆に隨ふて法を聽く。衆人退けば、老人も亦退く。忽ち一日退かず。師遂に問ふ、面前に立つ者は、復た是れ何人ぞ。老人云く諾、某甲は非人也。過去迦葉佛の時、曾て此山に住す。因みに學人問ふ、大修行底の人還つて因果

二、百丈野狐

百丈和尚凡參次有一老人。常隨衆聽法、衆人退老人亦退。忽一日不退。師遂問、面前立者、復是何人。老人云諾、某甲非人也。於過去迦葉佛時、曾住此山。因學人問、大修行底人還落因果、也無、某甲對云、不落因果、五百生墮野狐身。

（調讀）百丈和尚、凡そ參の次で、一老人有りて、常に衆に隨ふて法を聽く。衆人退けば、老人も亦退く。忽ち一日退かず。師遂に問ふ、面前に立つ者は、復た是れ何人ぞ。老人云く諾、某甲は非人也。過去迦葉佛の時、曾て此山に住す。因みに學人問ふ、大修行底の人還つて因果

に落ちるや、也た無きや。某甲對へて云く、不落因果、五百生野狐身に墮す。

「百丈野狐」の因縁は、往昔から餘程喧しい一則でありまして、到底一席の提唱で、皆さんの肚の中に、之れをソツクリと入れるといふ譯には往きませぬ。又勿論講義の上に於て、室内の調べを披露することは能きませぬ。縦令披露するとしても、太陽が常に光り輝いてゐても、目の明いて居らぬ人には、見えぬやうなもので、何んの益にもなりません。恚ういふことに爲ると、修行と云つても、利他上の修行、更に進んで異類、中行異類といふは、人間界ばかりでなく、被毛戴角の獸の中へでも、羽を生やしてゐる鳥の中へでも這入つて往つて、佛事を爲ようといふ菩薩行の上の修行、利他上に拘つての調べであるから、込み入つてゐます。人間が狐に爲つたといふ、そんな莫迦なことがあるものかといふであらうが、成程普通から見れば、それに違ひありません。人間の常識上、決して然ういふことのあるのを許しませぬ。けれども「異類之行」といふところから見れば、狐は狐の境界に這入つて仕事を爲よう。狸なら狸の境界に這入つて自由自在に働かう。女なら女の身を現じて説法し、男なら男の身を現じて説法する。乃至童男童女宰官居士、何んでも出て來たものに應じて、濟度して往かうといふのであります。一の身體が、そんなに種々のものに爲ることの能きる道理はあるまいといふでありませうが、それは形に付き過ぎた考へで、菩薩は意生身といふて、心から生み出します。丁度

明鏡の物體を映して、跡形を止めぬと同じで、柳が映れば緑、花が映れば紅、天狗は天狗、片目は片目、出て來たまゝに映るが、跡形は寸毫も残しませぬ。曇つた鏡では、明かに映すことは能きませぬ。修行の必要は、恰も鏡を磨くと同じで、況んや異類中に這入つて、佛事を行はふといふのでありますから、狐狸の身中であらうが、狗猫の腹であらうが、ドン／＼大手を振つて往くといふのが、修行者の目的であり、願心であります。此位にして本文に入るが、百丈和尚の所に於て、説法がある毎に、一人の老人が、多勢の蹤に跟いて聽聞してゐました。説法が濟んで、大衆の退出する時には、矢張此老人も退出します。すると或る日のこと、説法は既に終つて、大衆は疾く退出したのに、老人だけが退出しませぬ。そして何か物思はし氣に、一人悄然として残つてゐました。其處で百丈和尚が尋ねました。

「講座は最早濟んで、皆人が退出したのに、お前は何故退出せぬか。何か要ありさうに立つてゐるが、お前は一體誰れか」

「某甲は非人でござります。實は私は、人間界のものではござりませぬ。然う御尋ね下さるならば、身の上を明かしてから、御願ひがござります。迦葉佛といふのは、御釋迦様の前に出世せられた佛ですが、私は往昔迦葉佛の時代に、此百丈山の住持をして居つたものでござりますが、或る時

修行者が、私に向つて、恚ういふことを問ひました。即ち大修行底の人、還つて因果に落ちるや。也た無きや』
と。如何にもありさうな問題であります。あらゆる修行に修行を積み、法理を究め悟り切つたところの大善智識でも、因果といふものゝ中に落ちるでありませうか、又落ちないでせうかといふのであります。此問ひに對して、

『不落因果』

と答へました。只此一語を誤つたばかりに、五百生の長い間、淺間しい野狐に爲つて了りました。『不落因果』字義からいへば、因果に落ちぬといふのであります。何處が間違つてゐるのであります。獨り此老人先づ此『不落因果』から調べてかゝらねばなりません。此處が此則の第一關であります。獨り此老人ばかりに限らぬ、解りもせぬに、解つたやうな面をして、彼是の說法する輩は、皆此野狐身に落ちて了ります。禪の中には野狐禪といふのがありますが、之れは此處から來てゐるのであります。現今は殊に野狐禪が澤山あります。日用の上にも、物の言ひ損ひといふことは、有り勝ちで、駟も舌に及ばずといふ位で、餘程慎まねばなりません。

今請和尚代一轉語貴脫野狐。遂問大修行底人還落因果也無。師云不昧因果、老人於言下大悟作禮云、某甲已脫野狐身、住在山後。敢告和尚、乞依亡僧事例。

(訓讀) 今請ふ和尚一轉語を代へて、貴らく野狐を脱せしめよと云ふを。

遂に問ふ、大修行底の人、還つて因果に落ちるや、也た無きや。師云く不昧因果、老人言下に於て、大悟作禮して云く、某甲已に野狐身を脱して、山後に住在せん。敢て和尚に告す、乞ふ亡僧の事例に依れ。

切望老和尚の大慈大悲を以て、一言眞實のことをいふて下され。そして今此淺間しい野狐の身を脱得させて下さるやうにと言ふて置いて、

『さて大修行底の人還つて因果に落ちるや、也た無きや』

と問ふた。すると百丈和尚は、

『不昧因果』

と答へられました。此言下に於て、老人は大悟しました。今までの大疑團が悉く解けました。それ

で洵に有難うござりますと、大展禮拜して言ふには、
「唯今の御一言で、今といふ今、長い間の野狐の境界を飛び出してしまいました。屍骸は此山の後にあります。就いては又御願ひがござります。今までは畜生の野狐でありましたが、悟つた上は、矢張以前の立派な僧でありますから、僧の資格を以て葬式をして下さいませやうに、不昧因果、因果を昧まさず」

と言ふのだが、「不落因果」と「不昧因果」と、どれ程の差ひがありますか、これだから禪宗は、文字や言葉の上で、捌くことは能きないのであります。此處は第二關目の調所參究して見ねば解りませぬ。

師令維那白槌告衆。食後送亡僧。大衆言議、一衆皆安、涅槃堂又無人病。何故如是。食後只見師領衆至山後崑下、以杖挑出一死野狐、乃依火葬。

(訓讀) 師維那をして白槌して衆に告げしむ。食後に亡僧を送らんと。大衆言議す、一衆皆安し。涅槃堂に又人の病む無し。何が故ぞ是の如くなる。食後只師の衆を領して、山後の崑下に至りて、杖を以て一死の野狐を挑出して、乃ち火葬に依るを見る。

「維那」は、綱維の義で、僧衆を統轄するをいひ、「那」は梵語で、羯磨陀那の略であります。知事授事と譯します。僧衆の雜事を司り、及び之れを指授する義であります。日本の禪家では、六知事の一として、衆僧の進退威儀を掌る重大な役と爲り、勤行法要の時、衆僧の先導を爲し、及び舉唱回向を司る一種の役名であります。「白槌」の槌は、大衆堂に集り、上座の人、衆に告報する時に鳴らす具で、白は申すと訓むから、即ち大衆に告白する爲めに槌を打つのであります。それで百丈和尚が、維那に命じて、白槌して大衆一同に申渡しましたには、

「今日齋座（午餉）が齋んだら、一人の僧の葬式をする程に、皆左様心得よ。」

と。すると衆僧は、大いに怪んで、
「今僧堂で死んだ者はない。病僧寮にさへ病臥してゐるものもなく、皆健全でゐるのに、葬式をするとは訝しむ。」

と不思議がりました。愈々晝飯が齋むと、百丈和尚は大眾を引き連れて、後ろの山へ往つて、そして岩の下から、一疋の死んだ狐を引き出して火葬しました。即ち亡僧を葬ると言つたのはこれでありました。百丈山に何故死野狐があつたか、之れも一つ調べて見ねばなりません。

師至^レ晚上堂舉^ニ前因縁。黄檗便問、古人錯祇對一轉語、墮^ニ五百生野狐身。轉轉不^レ錯、合^レ作^ニ箇甚麼。師云、近前來、與^レ伊道。黄檗遂近前

與^ニ師一掌。師拍^レ手笑云、將謂胡鬚赤更有^ニ赤鬚胡。

（訓讀）師晩に至り上堂して前きの因縁を擧す。黄檗便ち問ふ、古人錯つて一轉語を祇對して、五百生野狐身を墮すと。轉々錯らずんば、箇の甚麼をか作す合き。師云く、近く前來せよ。伊れが與めに道はん。黄檗遂に近く前んで師に一掌を與ふ。師手を拍ちて笑ふて云く、將に謂へり胡鬚赤と、更に赤鬚胡有り。

其晩に爲ると、百丈和尚は、説法の座へ上つて、今まであつた事柄を、斯様斯様と仔細に語られました。其時聞いてゐた大眾の中に、黄檗和尚がゐましたが、直ぐに一問を發しました。

「唯今承りますと、古人は唯一言の答へを誤つたばかりに、五百生野狐の身に墮ちたといふのでありますが、若しも一言一句少しでも間違ひがなかつた其時には、果して何に爲るでござりませう。」
「それが聞きたいか、言ふて聞かすから、近う進めよ。」

すると、黄蘗和尚は、ズーツと講座の前に進み出て、ピシヤリと一つ師匠百丈和尚の横面を御見舞申しました。ところが百丈和尚は、手を叩いて、大笑して言はるゝには、

『將に謂へり胡鬚赤と、更に赤鬚胡有り。』

と、之れも矢張調べもので、恚ういふところは、語呂の妙でありまして、例へば朝鮮人の鬚は赤いと思ふたらば、鬚の赤い朝鮮人であつたといふ程のことです。

無門曰、不落因果爲甚、墮野狐。不昧因果爲甚、脫野狐。若向者裏著得一隻眼、便知得前百丈贏得風流五百生。

(訓讀) 無門曰く、不落因果甚と爲すか、野狐に墮す。不昧因果甚と爲すか、野狐を脱す。若し者裏に向つて一隻眼を著得せば、便ち前百丈贏ち得て風流五百生なることを知得せん。

無門和尚が、大衆へ差し付けた所であります。「不落因果」と言つて、何故野狐に墮ちたか、「不昧因果」の言下に、何故野狐を脱したか、此處に如何程の差異があるか、とツくりと見破つて見るといふ一隻眼は、心の眼球といふ程のことです。禪宗では一隻眼が喧ましい。凡夫の眼は、物が二つに見える、即ち我と彼と二つに見えます。これが抑も迷ひの始まりであります。ところが一隻眼は一つに見えて、

『天地と我とは同根、萬物と自己とは一體』

といふのも、即ち一隻眼から見たところでありまして、「贏ち得て」は、儲け物といふことで、今此一隻眼を豁開して見た時に於ては、前百丈が五百生の間、野狐に爲つて居つたといふのも、其中に於て得も謂はれぬやさかたな趣があります。狐の腹に這入つてゐたのは、丁度公園にでも往つて、遊んで

わたやうなもので、畢竟それが儲け物でありました。

頌曰

不落不昧、兩彩一賽、不昧不落、千錯萬錯。

(訓讀) 頌に曰く、不落不昧、兩彩一賽、不昧不落、千錯萬錯。

此頌は、古人も大いに讚嘆してゐます。「賽」は博奕の賽で、「彩」はそれに記るしてあるチヨボで、此方へ引ツくりかへしたら、三つチヨボが出たが、彼方へ引ツくりかへしたら、五つチヨボが出たと、いふが、チヨボは種々に出ますが、賽は元より一つであります。不落因果で野狐を脱したといふも、大した相違もないがと言はれます。「不落」忽ち打ち消して了ひました。「兩彩一賽」の所へ尻を据えたら、最う駄目だ。不昧と言ふても錯、不落と言ふても錯、「千錯萬錯」だ。恚ういふところは無門和尙の腕力であります。

百丈懷海は支那福州長樂の人で、姓は王氏、二十歳の時、西山慧照に就いて落髮し、南岳の法朝律師に従ひて受具し、廬江に往きて大藏經を閲覽し、後馬祖に參し、其印可を得、四方歸依の道俗相謀り、洪州新吳界の大雄山に、一大伽藍を建立し、師を請じて開山とした。百丈山大智壽聖禪寺がこれである。唐元和九年一月十七日寂す、壽九十五、長慶元年大智禪師の諡號を賜はつた。

三、俱 胝 豎 指

俱胝和尚凡有詰問、唯舉一指。

(訓讀) 俱胝和尚凡そ詰問あれば、唯一指を擧ぐ。

これも有名な一則であります。「俱胝」といふ名には出所がありまして、「俱胝佛母陀羅尼」といふの
があります。此和尚毎も此陀羅尼ばかり唱へてゐたので、時の人が俱胝和尚といふたので、終にそ
れが名に爲つて了りました。早く寺を有つて、普通一ヶ寺の住持としてやつてゐたが、或る日のこと
一人の尼僧が來ました。其尼僧の名は實際といひまして、却々の達人らしく見えるのであります。恁
ういふ善智識が出て來て、因縁を結んでくれるから有難い。此比丘尼が笠を冠つた儘、草鞋を穿いた
儘で、ズイと這入つて來るや否や、俱胝和尚の坐つてゐる禪床を、グル／＼三遍廻つて、眼中俱胝な
しといふ有様であります。そして言ふには、

「道得即下笠子」

と。何んとか一句有難いことを言ふなら、笠を脱いで、禮拜するが、さあ何うでござるといふ勢ひで
あります。ところが俱胝和尚は未だ一向悟りの眼が明いてゐませんでしたから、致方ありません。此
此尼僧の一拶に遇ふて、何んとも答へることができないから、只黙つてゐると、尼僧は一度ならず二
度、更に三度までも問ふたけれども、何うしても一言半句も口を開くことができませんでした。其處
で尼僧は、こんな無眼子の和尚の所へ來ても仕様がな、此莫迦和尚といふ有様で、ツイと庵室を
出て往きました。其時は丁度日暮頃であつたので、俱胝和尚は尼僧を呼び停めて、

「最早日暮時でありますから、何れ何處かに泊らねばなるまい。此處で宜しくば泊つて往きなさい。」
と言ふと、尼僧は答へて言ふ。

「道得即住」

と。何んとか一言、祖宗門下のことを言ふたならば、投宿もしよう。さあ言ふて見ると、豪い見識で
あります。ところが俱胝和尚は、尙且何んとも答へが能きず、黙つてゐました。愈々以て相手になら
ぬ和尚、こんな所に泊つたとて何うなる、此癡和尚といふ鹽梅で、後をも見ず、サツサと往つて了ひ
ました。爰に於てか俱胝和尚は始めて大いに猛省しました。頭を剃つて、袈裟を掛けて、禪宗坊主だ
といつてゐながら、比丘尼の一間に、何んの酬對も能きぬとは、實に恥かしい。況して身は、立派な
男と生れてゐながら、男子たる氣概がないとは、何んといふ憐れさであらう。最早一時も恚うして

ゐることは能きぬ。寺も何にも一切打ち捨て、天下を遍歴し、名師を覓めて、大いに修行しようと思ひ、決心しました。恚うした慚愧發憤の結果、燃ゆるが如き菩提心が起つて來ました。男子たるものは恚うなからねばなりません。すると其晩の夢に、鎮守の山神が現はれて、告げて言ふには、
「今和尚に、それだけ堅固な願心があれば、何にも寺を捨て、遠く他所へ往くには及ばぬ。必ず近い内に、肉身の菩薩が出て來て、和尚の爲めに、法を説いてくれやうから、此處に居つて、充分に修行するが可い。」

と、恚ういふことを感得しました。すると果して一週間経つと、天龍和尚といふのが出て來ました。此天龍和尚は、馬祖下の尊宿大梅法常禪師の法嗣であります。此天龍和尚が、俱胝和尚の所へ來たから、成程此間の晩、感得したことに符合する。これこそ眞に身を以て事ふべき師匠であると深く信じました。其處で過ぐる日尼僧が來て、これ／＼であつたと、仔細に語つて教へを乞ひました。すると天龍和尚は何んとも言はずに、ズツと指を一本立て、見せました。此處で俱胝和尚は大いに得るところがありまして、今迄の大疑團がガラリと解けました。從來大いに骨を折つてゐたのが、天龍和尚の一指頭に於て、成程と解つて、始めて本當のことが手に入りました。佛も勇猛の衆生の爲めには「成佛一念にあり、懈怠の衆生の爲めには、涅槃三祇に渉る。」
と言はれてゐますが、眞に勇猛精進といふ輩には、一念頭上に於て、直ちに成佛が能きことは疑ひ

ない。俱胝和尚に於て、甚だ明白であります。此處で大いに力を得たものだから、これから何事も指一本で、學者を接するのにも、別に提唱も、垂示もなく、唯指一本立てるだけで、吾々のやうに、こんなゴテ／＼したことは決して言はなう。

「如何なるか是れ佛法の大意。」
と問ふても、直ぐ指一本立てる。

「如何なるか是れ祖師西來の意。」

と問ふても、尙且指一本立てる。

「今日は好い天氣でござる。」

と言ふても、尙且指一本。

「厳しい寒さでござる。」

といふても、尙且同じこと。恚ういふ有様で、何を尋ねても指一本立てました。これが俱胝和尚の名物と爲つたのであります。

後有童子。因外人問、和尚說何法要、童子亦豎指頭。抵聞遂以刃斷其指、童子負痛號哭而去。抵復召之、童子廻首。抵却豎起指。童子忽然領悟。

(訓讀) 後に童子有り。因みに外人問ふ、和尚何の法要をか説く。童子も亦指頭を豎つ。抵聞きて遂に刃を以て其指を斷つ。童子負痛號哭して去る。抵復た之れを召す。童子首を廻らす、抵却つて指を豎起す。童子忽然として領悟す。

俱胝和尚に附いてゐた一人の童子がありました。十四五歳にも爲つて居ましたらうが、始終和尚の侍者をしてゐました。和尚が何を尋ねられても、指を一本豎てるので、此小僧これを眞似るやうな鹽梅で、人が何か言ふと、尙且指を一本豎てます。此頃お前の所の和尚は、どんな説法をやるゝかと訊くと、小僧澄まし返つて直ぐ指を一本豎てます。和尚のやるのを常に見てゐたので、自然と鹽陶されて眞似をするのであります。鶴の眞似をする鴉といふ比喩があるが、眞似からでも道に入ることができます。或る日人が和尚の所へ遣つて来て、

「貴方は御存じか何うか知りませぬが、御侍者をしてゐる小僧が、人から何か言はれると、貴方の爲さる通りに直ぐと指を豎てますが、あの小僧も悟りを開いてゐるのでござりますか。」

と言ふた。其處で俱胝和尚は、小僧がそんなことを遣り居るか、一つ看破して呉れやうと、或る日小刀を袖の中に隠し持ち、そして童子を呼びました。これも大慈大悲で、萬遍に一遍行る權道非常手段で、毛一本たりとも、容易に人の體を傷めることは能きませぬ。小僧を呼んで置いて、

「其方は佛法を會得してゐるといふが、本當か。」

と訊くと、小僧は、

「左様。」

と答へました。すると和尚が、

「如何なるか是れ佛。」

と問ふと、小僧は果して、指一本豎て、ズツと出しました。和尚は此生意氣小僧がと、隠し持つてゐた小刀で、其指をスバリと切斷して了ひました。さあ痛くて堪へられませぬ。悲鳴を擧げつゝ、室内を走り出しました。すると和尚が、

「こら小僧待て。」

と呼び停めました。小僧が一寸後ろを振り向くと、

「如何なるか是れ佛。」
と和尚が問ふと、小僧は指を豎てようとして手を擧げました。此處で小僧は忽然大悟して、覺えず知らず、眞實のことが手に入りました。初めに眞似したのが因縁と爲つて、本當の悟りを開くことができたのであります。是等は實に禪宗の美談とも稱すべきことであります。俱胝和尚の法を嗣いだものは、此童子一人でありまして、一生涯矢張指を豎て通したといふことであります。悟りを開くには男女老若の差別はなく、又學問の有る無しにも依りませぬ。人間の常識さへ備はつてゐるものなら、誰れにでも能きます。要するに努力であります。

胝將順世、謂衆曰、吾得天龍一指頭禪、一生受用不盡、言訖示滅。

(訓讀) 胝將に順世せんすとす。衆に謂つて曰く、吾れ天龍一指頭の禪を得て、一生受用不盡と言ひ訖りて滅を示す。

俱胝和尚が、愈々遷化せんとする時、大衆を集めて言はれました。納は天龍和尚の接得の下に、個の事を明めてから以來、唯一本の指が、長い一生涯の間、用ゐる盡せなかつた。

「要會セント麼」

といひ、指を一本豎て、其儘逝かれたといふことであります。「受用不盡」とは、實に手丈夫なものである、之れが本當に我が物に爲つたならば、一切時、一切處、世々生々受用不盡なることは疑ひありません。世間の教へでも又其通りで、「論語」一卷素讀から、講釋から聞いて、種々のことを覺ゆるのは大變だが、要は仁義に歸します。「中庸」は誠の一字、「大學」は明德に歸するのであります。眞個肝要の所が、我が物に爲つたら、其餘は自然と解ります。殊に禪宗の如きは、物事を多く知つてゐるから、豪いといふことは取りませぬ。公案でも其通りで、鑄型的に數多く見たところで、何んの用をか爲すに足らんやだ。貴ぶところは、徹底眞個の力を得るのであります。自分も一つ行つて見よう位では、到底不可ぬ。行るなら本當に、眞劍に、確實に行るが可い。僅に指一本豎てるのだが、

後世の歴々が、皆力を竭して批評して居られます。玄沙和尚の如きは、
 「我れ當時若し見ば、其指をへし折つて遣らう。」
 と言つてゐます。又雲居の錫和尚は、
 「玄沙の恚う言ふたのは、肯つて言つたか、肯はずして言つたか。」
 と言つてゐるが、其時吾々ならば、何う答へるか、先づ恚ういふ因縁、それに對して無門和尚の評で
 あります。

無門曰、俱胝並童子悟處、不在指頭上。若向者裏見得、天龍同俱胝
 並童子與自己、一串穿却。

(訓讀) 無門曰く、俱胝並に童子の悟處一指頭上に在らず、若し者裏に向
 つて見得せば、天龍同じく俱胝並に童子と自己と一串に穿却せん。

指といふと、直ぐに生理上の手の先きに附いて廻はるだらうが、然ういふことではないと言ふ無門
 和尚も、随分叮嚀なことであります。併し決して指を離れて居らぬ。個の中の妙味が、眞實手に入つ
 たなら、天龍も、俱胝も、童子も、自身も、圓子の串に芋刺しに能きるが、そればかりではない。男
 も、女も、柱も、敷居も、猫も、杓子も、一切相兼ねて、一串に刺し通して了つてあると言ふのであ
 ります。

無門曰く、俱胝並に童子の悟處一指頭上に在らず、若し者裏に向
 つて見得せば、天龍同じく俱胝並に童子と自己と一串に穿却せん。

頌曰

俱胝鈍置老天龍、利刃單提勘小童、巨靈擡手無多子、分破華山千萬重。

(訓讀)頌に曰く、俱胝鈍置老天龍、利刃單提して、小童を勘す、巨靈手を擡ぐるに多子無し、分破す華山の千萬重。

「鈍置」とは、莫迦にしたといふ程のことではありますが、此處では無上に讃嘆したことに爲ります。俱胝和尚が、一指頭上に於て、師匠の天龍和尚を莫迦にしたといふが、そればかりではない。三世の諸佛、歴代の祖師、皆悉く鈍置した。一生涯指一本で、どんな豪い仕事をしたか、小刀振り舞はして、指まで切つて、ヤツと一人の青小僧を仕立上げたといふのが、畢生の大事業でありました。此處に實に有難いところがあります。後の二句は「碧巖録」の三十二則の頌に出てゐるが、それを持つて來たのであります。支那の古説に、巨靈神といふ大力量ある神が、廣大な大華山を無雜作に、吾々が指頭で、紙でも引き裂くやうに分破したといふことで、「無多子」は無雜作といふ程のこと、只一本の指であるが、其大力量は何うであらうか。生死も、涅槃も、煩惱も、菩提も、天堂も、地獄も、乃至禪道佛法、當處に分破する程であるといふのであります。

俱胝は、支那婺州金華の人で、俗姓明かでない。其閱歴は、講話中に盡されてゐるから、爰には贅せぬ。世壽及び寂年を知らず。

四防千難題

四、胡子無鬚

或庵曰、西天胡子因甚無鬚。

(訓讀) 或庵曰く、西天の胡子甚に因りてか鬚無き。

これは簡單な示衆でありますが、如何にも優れたところがあります。古人は一千五百人、善智識の語であると稱讚してゐます。先づ支那なら雪竇、虛堂、日本なら大應、大燈、關山、白隱の如きでなければ、恚ういふことを肚から言ひ出すことは能きぬと言はれてゐます。今之れを白隱風の日本言葉で言ふと、和蘭人に何故鬚がない。これで可いのであります。恚ういふ問題を取り出すと、大抵の輩は、和蘭人に、きよろつと附いて廻るであります。天竺人は何故鼻が曲つてゐるかと言ふたならば何うするか、印度へでも視察に出掛けるか、大變なことに爲つて了ふ。之れに對して、何んと挨拶したのか、爰に宗旨があるのだ。毛唐人に何故鬚がない。是れよりか最う言ひやうがありません。是れ以上は、實地に室内で、商量して貰はねばなりません。尙ほ「胡子」とは、達磨を指したのであります。

無門曰、參須實參、悟須實悟。

(訓讀) 無門曰く、參は須らく實參なるべく、悟は須らく實悟なるべし。

「實參實悟」は、禪の生命であります。これがなかつたならば、禪の存在は一日もなりません。眼も明いて居らぬ輩が、棒喝の模様を行つたり、奇特玄妙の言句を口眞似したりしたならば、眞風は立ち所に滅絶して了ふ。殊に線香一本坐つたこともなく、入室一度したこともない輩が、僅に一二卷の祖録でも見て、直ぐにそれを自己の少分の知見へ當て欲めて、會得顔に彼れ是れと大言するなどに至りては、其醜穢實に目も當てられません。本則の示衆の如きでも、恚ういふ輩に見せたら、只一場の戯論にして了ふであります。眞實骨も折らぬ輩に當てがたら、動もすれば虚頭になるから、無門和尚が大いにそれを警戒してゐます。

者箇胡子、直須親見一回始得、説親見早成兩箇、

(訓讀) 者箇の胡子、直に須らく親見一回して始めて得べく、親見を説くも早く兩箇と成る。

此評は、白隠和尚などには、餘り氣に入つて居りませぬ。此胡子は何者か、一遍見付けて見ると言つてゐるが、取り違へると、向ふへ附いて廻るから、餘計な言ひ草だと言ふのでありますが、併し別に悪むといふ譯ではない。親見せざる以上は、何んと言つたところが、皆餘所事に爲つて了ひます。縦令親見と言ふても、どんな面をした毛唐人がなども、キヨロツとしたら、最早駄目だ。飛んでもない西天の胡子を捕へて了ふ程に、恚氣を付けたのであります。

頌曰

癡人面前、不可説夢、胡子無鬚、惺惺添憎。

(訓讀) 痴人面前、夢を説く可からず、胡子無鬚、惺々に憎を添ふ。

此頌も、無門和尚としては、餘り好く出来て居らぬと言ふ古人の評であります。此頌で見ると、或庵が一寸人を引き掛けて、困らす爲めに云つたやうな賊意に見えるが、然う見たら豪い間違ひであります。夢が既に現實でない上に、聽者が常識の無い白癡といふのだが、それでは取り止めのない出鱈目か、決して然うではありませぬ。或庵は一寸も夢を説いて居りませぬ。西天の胡子に、鬚がないなどと言ふたのは、眼の牙えくした眞晝間に、ボンヤリと寢言でもいふたやうなものか、そんな戯論ではない。併し眞實此胡子を捉へた輩でないと、矢張寢言にしか聞えぬのであらう。

或庵は鎮江府焦山の人で、師は體禪師で、護國の元禪師の法嗣だと、無門關の評註に出てゐるのみで、詳に知ることが能きぬ。

五、香嚴上樹

香嚴和尚云、如人上樹。口啣樹枝、手不攀枝、脚不踏樹、樹下有人問西來意、不對即違他所問。若對又喪身失命。正恁麼時作麼生對。

(訓讀) 香嚴和尚云く、人の樹に上るが如し。口に樹枝を啣み、手に枝を攀ぢず、脚樹を踏まず、樹下に人有りて西來の意を問はん、對へずんば即ち他の所問に違く。若し對へば又喪身失命せん、正に恁麼の時作麼生か對へん。

是れは『香嚴上樹』の一則で、香嚴の香はきやうと讀み、嚴は道常のげんと讀んで可い。即ち香嚴和尚、これをかうげんとか、かうがんとか言ふては、吾々の耳には、誰れのことか薩張分りませぬ。こんな讀み癖は、世間の書物にも例が澤山あります。此香嚴和尚は、天性優れて聰明伶俐な人で、最

初は百丈和尚の所へ往つたが、後に瀉山和尚の所で修行して法を嗣ぎました。瀉山和尚が、

『其方は先師百丈和尚のところゐた時に、一を問へば十を答へ、十を問へば百を答へるといふ人並優れた俊發であつたが、それは其方の聰明伶俐で、心意識上に於て分別知解したもの、畢竟生死流轉の根本である。父母未生以來試みに一句を言ふて見よ。』

と一問を發しました。口も八挺手も八挺といふ遣り人の香嚴も、是れには何んとも答へができませんでした。それから寮舎に歸つて来て、今迄見たところの書物を、一々引つ繰り返して見たり、種々平生の記憶上から喚び起して見ても、未生以前に一句を言へといふことに、當て候まるべきものは、何うしても見付かりませぬ。まあそんなもので、只物を注入的に覺えただけで、自身の肚裏から、一つ啓發するところがなければ、實際の用には立ちませぬ。此處で香嚴は大いに嘆息しました。今まで自分、種々のことを學び、多く物事を覺えて來たが、晝餅飢に充たすで、實地の上に於て、一向役を爲さぬ。何うしても解らぬところから、瀉山和尚の所へ往つて、切望説いて教へて下されと願つたが却々教へてくれませぬ。幾度乞ふても、説いてくれませぬから、貴僧を撲ちますとまで言ふて、殆んど脅迫的に迫りました。すると瀉山和尚が言はれるには、

『我が説く底は、是れ我が底、終に汝が事に關らず、我れ若し説かば、他日汝我れを罵り去ることあらん。撲つなら撲て。恨むなら恨め。説けば其方の爲めにならぬ。』

と、頑として應じませんでした。これが瀧山和尚の大慈悲であります。後には終に香巖が屍古垂れて了つて、恚くまでに骨を折つて、研究して見ても解らぬ。これでは到底現世に於ては埒が明かぬ。仕方がないから、陰徳でも積んで、他日の因縁でも結んで置かうと決心しました。其處で従來讀んだところの書物とか、種々玄妙の道理を書き記して置いた多くの筆記物とか、そんなものを悉く取り出して、焼き捨て、了ひ、涙を流しつゝ瀧山和尚の下を去り、それから南陽へ往つて、慧忠國師の遺跡のある所に住み、暫くの間雲水往來の爲めに、種々と便宜を計り、最う悟りとか何んとか、そんなことは一切思ふまい、考へまいとしても、何うも「父母未生以前」の一問題が、念頭を離れず、常に胸中穩でありませんでした。或る日のこと、庭掃除をして、掃き集めた芥とか、木の葉とか、瓦片とかそんなものを塵取に浚ひ込んで、竹籤へ持つて往つて捨てました。其時中に混つてあつた瓦片が竹へカチリと打ち當りましたが、此カチリの音に和して、忽然として省悟しました。前に泣きの涙で骨折つたのが、一時に解つたから、歡喜の餘り、遽に沐浴して、衣を更め、香を炷いて、遙に瀧山和尚の居る瀧山を望んで、禮拜して言ふには、

「我れ瀧山の道を貴ぶにあらず。我が爲めに説かさりしことを貴ぶ。當時若し説かば、曷んぞ今日の慶快あらんや。和尚の大慈恩、父母に過ぎたり。」

と恩を謝しました。此時の投機の偈に、

一、擊忘前知、更不假修治、
 動容揚舌路、不墮三悄然機、
 處處無蹤跡、聲色忘威儀、
 諸方達道者、咸言上上機、

といふのがありますが、これが有名であります。更に詳しいことは、傳記に依りて見るが宜しい。此香巖和尚が、他日出世して、後或る時の示衆に、今此處で一人の人間が高い木の上に、昇つたとするが、昇つて何うした。口で木の枝を啣えてゐる。手はブラリと垂れて、枝をとらへて居らぬ、脚も矢張樹に掛けずにブラ下げてゐる。唯口で枝を啣へただけで、身體を宙に支えてゐる、随分危険な藝當である。恚うやつてゐる所に、外から人が出て来て、如何なるか是れ祖師西來の意、祖師西來の意とは、毎もいふ通り、達磨大師が西天竺から來た意志といふことで、禪宗の意義といふ程のこと、禪宗の大意は如何、禪宗の安心が承りたいと、尋ねられたら何うするか。答へるには口を開かねばならぬが僅でもアンと口開くが最後、忽ち下へぶち落ちて、或は其儘息が止つて了ふかも知れぬ。實に險呑な話だ。それでは何んとも答へずに置か、それでは折角問ふた向ふの本意に背くともいふものであるが、さあ何う答へたものか、恚ういふ因縁であります、何も樹の上ばかりには限らぬ、世間日常の上に於て、恚ういふ切迫詰つた場合は、澤山にあります、其場其場で一々轉身自在に行つて退けぬ



ばなりませぬ。それには大いに修行の必要があります。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字が並ぶ。これは影印の品質や原書の文字の小ささによるものと思われる。）

無門曰、縦有懸河之辨、惣用不著、說得一大藏教、亦用不著。

（訓讀）無門曰く、縦ひ懸河の辨有るも、惣に用不著、一大藏經を説き得るも、亦用不著。

此評は、却々好く出来てゐると云ふ古人の賞翫であります。樹上の西來意といふ切迫詰つた場合に於ては、如何に達者な舌片を有つてゐた所が、使ひやうがあるまいと言はれる。懸河の辯舌で、豎板に水を流すといふ如き、滔々雄辯、縦令富樓那の辯舌と雖も、何んの役にも立たぬ。佛の一大藏經即ち經律論の三藏經、此廣博なる五千餘卷の經論を、悉く暗記して居つたところが、這裏に至りて一言半句も説くことは能きまいと云はれる。成程無門和尚は面白くやつたものであります。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字が並ぶ。これは影印の品質や原書の文字の小ささによるものと思われる。）

若向者裏對得著、活却從前死路頭、死却從前活路頭。

(訓讀) 若し者裏に向つて對得著せば、從前の死路頭を活却し、從前の活路頭を死却せん。

此處で立派に應對ができたことなら、どんな働きが出て来るか、「死路頭を活却し、活路頭を死却す」それこそ死活は自在であります。殺さうと活さうと、我が手の内與奪自在、逆順縦横で、所謂殺人刀活人劍を自由自在に使ひ舞はすことが能きませう。

其或未然、直待當來問彌勒。

(訓讀) 其れ或は未だ然らずんば、直ちに當來を待ちて彌勒に問へ。

經文の中に、豫言見たやうに説いてありますが、九十六億七千萬歳といふ長時間の後に、彌勒菩薩が出現して、釋尊の後を受けて、化を擧げらるゝといふことでありますが、何うしても樹上の西來意に應對ができない。死路頭を活却し、活路頭を死却する底の端的が、分らぬといふなら仕方がない。まあ急がずと緩りと行れ、長い間の未來世を待つて、彌勒にでも問ふて見るが可からうと言ふ。こんな非根機な輩は、縱令彌勒菩薩が出て來た所で、矢張埒明く時節はあるまい。

頌曰

香嚴真杜撰、惡毒無盡限、啞却衲僧口、通身迸鬼眼。

(訓讀) 頌に曰く、香嚴眞の杜撰、惡毒盡限無し、衲僧の口を啞却して、通身鬼眼を迸らしむ。

「杜撰」とは、荒唐杜撰といふことで、通俗では出鱈目といふ程のことではありますが、此處では無上の讚美のことに爲ります。禪宗では、恠ういふ言葉の使ひ方が澤山あるので、極端に褒める時は、極端に貶した言葉を使ふ場合があります。世間の上にしても、往々そんなことがあります。目の前で貴方は豪いとか、結構だと言ふてゐるのは、言はず空御世辭で、本當の心から言ふのではなく、決して親しくないのではありませんが、眞の知音同士に爲ると、此獄道とか何んとか悪る口を言ふのが、實は大變に褒めたことに爲るのが、實際の上に幾らもあります。香嚴和尚も、實に埒もない下らぬ和尚である。何んたる惡毒極まる遣り方であらう。我れこそ天下の衲僧であると力んでゐる遣り人も、此惡辣な手段に遇つては、グウの音も出まい。眼を白黒して、通身汗を流すであらうと言はれる。此毒に中つたのが、始めて本當の人物に爲るのでありますが、却々中る者が少ない。

香嚴智閑は支那青州の人で、幼にして世を厭ひ、親を辭して百丈懷深禪師に就いて出家し、百丈遷

化の後、後、瀉山靈祐禪師に従ふて參究した。後瀉山を辭して、南陽の武當山に入り、瀉山の法を嗣ぐ。後香嚴山に住し、大いに瀉山の宗風を擧揚した。其寂年世壽を詳かにせず。襲燈大師と謚された。

六、世尊拈花

世尊昔在靈山會上、拈花示衆。是時衆皆默然。惟迦葉尊者破顏微笑。

(訓讀) 世尊昔靈山會上に在りて、花を拈して衆に示す。是の時衆皆默然たり。惟迦葉尊者のみ破顏微笑す。

此一章に於て、説法は最う濟んでゐるといふても可いのであります。大體佛一代の教が一法でありまして、二法はありません。固より同一佛法でありますが、併しながら既に佛自らも名乗り出して居らるゝ通り、病に應じて藥を與ふで、恰も名醫が、病人に對して藥を盛るに、其病氣に依りて藥を調合するのと同じことで、佛法に二つはないけれども、對せるところの根機對機が各違ふから、説くところの法も又千差萬別であります。故に最初華嚴から阿含、方等、般若それから法華、涅槃と、恚ういふ順序に、階級を付けて、大別五時に配當して、一代の説法を結了せられてある。一番初めの

説法といふものが華嚴、之れは却々廣大な御經であります。此華嚴といふものは、最初佛が六年修行の結果、正覺山前菩提樹下に於て、阿耨多羅三藐三菩提を覺得せられました。一口に言ふと、悟りを開かれました。其時に悟りの儘の境界を、直ちに説法せられたものであります。佛が成道の時、此法界一切の世界をズツと御覽に爲つて、讚嘆して仰せられました。

「奇なる哉。一切の衆生悉く如來の智慧徳相を具有す。」

と。實に何うも奇妙不思議である。此廣い世界に、誰れ一人迷ふて居る者もなければ、罪を造つて居る者もない。一切人類は愚、草木國土に至るまで、悉皆成佛してゐる。柱は柱なりに成佛し、敷居は敷居なりに成佛し、鳶の飛んで天に戻るのも、魚の淵に躍るのも、其儘直ちに成佛してゐると、恚う見られたのであります。是れ實に根本の法輪、一代藏經の歸止するところで、最も高尚を極めてゐます。故に僅に上々根機の者だけは、通達したけれども、中下根機の者に至りては、之れを聽いて、恰も聾の如く、啞の如くであつたといひます。恚ういふ有様であつたが、其時に佛は、我れ疾く涅槃に入らんと仰せられました。何故ならば、既に迷つてゐる者も、罪を造つてゐる者もないといふ以上は、別に濟度するの、救ふのといふ必要はない。元より仕事の仕様もない筈であるから、涅槃に入らうとまで仰せられました。併しながら之れは悟り其儘のズツと高尚な眼を以て見たところでありまして、其悟りから起るところの無縁の大慈悲心といふもので、仔細に眺め來る時に於ては、却々以て涅槃に

入つて、樂々と安眠高臥してゐる譯には往きませぬ。一切衆生悉く佛性を具有してはゐるが、只妄想執着の爲めに而かも之れを證得せずで、自身で其光明を味ましてゐます。此清淨な世界を、塵塗れにして、迷ひの固まり、罪惡の問屋にして、懊惱呻吟してゐる有様は、實に目も當てられぬ情ない憐れむべきものであります。此儘に打ち捨て、置くことが、何うして能きやうかと、爰に一點無縁の大慈悲心に乘じて、衆生濟度と出掛けられました。其處で最も高尚なる華嚴の土臺を、ズーツと下つて、鹿野苑といふ所へ出て来て、「阿含經」を説かれました。阿含といふても、却々廣大な經卷であります。總じて未だ低いところを説いてゐます。要するに世間門では、五戒十善といふ如く、人道の上、倫理の高等に就いて、細かに説いてありまして、又出世間の側では、無常無我等の道理が、詳しく説いてあります。是れ迄を小乗教といふてゐます。併し佛は元より大乘教と、小乗教と二様にあると仰せられた譯ではありませぬ。前に言ふ如く、根機に對して、大根機に移した上で、大乘、小根機に移した上で小乗と、恠ういふ心持を忘れてはなりません。阿含部に於て、殆んど根機をならしたところで、今度は方等といふところへ移しました。方等部は、小乗門の者を大乘門に入らしむる所の段階で、それは所謂權大乘ともいふてゐます。其方等の御經が澤山ありまして、それから後に、般若を説かれました。大般若だけでも六百卷ありまして、幾重にも眞空無相といふ理を説いてあります。此處まで進んで、衆生の根機が、スツクリ純熟したところで、法華を説かれました。「唯一乘法無

二亦無三」といふ、一乘圓頓の法門、佛法の一大事因縁が、明かに説いてあります。涅槃は法華の友ともいふべきものでありまして、一方律義から説くと同時に、常住不變の眞理を説いてあります。佛一代の説法は、大體如上の有様で、それを後に結集したのが、一代藏經五千餘卷で、五時八教とも分れ、八萬四千の法門とも爲つてゐます。後世に至りて、種々宗派といふものが分れて、今日では八宗、九宗更に十二宗、三十幾派かに爲つてゐますが、此あらゆる宗派といふものが、皆所依の經典、即ち依るところの經典があるので、例へば華嚴宗は「華嚴經」に依り、天台宗は「法華經」に依り、其他淨土の「三部經」に依るが如く、眞言の「大日經」に據るが如く、皆各所依の經典といふものを立て、其處から立教開宗してゐます。此點は獨り佛敎ばかりでなく、外教でも其様でありまして、耶蘇敎ではバイブルとか、回々敎ではコーランとか、矢張經典といふものに依つて、教へが立てられてあるやうであります。兎に角何れの宗旨にしても、所依の經典のない宗旨は、一つもありません。然るに獨り禪宗といふ宗旨だけは、所依の經典といふものがありませぬ。だから旗印が何んであるかといふに、「不立文字敎外別傳直指人心見性成佛」で、直ちに人心を指して、見性成佛せしめます。恠ういふことを標榜して、現はれてゐるものが禪宗で、我が宗に語句なく、更に一法の人に與ふるなしと明言してゐる位のもので、何にも據つて居りませぬ。恠くの如き宗旨でありますから、他の宗旨を悉く柝伏門に依りて排斥し、破棄するかといふに、然うではありません。若し一步與へて言ふ時に

は、最う初め華嚴より、終り法華涅槃に至るまで、佛の一代藏經は、悉く皆禪宗所依の經典とするところが能きます。故に禪宗には、教別の法なしと古人も言ふてゐます。立てぬといふ側から見れば、豈に雷佛の教經のみならんや、全世界中塵毛一本も認めぬといふのだが、與へていふならば、一切藏經は愚諸子百家、更に廣く言ふならば、淨瑠璃や、長唄の文句に至るまで、第一義に背かずと、恚う爲つて來るのであります。それ故白隠禪師の如きにしても、彼の通り頗る高尚な書物も書いて居られますが、下つて衆生濟度の爲めには、段々あつて『辻談義』とか、『ほこり叩き』とか、『粉引歌』といふやうな鹽梅に、種々なものを書かれてゐます。恚ういふ理由で、所依の經典がないからといふて、決して他を少しも排斥することはありませぬ。南無阿彌陀佛結構であります。南無妙法蓮華經又結構であります。こんな宗旨が、抑も何處から出て來たかといふと、何も立てぬとはいふものゝ、若し亦歴史の上に就いて、此宗旨の系統を糺すといふことに爲ると、今講する所の『世尊拈花』の一則でありまして、之れが禪宗の精神ともいふて可いのであります。ところが此本則なるものが、一切藏經の中に、出處がないといふ評判であります。併し又鬘頭にも記してある如く、王安石とも、舒王といふ人もあります。それが時の翰苑、言はゞあちらの宮内省の直轄の圖書館ともいふべき所に於て『大梵天王問佛決疑經』といふものを見たことがありますが、其御經の中に、『世尊拈花』のことが、詳しく説いてあるといふことを、蔣山佛惠の泉禪師に話されたことがあると出てゐます。成程其『大

梵天王問佛決疑經』なるものは、現在日本にもないことはない。我が圓覺寺にも確に藏してあります。歴史上の穿鑿に爲ると、種々の議論もあらうが、若しそれがなかつたとしても、既に大體が、教外別傳を以て特色としてゐる禪宗であるから、其邊のことに餘り重きを置いてゐませぬ。何故ならば佛が一生涯の間、彼の廣長舌を以て、横説豎説なされたが、後涅槃の時に至りて、何んと仰せられましたか、

「我れ初め鹿野苑より、終り跋提河邊に至るまで、四十九年間、未だ嘗て一字を説かず。」

と斷言せられたのは、抑も何處を見て言はれたことか、恚ういふところから見ると、敢て『世尊拈花』の一則が、何んの御經から出たといふことを、鐘や太鼓で捜し廻るにも及ばぬ。併しながら不立文字といふたとて、佛は決して一切藏經を離れて、各宗の外に、別に禪宗の僧ばかりに、此大切なことを傳へたなどいふのではない。約めて言はゞ一切藏經は佛の口、教外別傳は佛の肚であります。藏經の趣意が、眞に解つたならば、別傳の旨も自然明かになりませうし、別傳の旨が、我がものに爲つたならば、矢張藏經の趣意が、本當に解らねばなりません。禪と、教とは違ふといふのは、未だ會得せざる以前のこと、會得した後に於ては、禪教の差別はない。故に禪者と雖も、勉めて御經に目を曝して、愈々益々心地を照らし、法理を明かにして行かねばなりません。先づ此位にして本文に入るが、靈山會上に於て、大梵天王が金波羅華といふ美麗なる花を一本、佛へ献上致しました。すると

佛は、直ちに其花を取つて、何んとも言はずに、獅子座の上から、百萬の大衆の前へ拈して示されました。之れは何ういふものか、恚ういふところへ、彼れ是れと言はゞ、直ぐに早や疵が付く、何んとも言ふことは能きませぬ。有なりとか、無なりとか、有に非ず、無に非ずとか、然ういふ四句百非といふやうなものは、全然飛び離れてゐるのだから、却々哲學の一端などを持つて来て、當て候めやうの、推し量らうなどしても、丁度棒を揮つて、月を敲き落さうとすると一般で、到底及びもないことでありませぬ。今や如何なる説法が始まるかと、一會の大衆、悉く容を正し、耳を澄ましてゐる所へ、一本の花をさし出されたのでありますから、此時大衆黙然たりで、一向に何等の意であるか合點が往きませんでしたか何うか、一同ウンとも言はず、水を打つた如く静まり返つてゐました。併し此時の默然は、洵に結構であります。すると御弟子方の一番首位に居つたのが、迦葉尊者であります。百萬の人天、皆黙つてゐるところで、唯獨り迦葉尊者が、ニタリと笑つた。破顔微笑でありますから、生れて百日も経つた程の無邪氣な愛らしい赤子が、洵に憎氣なしに可笑しくて笑ふのでもなく、何うした拍子にか、ニタリとすることがありますが、實に無邪氣で麗はしいものであります。澁紙面してゐる迦葉がニタリと笑ひました。これは何ういふ理由か、此花が何んの花であるなどいふ論とは違ひませぬ。唯最う以心傳心で、會したものより外には、其眞意が解りませぬ。又彼れ是れ言へば、愈々疵が付くだけのことであります。

世尊云、吾有正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門不立文字教化別傳、付囑摩訶迦葉。

(訓讀) 世尊云く、吾れに正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門不立文字教化別傳有り、摩訶迦葉に付囑す。

迦葉尊者がニタリと笑つたところで、それが何う佛の意に適つたものか、直ちに、

『吾れに正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門不立文字教化別傳なるものがあるが、此大法は今日唯今大迦葉に付囑したぞよ。』

と仰せられました。百萬の人天、列坐の前に於て、甚だ明かに、大法を付囑せられました。内所に付囑したのではなく、恰も多勢の立會人の前で、身代をそつくりと相續人に譲り渡したやうなものであります。此藏は米藏でも、金藏でもありません。『正法眼藏』といふ藏で、各一つ宛有つてゐます。大金持でも、貧乏人でも異りませぬ。佛にあつても増さず、衆生にあつても減ぜざる所の寶藏で、此中には、無限の法寶が常に満ち溢れてゐます。『涅槃』とは、天竺のニルバーナ、即ち不生不滅又は寂滅といふことで、『妙心』は妙淨明心、或は妙明眞心などいふのであります。『實相』とは眞實の姿『無相』といふても、實相其儘無相で、元より二つ別にはない。實相其儘無相、無相即ち實相であ

ります。波を掃つて別に水なく、水を退けて外に波なし、水即ち波、波即ち水であります。此甚深微妙の法門を、何う傳へるか、之れを眞個に傳へるには、文字や、言句の上では、到底及びませぬ。縦令傳へ得たとしますも、それは唯道理だけのもので、活きた實物に至りては、決して文字や、言句の上には無い、「不立文字教外別傳」とは、經文の外に、別に傳へたといふならば、何か特別の品物でもあるかの如くに聞えるが、決して然ういふ譯ではありませぬ。實は一切藏經其儘の教外別傳なのであります。恚ういふところは、人々の力で、能く噛み砕いて見るが可い。之れが實に禪宗といふ宗旨の一番の始まりで、それから迦葉は、阿難に傳へ、阿難は商那和修に傳へ、歴代の祖師、一器の水を一器に移すが如く、互に相承け、二十八傳して達磨大師に至りました。達磨大師が始めて支那に傳へ、更に後に至りて、日本に傳はつて、遂に今日に至つたのであります。之れから又無門和尚の拈弄であります。

無門曰、黄面瞿曇、傍若無人、壓良爲賤、懸羊頭賣狗肉。將謂多少奇特。

(訓讀) 無門曰く、黄面瞿曇、傍若無人、良を壓して賤と爲し、羊頭を懸げて狗肉を賣る。將に謂へり多少の奇特と。

拈弄とは、禪宗の術語でありまして、世間の言葉にすると、批評といふことと同じ意味に爲ります。佛祖の因縁に對して、自分の宗旨眼を以て、自由自在に批評を下す。これは禪宗の一つの特色ともいふて可い。或る宗旨に依ると、祖師方のいふたことは、縦令自己の心に於て信じないにしても、何うしても、其言葉を守つて往かねばなりません。だから一言半句の解釋の仕様によつても、違安心などいふて、喧ましいことが起つて來るのであります。其點には禪宗は、大分趣きが違つてゐます。佛や、祖師を批評しようとするには、充分に佛祖の肚の中を研究し、見徹した上で、直ちに佛の肚を以て、佛を評し、祖師の肚を以て、祖師を評するといふ遣り方であります。故に文字や、言葉の上だけを見て、誤解されては困ります。「黄面瞿曇」といふてありますが、元より佛は黄金の色をしてござつたが、それを黄面といふのは、寧ろ罵つた言葉であります。「瞿曇」は巴利語で、ゴータマ即ち佛の姓であります。彼の澁紙面の釋尊が、如何にも傍に人なきが如くに振り舞ふたが、此多勢の中には、

決して豪い人に乏しくなく、遣り人の御弟子達が澤山おりましたし、其他學士や、博士達も幾らもゐた
 でありませう。ところが唯一人の迦葉ばかり揚げたのだから、外の者は殆んど面目を失つたやうな有
 様、此多くの善良なる大衆を抑えて、賤しきものゝ如くにしました。羊を賣るといふ看板を出して置
 いて、狗の肉を賣るやうで、人を欺くといふものであります。『正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門不
 立文字教外別傳』など、如何にも看板は立派なものでありますが、さて其中味は矢張喰はせもので
 ありません。何か特別に有難いことでもあるのかと思つたのに、得て見たら、大したものでもないとい
 ふ言ひ分、恚ういふところは、勝手を知らぬ輩で、何もないなど見たら、大間違ひであります。

只如ニ當時大衆都笑、正法眼藏作麼生傳、設使迦葉不笑、正法眼藏又
 作麼生傳。

(訓讀) 只當時大衆都て笑ふが如くんば、正法眼藏作麼生か傳へん。設し
 迦葉をして笑はざらしめば、正法眼藏作麼生か傳へん。

佛が金波羅華を拈じた時に、迦葉が破顔微笑したから、正法眼藏を付囑したといふならば、此時若
 し百萬の大衆が、皆破顔微笑でニタ／＼笑つたならば、佛は困つたであらう。正法眼藏を何う傳へる
 か、誰れに傳へるか、皆に傳へても可からう。之れに反して迦葉が笑はなかつたら、又何うしたもの
 であつたらう。むかつとした面でもして居たら、教化別傳を何う付囑したであつたらう。傳へやうが
 なかつたらうと言ひ得られるだらうと、鳥渡皮肉をいふて見ました。却々文字に力もあるし、面白く
 評してあります。

若道^三正法眼藏有^二傳授、黃面老子誑^二閻闍。若道^レ無^二傳授、爲^二甚麼、獨^一許^二迦葉^一。

(訓讀) 若し正法眼藏に傳授有り^と道は^ゞ、黃面の老子閻闍を誑諱す。若し傳授無し^と道は^ゞ甚麼と爲すか。獨り迦葉を許す。

此處が教外別傳の別傳たる^ところであります。

「吾れに正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙の法門、不立文字、教外別傳有り、摩訶迦葉に付囑す。」

など言はれたから、何か特別に有難い傳授でもあるのか、萬一にもそんなものがあつたなら、それこそ釋迦親爺が、多くの人を莫迦にするといふものである。何も無いか。傳授するの何ん^のとそんな骨ツぽいものがあるものか、唯あれだけの一座の狂言であるなどして了つたならたはけらしい。然らば何故に百萬の大衆の其中で、唯一人の迦葉だけを許したか。是れ以上は人々の力で見るが宣しい。尙ほ「黃面老子」とは、釋尊を指したので、「閻闍」の閻は、周の世に五家を比とし、五比を閻とすとあり、即ち二十五家をいふのであります。又閻とは里中の門のことでもあります。

頌曰

拈起花來、尾巴已露、迦葉破顔、人天罔措。

(訓讀) 頌に曰く、花を拈起し來れば、尾巴已に露はる、迦葉破顔、人天措くこと罔し。

釋尊が、僅に一本の金波羅華を拈じたところで、尻尾が出た。早や最う何か化の皮が現はれたぞといふ言ひ分であります。獨り老耄の迦葉が、ニタリと笑ふたが、百萬の人天は、皆黙つてゐた。併しそれが却々好い。此處に至りては、豈啻一會の大衆のみならんや。縱令三世十方の諸佛、番々出世の祖師方が、一時に出頭し來ると雖も、矢張措くことなしであります。ウンともスンとも言葉の挟みやうがあるまい程に。

釋尊は、淨飯王の子で、幼名は悉達多、又は瞿曇といふ、十九歳(或は二十九歳)の時、王城の四門に遊びて、老、病、死の狀を見て、深く人生の無常を感じ、一夜密に城を遁れ、深林に入りて出家し、苦修練行すること十二年(或は六年)、苦行は成佛の因にあらざること悟り、斷然苦行を捨て、尼連禪河に浴し、乳糜を取り、伽耶の菩提樹下に、吉祥草を敷きて坐し、深く禪定に入り、一夜明星の東天に輝くを見て、廓然として大悟した。時に年三十(一説に三十五歳)、成道後寶壽八

十歳に至るまで、宣教に勞し、西曆紀元前四百八十五年二月十五日北方拘尸那揭羅城の沙羅樹下で涅槃に入つた。其傳道は成道の日から、八十歳入滅に至る迄五十年間であつた。

七、趙州洗鉢

趙州因僧問、某甲乍入叢林、乞師指示。州云喫粥了也未、僧云喫粥了也。州云洗鉢盂去。其僧有省。

(訓讀) 趙州因みに僧問ふ、某甲乍ち叢林に入る、乞ふ師指示せよ。州云く喫粥了れりや未だしや。僧云く喫粥了れり。州云く鉢盂を洗ひ去れ。其僧省有り。

此一則も簡單であります、洵に有難い。一體此趙州といふ和尚は、餘程變りもので、八十歳まで行脚して、百二十歳までも生きたといふことだが、それだけでも大分様子が違つてゐます。又それ程長生きしたといふばかりでなく、子供の頃から、餘程非凡でありました。傳記を見ると、人の爲めになることが、澤山書いてあります。其一つを摘んで言へば、初め瑞像院といふ寺で得道しました。

其時は十歳に爲るかならぬ時であります。後南泉和尚に就いたが、當時禪門の大善智識である南泉和尚の所へ、師匠の供をして拜謁に往きました。南泉和尚は大分老年でありまして、其時丁度身體を横たへて居られました。小僧が遣つて来たので、

「御前は何處から来た小僧だ。」

と言はれると、

「私は瑞像院から、師匠の供をして来ました。」

と答へた。南泉和尚は、小さい小僧でも莫迦にせず、小賢しい顔をしてゐると思ひながら、

「却つて瑞像を見るや。」

と、丁度鎌倉の大佛と思へば宜しい。彼方で多くの人の詣づる所であります。然らば彼の大佛を拜んで来たであらうなといふことであります。すると小僧の趙州は、

「瑞像を見ず、唯臥如來を見る。」

と答へました。鎌倉の大佛は拜みませぬが、寢佛を拜みますといふことであります。寢轉んでゐる老僧に、御目にかゝるといふが、却々天賦の技倆といふものは別であります。すると南泉和尚は、

「汝は有主の沙彌か、無主の沙彌か。」

と問ふた。お前は師匠のある沙彌か、それとも師匠のない沙彌かといふことであります。すると

「有主の沙彌。」

と答へた。有難い師匠があるといふことであります。

「然らば有難い師匠があるといふならば、それは何處に居るか。」
と、尚ほ南泉和尚が問ふと、恭しく立つて、

「仲冬嚴寒伏して、惟れば和尚尊體萬福。」

と答へました。洵に毎日御寒いことござるが、先づ御障りもなく、御目出たうござるといふので、却々十年二十年骨を折つた者でも、恙うは出て来ませぬ。況して小僧のことでもありますから、南泉和尚は、此小僧人並の者ではないと思ふて、直ぐさま入室を許されたといふことであります。それから南泉和尚に參じて、七十歳まで生きるのも容易ならぬが、八十歳の高齡に至るまで行脚して、百二十歳の長命を保つたといふ此趙州和尚は、實に全身皆口ともいふべき和尚で、一言一句の間に於て、無雜作に悟りらしいことはなく、少しの圭角もなくして、微妙の言句を以て、學者を接待せられました。古人は「口唇皮上に光りを放つ」と言ふて稱讚してゐます。此趙州和尚の所に、僧がやつて来ました。此僧は却々磨り上げてゐるといふ評判でありましたが、さて此僧が「某甲、乍入叢林乞師指示」といふた。今では専門道場などいふ名稱も付いてゐるが、叢林といへば、古今を通じて、禪門修行の道場をいふのであります。平易に言ふならば、

「私は初めて恚ういふ禪堂に掛錫致しました。今日から參禪が御願ひ申したうございます。切望御指圖を願ひます。」

と言ふたところ、「州云喫粥了也未」で、今朝粥を喫したかと尋ねられた。すると「僧云喫粥了也、實ハイ今朝粥を喫しましたと答へると、「州云洗鉢盂去」で、それでは食器の鉢盂を洗つて置けと。實に無雜作であります。悟りらしいところは少しもなく、洵に有難い接得であります。少しばかりの悟りを開いたといふても、其悟りが鉢盂にクツついてゐるやうでは不可ぬ。鉢盂をスッキリ清淨に洗つて了はねばなりません。悟りは迷ひに對してこそ價値はあるが、迷ひがなくなつて、悟りなるものに何時までもクツついて居れば仕様がな。併し此處では、然ういふゴテくしたことを言ふのではな。い。

無門曰、趙州開口見膽、露出心肝、者僧聽事不眞、喚鐘作甕。

(訓讀) 無門曰く、趙州口を開いて膽を見せしめ、心肝を露出す。僧事を

聽いて眞ならずんば、鐘を喚んで甕と作す。

此趙州といふ和尚は、全身皆廣長舌といふ有様でありますが、僅に一言半句を吐いても、五臟六腑が光りを放つて現はるといふ、肚の中を丸出しにさらけ出して見せてゐるところがあります。と損ろで僧も、却々の僧ではないが、併し無門和尚は、鐘を撞けといふに、甕を敲くといふやうな聞きこないをして、早合點をしては不可ぬと言ふてゐるのであります。

頌曰

只爲分明極、翻令所得遲、早知燈是火、飯熟已多時。

(訓讀) 頌に曰く只分明に極るが爲に、翻つて所得をして遅からしむ。早く知る燈は是れ火なることを、飯熟すること已に多時。

學問や、理屈は結構なものに違ひありませんが、それを以て禪宗の悟りを擲いて見ようとしても、それは不可ぬ。善く泳ぐ者は善く溺れるといふ諺もありまして、實は餘り學問や、理屈で明かに細かに研究し過ぎて、却つて學問や、理屈に縛られて、眞理に遠ざかる場合があります。理屈の關門を、一つ打破して、理屈以上に首を出して、初めて別境界があります。「喫粥了れりや未だしや、鉢盂を洗ひ去れ」とは、事が餘り明らさまの爲めに、却つて解らぬと言はれる。禪宗の悟りといへば、何にか灰吹から蛇でも出ることかのやうに思ふものがあるが、それは大間違ひの話でありまして、人間常識以外に於て能きぬことは、決して禪宗では採らぬのであります。愚圖々々と遠方へ持つて廻つて、かかぐり當てようとするには及ばぬ。燈は火だといふことが分つたならば、飯は疾く出來てゐるのであります。悟りは元より己が鼻の下にブラ下つてゐるのであります。始終言ふ如く、直覺で往かねばなりません。併し直覺々々と言ふても、一枚悟りではない。悟りの上には重々の關門があります。此活

三昧に入らなければ、却々鉢盂をスツクリ洗ふといふ譯には往きませぬ。
趙州和尚の傳は、前章に掲げたから、爰には略す。

八、奚仲造車

月庵和尚問僧、奚仲造車一百輻、拈却兩頭、去却軸、明甚麼邊事、

(訓讀) 月庵和尚僧に問ふ、奚仲車を造ること一百輻、兩頭を拈却し、軸を去却して、甚麼の邊の事をか明かにす。

此本則に入るに先き立ちて、一言して置きますが、衲が見受けたところ、讀者諸君は夫れ々々の方面、即ち自己の職務に於ては、大なる智識、大なる經驗を有して居られ、其途に於ては、立派なる紳士、有爲なる立派人であつて、最も吾々は尊敬するのでありますが、それと同時に、亦此宗教といふことに至つては、明白に言ふて了ふと、餘程幼稚であらうと思ひます。恚う言ふと、諸君を見下し、輕蔑したやうに思はるゝであらうが、實は懸値なしに言ふのであります。維新頃の日本人は、其多數の者が、無宗教に安んじて居りました。其無宗教といふのは、如何なることであるか、善いことであ

るかといへば、然うではありませぬ。如何にも日本人は、輕躁な、浮薄なことを、日本人自身が自白して居つたやうな有様でありました。それで文明とか、若しくは開化といふやうなことを意味してゐるのは、唯物質的の進歩、物質的、器械的の學問、智識さへ進めば、能事了れりといふやうに、合點して居つた時代があつたのであります。學問といへば政治、經濟、或は法律とか、乃至科學とかいふやうな事だけが、學問のやうに思はれて居りましたので、眞正なる哲學、宗教といふことに至りては、人の注意を拂はれずに居りました。故に其時代に於ては、無宗教といふことを得々として、人前に於て自らいひ、自負してゐたやうな有様でありました。即ち宗教に淡泊であつたのであります。然ういふことを得意にして居つた時代があつたのであります。それを十年二十年經過した今日の時代から、振り返つて見ると、如何にも吾が國民の考へが、淺墓でありまして、如何にも幼稚であつたといふ事が解るであります。ところが我邦も漸次進歩して來まして、單に政治若しくは經濟等の方面ばかりでなく、大いに日本人に自覺心といふものを喚起した動機が來しました。勿論其動機も種々ありませうが、先づ日清戰爭、それから北清事件、進んで日露の大戰爭、此日露戰役は、我邦歴史あつて以來の大戰爭で、殆んど世界に稀な大戰爭でありました。恚うした非常なる場合に出會ふて、吾等國民が、一つの自覺心といふものを喚起したのであります。それと又同時に、世界列國の人が、日本の國勢、歴史、風俗、習慣とあらゆる方面に向ひ、眼を睜つて注意するやうに爲つて來て、内の事情、外の事

情、即ち内外相倚つて、吾等同胞が、一つの自覺心を起して來たやうに思はれます。之れを他方で言ふて見ると、從來歐米人の考へで見ると、世界人類の中に就いては、種々人種が分れてゐるが、其人種の中に、白人種即ち白皮を被つてゐる人種が、あらゆる人種の中で、最も優秀である。それといふのは彼等の頭腦に、習慣的遺傳的に持つて生れて來たので、人種が優れてゐると同じく、宗教といふやうなものも亦然りで、世界宗教多しと雖も、基督教が最も優れたるものと思ふてゐたのであります。併し特に一言して置かねばならぬのは、基督教の中にも、種々宗派が分れてゐて、希臘教とか、プロテスタンとかいふやうに分裂を來たしてゐますが、其中にも舊教には派が少くて、新教には十百を以て數へる程分れてゐます。其分れてゐることは言はず、宗教といへば基督教、人種といへば白人種といふやうに、恰も日本人が花といへば櫻、人といへば武士と思つてゐるやうな理屈であります。これは悪く言へば、日本人が自惚れてゐたので、善く言へば自尊心でありませう。此心がなかつたならば、國を立てることはできないのであるが、それと同じく、彼の西洋人も、人種といへば白人種に限る如く、宗教といへば基督教に限る如く思ふてゐたのであるが、其間日本大戦争に出會つて、一つの變化を生じて來たのであります。變化といふよりも寧ろ劇變を來たしたのであります。それで從來白人種が優れてゐると思ふてゐた彼等西洋人の自信が動いて來ましたのは、學問よりも、理論よりも事實が動かして來たので、博愛を標榜した希臘教、其基督教の中でも、最も神の道を守るといふ露

西亞人の爲すところが、却つて人道に悖つてゐるやうなことをしてゐます。それは日本人が見たばかりでなく、外國人が公平の眼を以て見たのであります。四海兄弟と何處までも博愛の行ひをするところの者は、基督教に限ると思ふてゐた其基督教の一つである希臘教を奉じてゐる露西亞人が、彼の如き行ひを爲し、彼等が異端とか、外道とか言ふてゐた佛教、神道、儒教を奉じてゐる者の爲す所が、却つて彼等の唱へてゐる神の教を守つてゐるのであります。であるから日本が戦争に勝つたばかりでなく、人道の上にも勝つてゐるし、博愛の上にも勝つてゐるのであります。恚うしたところから、彼等の堅く執つて居つた信仰が動いて來たのであります。白人種ばかりが善いことをして、銅色の人種又は炭團的の人種は、到底人道的の働きをすることができぬと思ふてゐたのに東洋人種が存外立派な働きを爲し、赤十字社、愛國婦人會等其他の慈善公共的の事業なり、又は軍事作用の上にて、白人種にしたことより劣つて居らぬといふ有様が、日露の大戦役に於て、事實の上に證明せられて來たといふことに爲りました。恚うしたことが、現象の大なる一つでありまして、之れが爲めに日本人が、自覺心を起したのであります。元來日本人といふものは、例へば宗旨の上でいふと、名は基督教でなくとも、彼等の唱導してゐた博愛なるものは、固有に有つてゐたので、佛教でいふ慈悲心は、日本人が有つてゐたのであります。それが動機に出會はなかつたのであるが、豈に圖らんや、日露戦争といふ大動機に際會して、始めて日本人の能力を、此處に現はして來たのであります。日本人の持前といへ

ば大和魂であるが、其大和魂を養成し、鍛錬した即ち守り立てたものがなからねばならぬといふので彼等西洋人は、日本の研究を始めました。それで種々の方面から研究することに爲りまして、菊地大麓博士の如きは、英國の大學長から聘せられ、日本教育の根本を講話して居られるのであります。恁くの如く英國なり、米國なり、外國人が日本の研究を仕始めたところから、一大精神元氣、大和魂其物を鍛へ上げたのは、何んでありませうか。神道は如何、將た佛教は如何、更に研究して見ると、最う一つ進んで、奥の院を見ますと、種々の方面に發揚せられて、其精神が本當に出來上つたことが分り出したといふやうな現今の有様であります。其處で恁ういふ自覺心を生ずると同時に、更に一方に於ては、牆壁を撤回して了りました。そして益々進んで、世界列國の長所を採用しようといふ有様に爲つて來たのでありますから、宗教界の現狀に就いても、基督教萬國青年大會が、此度日本に開かれるといふやうなことに爲りました。これも日本の戰勝國といふ大なる名譽を荷つたからであります。實に萬國的會合が、日本に開かるゝといふのは、今回が始めてであります。其他プース大將といふ人も遣つて來るし、又諸方面から歡迎を受けてゐるといふ有様、是等が日本人に自覺心を生ずると同時に、宗教といふ側に、頗る注意を拂つて來た證據であります。然ういふやうな有様から、吾々の如き籍を佛教に掲げてゐる者でも、外國人から注目せられ、或は尊敬せられ、佛教の眞意を糺さうといふて、吾々に向つて望みを屬して來たのも、之れ皆日本の戰勝の効果と言はねばなりません。恁ういふ

やうに進んだのは、喜ぶべき現象であるまいか、淺薄にも何も知らぬ者が、自分は無宗教だとか、或は宗教に冷淡だとか、所謂喰はず嫌ひでゐた人があつた時代から見れば、宗教心といふものが、好い鹽梅に發達して來たのであります。之れを種々の方面から尋ねて見て、日本といふ國が、實に良い地位にゐる現今の世界の大勢から眺めて見ると、吾々は政治經濟とか、實業のことは分らぬが、獨り宗教といふ側から見ても、日本は餘程良い地位に立つてゐます。即ち世界の西の方からも、東の方からも、新なる潮流が、日本島國に向つて、集つて來るのであります。爲めに東洋の名物たる大なる宗教、深遠廣大なる佛教も、爰に於てか今や世界の佛教の策源地、策源地といへば戰爭のやうだが、原動力を造ることに爲つてゐるのも我が邦、それから慈善の專賣、博愛の間屋と認められてゐる基督教も、日本の基督教が出來んとしてゐます。元は印度の佛教、支那の佛教でも、今や既に日本的に脱化して了りました。基督教も其方面に向つて力を用ゐるので、今や日本化せんとしてゐるやうな模様であります。であるから若し良い鹽梅に導いて往つたならば、基督教も佛教も、其名を忘れて了つて、畢竟吾々が先づ一口にいへば、法衣や、袈裟を脱いで了へば、赤裸の人間で、基督教の十字架を脱れば、同じく赤裸の人間で、互に握手して見れば、實は親密の親子であるといふやうに爲つて來ます。斯様なことであれば、別に基督教だの、佛教だのといふやうに、名に依りて堅く爲らないでも、以前は兄弟分であつたに違ひありません。決して着物の區別を論ずるのではない。佛教に平等差別の兩側

あるが如きもので、畢竟佛教でいふ慈悲心、彼等のいふ博愛心も、字こそ違へ、其意義に至りては別はないのであります。各宗教は發足點で同じであるから、旅行して種々様々の景色を見て来て、後に立戻つて見れば、同じことではなければならぬ。それが時代が古くなり歴史が積んで来ると、忘れて了つて、末には着物が違ふ爲めに、他人の感をして見たりしたのが、存外他人でなくして、親類であつたといふやうなことは多くあります。維新前は徳川氏の政略上から起つたのでありませうが、宗教といへば、外から来ると、切支丹婆天連と妙なことを言ふてゐたので、維新後でも、基督教といへば、邪教と思つてゐたのであります。だから演説でも、基督教退治が流行りました。そして基督教の演説がある時、煙草盆を投げたりした時代があつたと同時に、彼等も日本人は話せない人間で、眞正の宗教を知らぬ、チヨン鬻的野蠻的人間と思つてゐたので、孰れも思ひ違ひであつたのであります。それが東西の文明が、段々進んで、近づいて来るに従ひ、日本でも敵でないといふことが解つて来たので、縱令佛教でも、迷信家のすることは、潰れて了はなければならぬ。恰も太陽の光りが發する時には、種々の霞や雲は悉く晴れて了はざるを得ぬと同じで、佛教といふ中にも、明白に言ふたら、眞に釋迦の原始時代の佛教といふものは、衲の考へでは、三分通りか二分通りか、嚴密に調べて見れば、一分位と思つてゐます。餘は悉くそれから後に出来て来たもので、次第々々に迷信が附け加へられたのであるが、迷信といふものは、恰も大木に黴菌が附着いて、其木を枯らすといふやうなもので、佛

教にも迷信といふ黴菌が附着いてゐるので、或る者は之れが佛教であるといふが、學問的に調べて見ますと、佛教にはそんなことはないといふことが多いだらうと思ひます。畢竟一種の感情で、往昔の僧は、是くの如く仕附けたから、是くの如くせねばならぬ。信者は是くの如くいふものだから、是くの如くせねばならぬといふやうなもので、一つの感情であります。總ての宗教は、後から附けたものが多くと思ふ。例へば葬祭する如きことも、宗教家の一つの仕事には違ひないが、後から附け加へたものが、主なる儀式の如くに爲つてゐるのであります。然るに今日は、葬式を除けば、僧の仕事は何處にあるかといふやうに思つてゐる者がありました、殆んど一種の營業的の有様に爲つてゐます。ところが親しく佛經を拜讀して見ると、佛の定められたものには、佛自身が葬ひなされたことは、殆んど無いと言ふて宜しい。これは一例を挙げたのである。原始時代になんか、現今は澤山出来て畢竟迷信のことは、佛教家のすることのやうに思つてゐます。之れを以て見れば、基督教にも然ういふことがあらうと思ひます。原始時代の基督教は、存外佛教的のやうであつたかも知れませぬ。それが種々の事情の中に擴がつて来て附け加へられ、原始時代のものと違つて来る有様がありはせぬかと思ひます。

それから禪といふことでありますが、大抵の人の考へでは、佛教の中の一つの宗派と思つてゐる。即ち一つの宗派の或る部類に屬する僧の始めたことと思つてゐるのであるが、それは間違ひありませ

ぬ。けれども夫れに限られてゐると思つてゐるのは誤解であります。歴史上から言つても、禪は佛以前からあつたもので、達磨が初めて禪を考へ出したものではありませぬ。印度には、達磨よりも、釋迦よりも以前にあつたのであります。プラフマ即ち波羅門の宗派は種々あるが、其波羅門教の各宗派の中に、ベタンタ、ヨーガといふやうな宗旨は、殆んど禪宗といふても可いので、禪を以て本意として居つたものがあります。歴史から考へて見れば、禪は佛教以前にあつたものといふことが分る。獨り波羅門のみならず、基督教、マホメツト教の中にも、禪の意味はあります。併し斷つて置くが、吾々の唱へてゐる『達磨禪』とは、少しく違ひます。大いに似てゐるところがあるが、獨り波羅門教、基督教其他の宗教のみならず、往昔の道德的、哲學的學問には、皆禪といふ意味が備はつてゐたのであります。禪といへば、種々解釋があるが、禪は心なり。併し動ける心でなく、心といふ意味は、甚だ廣い、マインドといふ意味とは違ひます。寧ろ心の本體といひ直して置かねばならぬ。禪は心の本體なりと言ふても、動ける心とは違ひます。畢竟其心といふものを、言ひ直すと、往昔からいふ妄想的考へでなく、正思惟即ち正しく考へると書いてあります。又は靜慮即ち靜に慮ると書いてあります。これが納が言ふところの禪で、其禪は今言ふ如く、あらゆる宗教、哲學、倫理の考の中に入つて來たといふて可く、専門的の禪をいふのでない。恚ういふ工合に考へると、古人が言ふた如來の禪、菩薩の禪、菩薩といへば、大きなことをするのは菩薩で、佛敎的の僧といふ意味でない。大心の衆生とい

ふ意味で、世界の平和を理想してゐる。大なる心を有つてゐる人といふのであります。菩薩には、菩薩の禪があります。又凡夫の禪、凡夫とは廣い意味で、一般の人類の禪があるといつてゐます。又外道禪なるものがあります。外道といふは、寧ろ哲學者とか、理學者とかいふものが、意味に籠つてゐるのであります。外道といへば、後に至りては、此言葉が妙なところに使はれるやうに爲つて、惡るの意味に爲つて來たので、正しくない者を、外道としてゐます。宗教家に言へば、異端と意味して居つた。往昔は然うでなく、内道に對する外道と爲つてゐるのであります。換言すれば、外の學者を外道としたのであります。それが後に至つて、變化して來て、無教育者が喧嘩をする場合などに、對手を罵詈して外道といふやうなことに爲つて來ました。それで學者禪、凡夫禪即ち普通の人の禪、恚うした工合にいふ時は、何の方面にも禪はあります。今いふ禪は、こんな所から言へば、基督教が嫌ひ、佛敎は厭やと言ふても、尙且禪といふ意味はあるのであります。此意味を應用して往くと、算盤を弾くにも、鉄を擔ぐにも、禪があるといふやうなもので、又活花にも禪があれば、柔術の奥義や、擊劍の秘傳も、禪から出てゐます。恚うした工合に、廣い意味から言へば、能樂を舞ふ、謡曲を諷ふ、淨瑠璃、義太夫でも、禪が備はつてゐるのであります。長唄、清元、常盤津にも、禪があるに違ひない。して見ると、殆んど禪ならざるはない。植物學者が世界を見ると、植物的に萬事が出來てゐるし、動物學者が見れば又其通りで、一種の微菌を捉へて來て調べると、悉く動物的に出來てゐるやうなもの

であります。それで一つの眞理を、種々の方面から解釋して見ると、一つの本體を失つて居らぬのが多いのであります。であるから今日宗教の側から、禪の記憶を呼び起して見ると、例へば基督教の聖書中、馬太傳第四に彼の耶蘇はヨハネに就いて、ヨルダンの河に於て洗禮を受け、其後何うしたかといふと、大野原に至りて坐禪をしたといふことがあります。其時種々の惡魔が出て来て、其靜慮、坐禪を試めさうとしたのであります。耶蘇は四十日間も、斷食して坐禪してゐたところへ、惡魔が出て来て、野原へ落ちてある石を取つて、お前が果して神の子なら、然う飢えて居らないでも、此石を麵麩にして喰つたら可からうと言ひました。すると耶蘇が、人は麵麩のみで活きるものではないと言つたと書いてありますが、これは良い言葉であります。只人間は腹一杯飯を喰ふたら、生きてゐるといふものではありませぬ。如何に美しい衣服を、身に纏ふても、如何に宏壯な邸宅に住んでゐても、如何に美食をして、如何に巨萬の財産を有してゐても、如何に人爵が高くても、此點に於ては三文の價値もありませぬ。人は麵麩のみにて生きてゐると思ふたら、大間違ひであります。信仰心といふものは、極めて堅固なもので、神様の御言葉、日本の譯語でいへば、神様の道に依りて生きてゐるのであります。三十日四十日喰はずとゐても、決して死んだのではない。實に耶蘇の心は、盛んなりと言ふべしであります。其他惡魔が、いろ／＼の所へ連れ廻つて、高い所から飛び降りて見よ、若しお前が神様の子ならば、神様が救つてくれるであらう、怪我はしないであらうといふて試みて見

ます。又惡魔が俺の足を禮拜せよ。然うしたら世界の榮華を窮めさせよう、總て己れの意の如くならしめて遣らうと言ひました。けれども如何に意の如くなつても、惡魔の足を禮拜することは能きぬ。佛と神とは違ふやうであるが、其名こそ異つても、眞の神佛は同じであります。釋尊が菩提樹下で、悟りを開かれたまでは、種々の惡魔が現はれて邪魔をしました。即ち惡鬼羅刹赤鬼青鬼が飛び道具で釋迦を迫害しようとし、一方からは美人が出て来て、釋迦の心を蕩かして了はうとしました。ところが釋迦は、關せず焉で、洵に安閑無事でありました。恰も馬太傳に記してある耶蘇の四十日間行をして、惡魔と闘ふたのと、釋迦の降魔と同じことでもあります。聖書と一切經と名稱は異つても、其本旨は同一であります。佛や耶蘇のみではありません、マホメットの傳を読んで見ると同じことで、ヒラの山で、坐禪をして居つた時に、コーランといふ經文を授かつたと書いてあります。恚ういふ有様で、何れの宗教の教祖にしても、皆靜慮、坐禪をせぬものはないやうであります。それで柄の考へに依ると、何うしても世の中が開ければ開ける程忙しくなる、世の中が忙しくなる程、此事は益々大切のことと思ひます。

禪といふものを、平たい意味で言へば、大きく仕事をしようと思へば、大きく休まねばならぬのであります。柄は積極的に言ふのでなく、消極的詰り控え目に見たところで、餘程讓歩したところでいへば、大きなことをするには、大きく休んで置かねばなりません。往昔の人が、能く働き、能く休む

といふ言葉は、大いに味はふべきだと思ふ。休むといふても、不道德の遊びをするといふのでなく、眞に大事業をする人は、眞に能く休み、能く遊ばねばならぬ。恚ういふことから見ますと、西洋人は確に之れを實行してゐます。一週間自分が事業に身體を苦しめたならば、日曜日には慾も得も一切打ち忘れて、先づ寺に詣で、祈禱をします。又寺に往かなければ、衛生的の公園に往くとか、嬉々として白髪の老人も、三歳の孩兒も同じやうに遊びます。貧乏人も富豪も、老若男女の別なく、嬉しく悦んで遊ぶのであります。それで元氣を恢復します。恚うして一時間遊んだのは、百時間働くことが能きるといふ理由で、終日清浄な公園に往つて遊び、勇氣を貯へて置くのです。畢竟新鮮な空氣を吸ひ、明かなる日光に浴して、身體を健かにするから、八方に向つて活動することが能きるのであります。佛は三千年前此意を以て、一の宗教を立てられたのであります。即ち精神界に於て、大なる休息場を造られたのであります。佛と言はず、マホメットと言はず、耶蘇と言はず、其他あらゆる碩學高僧の行り方は、皆其裏面には別坤乾といふ意味を有してゐるのであります。

爰で愈々本文に入りますが、『月船和尚僧に問ふ、奚仲車を造る一百輻、兩頭を拈却し軸を去却して甚麼の邊の事をか明かにす』の奚仲は、黃帝の時代に居つた人と思はれます。又禹の時代ともいふてありますが、能く分りませぬ。此奚仲は、車を發明した人でありませぬ。併し車といふても、一種異つたもので、此奚仲が百輻ばかりの車を造りました。これは借りごとで奚仲が車を百輻造つたが、其兩

頭を拈却し、即ち兩方の輪といふて宜しい。又前後の横木といふても差支えありませぬ。それを外したのであります。然うして『軸を去却す』で即ち心棒を外したので、車の總てを外して了つたといふ意味であります。輪は輪に返へし、心棒は心棒に返へし、何もかも引き解いて、車の形をなくして了つた。然うして『明、甚麼邊事』とは、之れを何んと名附けたものかといふ問ひであります。納が辨を附けて見ると、人間の耳を除き、眼を取り、鼻も取つて了ひ、そして頭を截り割つて、尙ほ手足も切り取つて、醫者が解剖するやうに、何もかも取り除いて了つたら、何んと名附けるか、之れが即ち禪であります。禪といふものは、講釋では言へぬ、何うしても禪は聞いたり、納の述べるのみでは解らぬ。先づ手引をするのであつて心を明らかしむるといふことは、當人自身がすることでありませぬ。其方法は此方から指圖することがあるが、畢竟人々自分の力で嚙み出すのであります。即ち其方法として公案を與へるのであります。恚う爲ると一寸答へが能きぬでありませぬ。其處を無門和尚が、次ぎの如く批評したのであります。

無門曰、若也直下明得、眼似流星、機如掣電。

(訓讀) 無門曰く、若し也た直下に明かめ得ば、眼は流星に似て、機は掣電の如くならん。

「流星」といふのは、空を飛ぶ星で、「掣電」は稲妻であります。其早さは捕捉すべからざるもので、心の働きといふものは、皆然うであります。一例を擧げて見れば、假りに一時間二十哩を走る汽車に乗つて、此地球から太陽に往くとすれば五百年ばかり要すると、天文學者が言ふてゐますが、それを七八分間で往來してゐるものは光り、即ち光線であります。物質的光線といふものは、幾ら早いといふても、七八分間要するのであるが、吾々の心の働きといふものは、これよりも早くて、殆んど名状すべからざるものがあります。即ち人間の心であります。之れを形容して見ると、眼は流星、機は掣電の如しといふより外はありません。これが解つたら頗る面白い。

頌曰

機輪轉處、達者猶迷、四維上下、南北東西。

(訓讀) 頌に曰く機輪轉する處、達者猶ほ迷ふ、四維上下、南北東西。

「頌」とは、形は詩人の作る詩であるが、其中には、宗旨の眼目を具へてゐます。宗旨を具へて居らねば、頌とは言ひませぬ。韻もあれば、平仄もあつて、宗教的一つの歌であります。詩を解する力がないと、禪宗の頌は解りませぬ。「古池や蛙飛び込む水の音」の意味が解らぬと、頌の意味は解りませぬ。月庵和尚が「拈却兩頭去却軸」云々と、車を廻し出した時には誰れでもきよろしくし、如何なものでも迷ふ、若し也た直下に明らめ得て、月庵和尚の肚が解つたら、それこそ自由の働きが出て来る。即ち「四維上下」上にも、下にも、東にも、西にも、十方無礙に通するのであります。何うしても禪は、講釋ばかりでは解らぬ、本人自身が考へねばならぬのであります。或る者は、禪宗は一種の學問のやうに言ふてゐますが、それは一を知つて其二を知らぬ者で、畢竟修め行ふのであるといふことに、重きを置かねばなりません。

開福寧法嗣潭州大瀉月庵善果禪師上堂云々と「無門關」の註にあるのみで、其詳細の経歴明かでない。奚仲のことは、講話中に其大要を述べてあるから爰には略す。

九、大通智勝

興陽讓和尚因僧問。大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道、時如何。讓曰其問甚諦當、僧云既是坐道場爲甚麼不得成佛道、讓曰爲伊不成佛。

(訓讀) 興陽の讓和尚因みに僧問ふ。大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道の時如何。讓曰く其問ひ甚だ諦當なり。僧云く既に是れ坐道場甚麼と爲すか。不得成佛道なり。讓曰く、伊れが不成佛なるが爲めなり。

「興陽讓和尚因みに僧問ふ」とあるは、或る修行者が出て来て、恚ういふ問題を提げて来たので、こ

れは其因つて來るところは「法華經」にある事柄であります。詳しくいへば「法華經」の中の「化城喻品」といふ一章の中にある事柄であります。往昔大通智勝佛といふ佛がありました。十劫坐道場といふのは、十劫即ち劫は、サンスクリット語のカルパといふことで、畢竟長時間といふことで、無量の長い時間といふ意味、例へば此處に四十里四方程に延びてゐる大なる石があつて、此大きな石を百年目に一度、天使が天降つて來て、着てゐるところの羽毛のやうな軽い着物で、堅い四十里四方もある大きな石に觸る。觸り觸つて、此大きな石か磨滅して了ふ時間を一劫といふやうな次第である。であるから十劫といへば大變な長時間であります。これは畢竟十劫といふことに就いての解釋で、往昔大通智勝佛が、悟りを開かうと思ふて、一劫のみならず、十劫の間道場に坐つてゐました。併し此道場といふものも、種々に解釋が出来ます。「維摩經」に「直心是道場」といふてあります。之れは頗る良い言葉で、衲は時々此句を、扁額や幅物に書いて遣つたが、直心といふは直き心、直しき心で此直しき心是れ道場なりといふことであります。それから道場、此道場といふことを、形の上から言ふと、高座を設けるとか、本尊を安置するとか、種々の莊嚴を施すとかする所をいふのであります。これは座敷の上や、堂の内を指して言ふのではありませぬ。直心言ひ換へれば眞直、此直心が即ち人固有の大道場であります。恚ういふやうな解釋をしなければなりません。往昔大通智勝佛が長時間直しい正念を以て、坐禪三昧に入つて居つたといふことであります。ところが「佛法不現前」で、佛

道を成すことを得ずといふ。これが一つの疑問であります。長い間坐禪をしてゐたら、必ず佛道を成する筈であるのに、佛法現前せずして、佛の道を成することができなかつたといふのであります。これは假りに二様に解釋しなければならぬ。大體此處に『坐道場』といつてあるのは、形の上の坐禪であります。形の上の坐禪とは、眼を瞑つて身體を眞直にして『結跏趺坐』といふて、足を組んで手を拱き、何時までも長い間坐禪をして居つたが、更に何んの益もない。石佛を据ゑた如く、百年千年経つても、即ち檣楊木の座禪、枯れたる楊柳の木座禪、或は涅槃堂の座禪ともいふが、此場合涅槃といふのは、空に歸した有様であります。空に歸した座禪を、長い間して居つても、何んの靈驗もないといふことであります。之れに就いて實例を述べると、往昔馬祖大師といふ人が、衡嶽山といふ山に入つて、形の上の座禪をしてゐました。彼のハーバート大學のゼームス教授、又コーペンハーゲン大學のランゲ博士などが、形の上の座禪をすることを、學生に勧めてゐますが、其行り方は多少似てゐます。さて馬祖大師が衡嶽山に入つて、形の上の座禪をしてゐると、師匠の南岳懷讓禪師といふ人が其處へ往つて、馬祖の座禪を眺め、如何にも殊勝にしてゐるから、之れを一つものにして遣らうと、『お前は何をしてゐるか、虫も殺さぬやうなことをしてゐるが。』と尋ねた。すると馬祖は、『座禪をして成佛しよう、作祖しようと思ふてゐます。』

と答へた。其時禪師は何事も言はず、其處に落ちてあつた瓦を拾ひ、石の上に持つて行き、ゴシク磨り始めました。其處で馬祖は禪師に向つて、

「禪師は何をしてお在で、すか。」

と尋ねた。すると禪師は、

「何をするのでもない。此瓦を磨いて鏡にするのぢや。」

と言ふた。

「瓦を鏡にすることは到底できません。そんな馬鹿なことはありませんまい。」

と馬祖が言ふと、禪師は何んの猶豫もなく、直ちに其言葉を捉へて、

「その様な形の上の座禪を、百年千年行つてゐても、成佛することはできない。」

と言ふたので、馬祖は初めて氣が付いたといふことであります。又一例をいへば、

「牛の車に駕するが如く、牛往かんずば、牛を打せんか、車を打せんか。」

と言はれた禪師の言葉があります。牛車が動かなくなつたら、牛を打つたものであるか、それとも車を打つたものかと言はれた如く、今の座道場は、形の上の座禪と見ても可い。形の上の座禪を、十切の間として居つたが、何んの益もない。何んの不思議もなかつたといふのであります。去れば禪宗では「動中の工夫は、靜中の工夫に優ること、百千萬倍」。

といふ有難い示しがあります。動中といふのは、動ける中の工夫、動く中の工夫は、静かなる中の工夫に優ること、百千萬倍であるといふことで、此道場といふことを、二つに見たのであります。人は朝から晩まで、種々さまざまなる局に當つてゐますが、静かなる時か然らざれば動く時の二つしかありませぬ。其二つであります。動中即ち活動してゐる中に於て、座禪する力は、静かなる所に於て座禪するよりも、百千萬倍の力があるといふ言葉であります。即ち達磨禪、活動的の禪といふものは、其時にあるのであります。百丈禪師の、

『一日作さざれば一日食はず。』

といふことがありますが、一日何もせずなら、一日何も食ふなよといふことで、随分嚴重な言葉であります。禪宗の意は、恁ういふところに現はされて居ります。恁ういふ意味を以て、禪宗では少くとも百丈和尚の時から、労働は神聖なりといふ意旨であります。高い／＼悟りの裏には、低い／＼行ひがなくてはなりません。佛の頭の頂上でも、吾が尻の下に敷いてゐると同時に、行ふところは童子の足下をも拜すといふのが、禪宗の立前であります。だから禪宗では、柴を運び、水も汲み、あらゆる労働をするのであります。人間の手足で爲し得らるゝところは、悉く爲して往く、決して人手を藉らない。天から與へられたところの立派な手、立派な足、鼻、頭、此飯袋を神聖なる器として使つて往くといふ教へであります。恁ういふ意味であるから、此禪宗の來歴といふものを、書物に就いて

讀んで見ると如何にも立派な行があります。併し立派な行といふても、眼を瞑つて、口を塞いで、黙つてゐるといふのではありませぬ。京都の妙心寺の關山國師の如き、美濃國の伊深といふ所で、牛飼をして居つた。自ら身を下して、牛飼や、馬飼の所作をして、そして自身の精神を修養し、座禪工夫をせられた。それが後には花園天皇の勅旨に因りて、辭し難く已むを得ず世に出られたのであります。又大徳寺の開山大燈國師の如きは、五條橋下で修行されました。往昔は五條の橋の下は、乞食の巢窟でありました。其橋下で乞食と行爲を共にし、衣食を共にし、そして自分の精神の鍛鍊をしたのであります。其時の和歌に、

座禪せば四條五條の橋の下

往き來の人を深山木にして

といふのがありますが、其山の心をいふたものであります。或る人が「往き來の人を深山木」にするといふのは、聊か耳障りであるから「往き來の人を其儘にして」といふのが良いといふてゐます。然うした有様で、關山國師や、大燈國師のみならず、古來聖胎長養の歴々は、皆身を賤しい所に置いて心を高尚の所に棲まはせ居つたのであります。極端な話をするに、自ら罪を犯して、監獄署の中に身を措いて、囚はれ人と一緒に、起臥衣食を共にして、精神を鍛鍊する傍、罪人等に同情を寄せて、修行した人もあります。然ういふ座禪を古人はしてゐたので、活動世界を袖にして了つて、山の中に入

らなければ、座禪修行が能きぬといふ意味ではないので、古人の行り方は、畏れ入つたものであります。此點から言ふても能く分るであります。大通智勝佛が、十切の間道場に端坐して、座禪工夫してゐたが、佛法が現はれないで、成佛が能きなかつたといふ疑問であるが、形の上の座禪といふことに就いて、解釋をしたのでありまして、一步進んで禪宗の本領からいへば、佛法現前せず、佛道成就せずといふは、それ即ち眞の佛法で、所謂過去心も不可得、現在心も不可得、未來心も不可得であります。然るに動もすると、不可得と誤解して、雲を掴むが如く、霧を捉ふるが如く、殆んど捕捉するところがなく、只空々寂々であると解する人がありませうが、然ういふ意味ではありませぬ。眞理の極處は不可得であります。知り得可からざると言ふても宜しい。或は不可思議といふても宜しい。最う一つ言へば無碍光如来即ち碍りなき光明、或は無量壽佛といふても宜しい。即ち常にいふところの絶對界で、三世不可得といふのであります。暗闇に鐵砲を放つのは違ひます。だから文字といふものも、深く嚙んで見ないで、早合點をすると、大變取り違へます。其點から見れば、座禪すればする程、佛法は分りませぬ。乃至盡未來まで座禪をしても、佛道を成就することは能きないといふのであります。それから先きの意味は、舌では言はれない。言はんとすれば、舌が硬ばつて了ひます。畢竟火の焰々として燃えてゐる所には、蚊や、蛇がとまらぬやうなもので、其人々一端豁然として貫通するといふ境界に入つては、舌や想像でいふことの能きぬところが、所謂因地一聲の境界であります。

す。衲が常に言ふ學問の極處は、宗教の始まりであります。併し宗教といへば廣いが、感情を主にし出て來てゐるのは基督教や、マホメット教であります。佛法は然うでありませぬ。勿論佛法に於ても美しい感情を尊ぶと同時に、意志の力、智慧の働きを奨励するのであります。されど如何なる巧妙の智慧でも、理屈の屈くところは、分つてゐるが、若し絶對界に飛び込んで了つたら、何んの用も爲さぬのであります。去れば學問を傳ふて、一番の最極點に往く其時が、抑も宗教の發起點であります。讓和尚が僧の問ひに答へて「其問甚諦當」といふたので、諄々しく言はなかつたのであります。洵に簡單なもので、僧が「不得成佛、時如何」と問ふたのに、それよ其問ひが當つてゐると言はれたのであります。ところが僧にはそれが解らぬ。道場に座禪工夫して居つたら、悟りが開けさうなものであるのに、それが能きない。佛道を成ずる時如何と問ふたに對して、それさ其問ひが當つてゐる「其問甚諦當」とやられた。恚ういふ答へは、却々一寸出て來ない。之れは種々考へて言ふたのではありませぬ。何故佛道を成ずることが能きませぬかと問ふたに對して、即座に彼れが不成佛なるが爲めなりと答へた。之れを日本の言葉でいふなら、何ういふて可いか、畢竟分らぬ奴ぢや貴様はいふ、恚ういふ問答であります。

無門曰、只許老胡知、不許老胡會、凡夫若知即是聖人、聖人若會即凡夫。

(訓讀) 無門曰く、只老胡の知を許して老胡の會を許さず。凡夫若し知らば即ち是れ聖人、聖人若し會せば即ち是れ凡夫。

それを無門和尚が「只老胡の知を許して、老胡の會を許さず。」と言ふた。先づ此言葉の意味が解つたら、讓和尚の答へも、暗に消息を通ずるでありませう。「老胡」といへば胡人といふことで、達磨と言はず、老胡といふてゐます。達磨でも、老胡でも同じこととあります。「老胡の知を許して、老胡の會を許さず。」知と會は違つたものではないが、彼の達磨が合點したといふことは許すが、解つたといふことは許さぬ。貴様に解つたことは解つたらうが、知つたといふことは許さぬぞといふのであります。次に「凡夫若し知らば、即ち是れ聖人、聖人若し會せば、即ち是れ凡夫」と、これも批評の言葉であるが、言はゞ附けたりで、寧ろ恚ういふ言葉はない方が可いと、白隱和尚は言ふてゐます。けれども此言葉があつたからとて、大なる差支はない。凡夫が若し解れば、即ち佛であります。佛が解つたら、凡夫に下つて濟度することも能きませう。

頌曰

了身何似了心休、了得心兮身不愁、若也身心俱了了、神仙何必更封侯。

(訓讀) 頌に曰く、身を了せんよりは何んぞ心を了して休せんには似かん心を了得すれば身愁へず、若し也た身心俱に了々ならば、神仙何んぞ必ずしも更に侯に封ぜん。

前にも説いた偈頌が、一つ宛添へてあるが、これは頌といひ、偈ともいひます。體は漢詩と同じことであるが、但し詩の體の中に、宗旨の眼目を備へてゐるのを頌といひ、偈といひ、合せて偈頌と言ふてゐます。「身を了せんよりは心を了し休せんには似かん」の偈頌の意から見ても身と心と假りに分けてあります。正當は身と心と分つべきものでない。畢竟心佛及び衆生共にオールワンであります。即ち有といひ、無といひ、無にあらす、有にあらす、有にあらざるに非ず、無にあらざるに非ず、一のオールワンであります。オールワンといへば語弊があるか知らぬが、口で言ふには、然ういふ風にはねばなりません。

「萬法一に歸す、一何れの處に歸す。」

といふ禪宗的の句がありますが、即ち一元論であります。一元論であるから、極樂と地獄と一緒に見る、佛と凡夫と一緒に見るのであります。凡夫の心と、佛の心と平等差別で、句面は假りに身と心と二つに分けて見たのであつて、『身を了せんよりは心を了して休せんには似かん』で、黙照座禪を百千萬年行つてゐたところで、合點が往く譯のものでないから、身體の座禪をするよりも、心の座禪をせよといふのであります。『心を了せば身愁へず』で、心に合點が往つたならば、身體に苦はないと言ふたのであります。此心の本體を細かに了得せねばならぬ。多くは心の影法師を捉へてゐる。畢竟萬法は、本體があつて現相があり、そして作用があるので、一物一件皆此理が備はつてゐるのであります。心も亦然りで、然るに心の影法師を捉へて、心の本體であらうと言ふては不可、一つの感情即ち感じて動く、之れを情といふ。感情といふものは、何にかの刺激を被ると、勃々起るもので、噫面白、噫愉快だ、噫苦しいといふ一時的現象であります。悲しいと思ふても、嬉しいと直ぐに變るものであるから、當時の人は心を感情の心と思ふてゐるが、此處にいふのは、心の本體をいふのであります。心の本體を了得したならば、身愁へずで、心の本體が分つたならば、身體は愁へず苦しきまじない。静かなる所にあつても、動く所に居つても、身は如何なる境遇に變化しても、心の本體が分つてゐれば、一向苦しきまじないといふのであります。『若し也た身心俱に了了ならば神仙何んぞ必ずしも更に侯に封ぜん』で、心と身體二つに分けて見たが、身心俱に了了ならば、不可思議のことも何もない。彼の

王陽明の良能といふのも、グリーンなどのセルフ、リアライゼーションといふのも大差はない。之れを知つたならば神仙であります。『神仙ならば何んぞ必ずしも更に侯に封ぜん』で、既に神仙でないか、身は既に神仙だ。宛然俗界を藻脱けてゐる。不老不死の境涯に飛び込んでゐる。然るに何んぞ更に侯に封ぜん。公侯伯子男などの俗爵に封する必要はない。既に神仙に爲つてゐるに、不足言らぬ華族などにしようといふのは、馬鹿氣たことであります。不得成佛道に神仙ではないか。所謂英雄頭を運らせば即ち神仙であります。元來自分自身が神仙であるのに、態々修行して佛に爲らうとか、大名に爲らうとかいふ必要はないといふ意であります。其處で『神仙何んぞ必ずしも更に侯に封ぜん』と言ふたのであります。

本書の註に、鄂州興陽山清讓禪師は、芭蕉清禪師の法嗣とある。

一〇、清 稅 孤 貧

曹山和尚因僧問云、清稅孤貧乞師賑濟、山云稅闍梨、稅應諾。山曰青原白家酒三盞喫了猶道未沾唇。

(訓讀) 曹山和尚因みに僧問ふて云く、清稅孤貧乞ふ師賑濟したまへ。山云く稅闍梨、稅應諾す。山曰く青原白家の酒三盞喫し了りて猶ほ道ふ未だ唇を沾さずと。

此曹山和尚といふのは、曹洞宗の歴々であります。曹洞宗は洞山及び曹山此兩師に依りて唱へ出された故に、それで曹洞宗と言はれてゐます。所が今曹洞宗の人の解するところに依ると、然らずして畢竟曹洞宗は洞溪即ち六祖慧能大師の法を、洞山和尚が傳へて、之れを唱へ出した故に、曹洞宗といふと解釋を下してゐます。そんなことは何うでも可いとして、此曹山和尚といふのは洞山和尚の法を

傳へた人で、勿論出格の歴々たる人でもあります。其曹山和尚の所へ、或る僧が來て尋ねました。「清稅孤貧乞師賑濟」と、此清稅といふのは、問ふた僧の名であります。「孤貧」とは讀んで字の通りで、

「私は貧に迫つて、所謂赤貧洗ふが如しといふ有様、切望尊師の御慈悲を以て賑はして下さい。」といふた。恚ういふと普通の文字だけの問ひのやうでありますが、それが禪宗式の間端は、一つの意味を含蓄してゐるのであります。此貧といふのは、世間の感情即ち人情から見ると、古人の言ふてゐる通り、富と貴とは、人の欲する所、貧と賤とは、人の欲せざるところと言ふてゐる通り、富といふ力は、俗界から言へば、實に大したもの、富あるが爲めに、總ての事物が發達して行きます。畢竟一束に言ふならば、あらゆる人生の榮華は、富の一つより生み出すと言ふても、敢て過當とは思はれませぬ。併しこれは形而下であります。ところで世間最も大切と思ふ此富も、道義的眼光を以て看破つて了ふと、實に孔子が言はれた通り、

「不義にして富且貴は、我れに於て浮雲の如し。」
で、俗界に於て一番貴いと大切にする富も、一段飛び抜けた所から見ると、此位無趣味のものはないと言ふても宜しい。種々と世間話に涉りますが、納は種々のことを聯想する癖がありまして、思ひ出すまゝ申すのであるが、現今の有様は、殆んど富の爲めに、人間が朝から晩まで、ザワ／＼してゐる有様で、到る所大空へ一種の蒸氣が立つて、賑はしく見えるのは、何んの蒸氣が浮き上つてゐるか

言へば、即ち富の蒸發氣が濛々として上つてゐるのであります。其蒸氣が盛んに立つてゐる國は、強くて大きくて、開けてゐるのであります。其通り富の必要を感じる現今であるが、併し往昔から多くの人が富には眼が眩んで、堂々たる君子人ですら、富の爲めには道義を顧みず、従つて富を作るには、其手段の何たるを問はぬといふ有様でありますから、自ら欺き、人を陥れ、權謀術數に至らざるなく又それが爲めに心中大煩悶を來たすことに爲ります。實は富を得て快樂すべき人間が、却つて富の爲めに其頭腦を悩まされ、殺されたり、活されたりする有様で、甚しきに至りては放心、自殺の悲劇を演出するのであります。納が思ふには、富といふ字は、恰も利刀の如しと言ふて宜しい。使用者が良かつたら、其利刀の富は、彌々益々利用されて、鋭きものは益々鋭く用ゐられるが、若し使用者が悪るかつたら、之れが爲めに自分を破り、他を破り、道義を破り、人道を破つて、害毒を社會に流すといふやうなことに爲つて來ます。彼の米國の如きも、富が本位に爲つて、富といふことには頗る重きを置いてゐるやうな有様で、動もすると堂々たる政治家も、學者も、金力の爲めに使はれるやうな傾きがあります。佛教就中禪宗の立場からいふても、富は利器の如きもので、其使用法を誤ると、害毒を流すといふて差支ないと思ひます。若し其形而上といふ點に立つて、一度眺めて見ると、貧といふことにも頗る意味があります。又貧は大變誤解が能き易い。これも天命だ、因縁だと云つて、朝から晩まで寢轉んで、貧に安んじてゐるのは論外であります。爲すことなくして、貧に安んじてゐるの

は、賤しむべき貧で、富に濁富あると共に、貧にも濁貧があると思ひます。今納が言はんと欲するところのものは、それでなく形而上の場合に立つて眺めると、貧といふことは、無量の味があるのであります。それ故に吾が宗旨では、「道は貧道より尊きはなし」と言ひます。道は貧道即ち簡易生活より尊きはなし、畢竟貧といふことは、あらゆる罪惡、妄想、我意、我慢、我執で、即ちセルフインユネスといふものから起るのは、皆それでありました。全くそれがなくなつて、貧に爲つて了ふ。即ち吾が胸中が、すつきり貧乏に爲つて了ふのであります。例へば一の學問とか、見識とか、若しくは一種の悟りとか、それは迷ひよりも優れてゐるにしても、其ものが胸中に蟠つて、其理屈の爲めに縛られてゐる。悟り其もの爲めに縛せられてゐるといふことは、佛はそれを擯斥して居られます。然ういふものは、すつきりと貧乏に爲つて了はねばならぬ。縦令一つの理屈を發見したにしても、それを忘れて了はなければならぬ。貧の意味は、略然ういふ意味で、禪宗ばかりでなく、世間でも道義に重きを措いてゐる人はそれでありました。例へば孔子が顔回を賞讃した語に、

「一簞の食、一瓢の飲、陋巷の中にあり、人は其憂ひに堪へず、回也、其樂みを改めずとか。又回也、屢々空し。」

といふてゐます。若しこれが濁貧に安んずる乞食根性ならば、鏹錢一文の價値もないのであるが、貧は空しき義で、即ち虚心平氣とか、洒々落落とか、光風霽月とか、形容詞は種々あるが、世人が日々

活動してゐる其中に、胸中閑日月のない人は、何事を爲すにも戦々競々してゐるが、それある人は大活動するのであります。往昔から言ふてゐる通り、「大いに働く者は大いに休む」といふ言があります。然り大いに働く人は、大いに休息する。併し休むといふても、大酒を飲んだり何かして、不道德的の休息をするのではない。衲が言ふ閑日月は、胸中一點の曇りなく、光る風、霽れたる月の有様で、常にピースが方寸に貯へてなければならぬ。天空開瀾の度量がなければならぬ。鳥飛んで天に戻り、魚淵に躍るの意がなければならぬ。如何に巨萬の富があつても、其心がなければ、常に飢えてゐると言はなければならぬ。然うした意味でありますから、古人は、

「去年の貧は雖ありて地なし、今年の貧は雖もなく地もなし。」

といふてゐます。其處まで行くのであります。眞の赤裸々であります。これだけ言ふたら、貧の意味も大分現はれて來たであります。恚ういふ風に孔子でも、釋迦でも富を擲つたのであります。其通り「道は貧道より尊きはなし」で、又聖書には「貧しき者は幸なり」と言つてあります。衲が言ふのは、其意味の貧であります。それから以上は坐禪工夫で練り出すのであります。我が寶庫から掘み出さなければなりません。曹山和尚因みに僧問ふて云くは、如上説いたやうなことを意味して、此僧が遣つて來てゐます。其言葉は世間的の問ひに見えます。此清税は、すつきり貧乏で、洵に何うも仕様がなない。四百四病よりも辛いのは貧だといふことがあるが、全く其通りで、最う仕方がないか

ら、何うか此貧乏を御救ひ下さいと言ふて來たのは、其實此僧大得意で來たのであります。迷ひは愚、悟り得た我物も、サラリと西の海へ投げ棄て、了つたといふ意味が何んとなく含んであります。それに對して曹山和尚が「税關梨」と其僧の名を呼んだのであります。「關梨」といふのは、僧に對する尊稱で、税といふ僧の名で「税關梨」と呼びました。すると「税應諾」で、ハイとそれだけの返辭で、待つたなしであります。これは生理的に解釋すると、何か空間に波及する音響が、耳の鼓膜を刺激して、神經に傳はり、神經中樞の腦に入つて、ガダと感覺するのだといふのだが、今はそんな迂遠なことをいふのでなく、清税……ハイとそれだけだ。返辭する者は何か、心であらうなど、言ふまい。「山曰、青原白家、酒三盞、喫了、猶道、未だ沾唇」と實に手綺麗なものであります。此「青原」といふのは、先づ地名といふても可い。「青原の白家」は、一般の百姓を「白家」といふので、即ち無位無官の者を「白家」といふのであります。此處では「白氏の家」といふ文字に見て置いても可い。彼の「青原白家の酒三盞喫了りて猶道未だ唇を沾さず」と昔から劍菱、現今では正宗、其醇酒を充分に飲んて了つて、未だ唇を沾しませぬ。醇酒を飲んで了つて、口を拭いてゐる奴だと言ふたのであります。此清税といふ僧が、孤獨で貧乏である。此憐れなものを切望御救ひ下さいといふのは、丁度美味い酒を腹充分飲んで、口を拭いて素知らぬ顔でゐるやうなもの、即ち「青原白家の酒三盞喫了りて猶道未だ唇を沾さず」と。

無門曰、清稅輪機是何心行。曹山具眼深辨來機、然雖如是且道、那裏是稅閣梨喫酒處。

(訓讀) 無門曰く、清稅輪機是れ何の心行ぞ。曹山の具眼深く來機を辨ず。然も是くの如くなりと雖も且く道へ、那裏か是れ稅閣梨酒を喫する處。

これは無門和尚が批評したのでありまして、能く日本で下手に出るといふことを言ひますが、此清稅も、私は孤貧でござると、下手に組んで來たのであります。相撲でも小股を搦ふ奴は、下手に出ます。これが油斷がならぬ。曹山和尚を土俵の外へ投げ出さうといふところから、頗る下手に組んで來ましたが、無門和尚の眼から見ると、其所作がチアンと見え透いてゐます。「是れ何の心行ぞ。」心行といふのは、仕方と見ても宜しい。我れにはチアンと分つてゐる。「曹山の具眼深く來機を辨ず、然かも是くの如くなりと雖も、且く道へ那裏か是れ稅閣梨酒を喫する處」でお前の下手は喰はぬ、曹山和尚は法眼を具備してゐる人だから、チアンと先方の手が分つて居るので、來機を辨ずるで、ハ、アこれは或る一つの悟りを持つて來た。些つとばかり學問を持つて來たといふことは、チアンと解つてゐる。目撃道存するで、其處に出て來る人を見つると、其風采に依つて、此人は何ういふものであるといふことが略々解る。有繫に曹山和尚だから、深く來機を辨ずで、然かも是くの如くなりと雖も、且く

道へ、那裏か是れ稅閣梨酒を喫する處で、マア言ふて見よと、無門和尚が注意を與へたのでありまして、那裏か是れ稅閣梨を喫する處と言ふたのであります。

頌曰

貧似范舟、氣如項羽、活計雖無、敢與鬪富。

(訓讀) 頌に曰く、貧は范舟に似て、氣は項羽の如し。活計無しと雖も、敢て與に富を鬪はしむ。

毎々説く通り「頌」は韻文を藉りて、宗旨を言ひ現はすのであります。理屈といふものは、或る程度よりしか届かぬ。其届かぬところを、詩を藉りて諷ふので、これが禪の特長であります。禪を解する力がないと、頌の味を知る事が難かしい。元來日本には詩人が多い。漢詩、英詩若しくは國風のこととは且く措き、彼の平民文學といふやうなものは、左官の丁稚でも、大工の追ひ使ひでも、其眞似てと位は鳥渡遣る。恚ういふことは外國人には尠い。日本人は概して詩氣があつて、鳥渡した俳句位は誰れでも知つてゐます。そして種々の興に乗する時は、詩として出て來ます。「雪の日やあれも人の子樽拾ひ。」で、雪の降る日に、樽拾ひを見ると、詩興が湧いて、恚ういふ俳句が出て來まして、一般平民に至るまで、一種の文學思想を有つてゐます。少くとも然ういふ考へがあれば、頌の趣味は解るのであります。無門和尚が貧乏は往昔の范舟の如くであるが、其氣概は項羽の如しであると言ひました。此項羽は、漢の高祖と天下を争ふた人でありまして「力山を抜き、氣は世を蓋ふ、時に利あらず難逝

かす。」といつた漢楚時代の大家傑であります。今に至るまで、支那歴史で豪勇の人物を論ずる時は、先づ此項羽などを推しますが、項羽が一度千軍萬馬の中で叱咤呼號すると、敵兵が後退するといふ位であつたと書いてあります。迷ひの貧乏は言ふまでもなく、悟りも共に貧乏で、洒々落落といふ貧乏人が、社會に向つて大活動すると、力は山を抜き、氣は世を蓋ふのであります。若し少しばかりの學問、些とばかりの理屈が、肚裏に蟠つてゐたりすると、其様な勇氣は出ず、それに束縛されて了ひます。貧乏は范舟に負けず、氣は壯にして項羽の如しで、「活計無しと雖も、敢て與に富を鬪はしむ。」で、丁度日本でいふ、武士は喰はねど高楊枝で、喰はずにゐても、少しも下司根性を出さぬ。土を喰ふても、他人の厄介にならぬで、身は貧乏をしても、精神の富を鬪はすには、カーネギーとでも相撲を取つて見ようといふ氣力があるといふ意味で、此貧といふ字に、同情を寄せて、斯くの如き頌を作つたのであります。

曹山本寂は、支那泉州莆田の人で、母は黃氏、初め儒學を修め、十九歳で出家し、福州福唐縣の靈石山に入り、二十五歳で具戒し、戒通の始め洞山に參し、其宗旨を得て、撫州の曹山崇壽院に住し、後荷玉山に居した。二所の法席頗る盛んであつて、後世曹洞の宗名は、實に良价の洞山、本寂の曹山との一字づゝを取つて命名せしといふことである。天復元年六月十五日寂す、世壽六十二。范舟字は史雲(或は范冉ともある)陳留外黃の人、業を受けて經に通ず。或は容廬に寓息し、

或は木陰に依宿す。此くの如くすること十餘年、乃ち草室を結んで居り、時有りて糧粒盡きれども常に自若たり。閭里之れを歌ふて曰く、瓶中に塵を生ず、范史雲釜中に魚を生ず云々と、本書の註に掲げてある。

一、州勘庵主

趙州到_二一庵主處_一問、有麼有麼、主豎_二起拳頭_一。州云_二水淺不_二是泊_レ缸處_一便行。又到_二一庵主處_一云、有麼有麼、主亦豎_二起拳頭_一。州云_二能縱能奪能殺能活_一便作禮。

(訓讀) 趙州一庵主の處に到りて問ふ、有麼々々、主拳頭を豎起す。州云く水淺くして是れ缸を泊する處ならずといふて便ち行く。又一庵主の處に到りて云く、有麼々々、主も亦拳頭を豎起す。州能く縦ち、能く奪ひ、能く殺し、能く活かすと云ふて便ち作禮す。

これは「州勘庵主」といふ則でありまして、勘といふ字は問ふといふ意味があります。去れば「州

庵主を勘ふ」と讀めば、意味は解ります。さて趙州和尚のことは、大方前に説いた通り、却々通常の
 人ではありませぬ。八十歳まで雲水に身を委し、煉練修行しまして、百歳以上まで長壽を保つたとい
 ふ豪らい人で、其宗旨を唱へる有様は、口唇皮子上に光りを放つといふて、古徳も讃稱して居ります。
 禪宗といへば、眼を瞎して壁に向つてゐるか、或は棒を振り、一喝でも下さなければならぬやうに思
 ふてゐる人がありますが、そんな形だけに付いて廻つたなら大變な誤りであります。成程古人は棒を
 以てしたものもあり、又喝を以てした者もあり、各々特色があります。此趙州和尚は唇の上に大光
 明を放ちて、高尚なる宗旨を、極々卑近の言句に持つて行きました。諸佛頂上の禪と言ふて、佛の頭
 の素頂邊の高いところの宗旨を、極く低いところに引き下げて、縦横無盡に働くのが、大乘佛教の極
 意である。更に詳しく言へば、禪宗では我が心の眼を以て見る所は、諸佛の頂上で、そしてそれと同
 時に身體を以て行ふは、極めて卑近のところにある心と身と、丁度反比例に爲つて居ります。心益々
 昂上すれば、行は愈々低いといふのが、禪宗の本領で、所謂「意は毗盧頂額を踏んで、行は童子の足
 下を拜す」といふのでありますから、只自ら高く標榜して、人を眼下に見たり、世間を夢幻空花とし
 て、世皆醉へり、我れ獨り醒めたりとしてゐるのは、所謂「聲聞根性」で、そつと世の中を捨て、早
 く極樂へ隱居しようと言ふのでありますから、佛はそれを結句嫌はれるのであります。往々佛教は恁
 くの如く誤解されてゐるのであります。それも無理ならぬことであります。何んとなれば彼の錫蘭邊

に行はれてゐる一部の佛教では、殆んど然ういふ工合に解釋してゐます。即ち消極的に解してゐま
 す。一つの涅槃の意義といふても、燈火を滅したる後の如く、空々寂々の有様といふことばかりに解
 釋せられてゐます。併し然ういふ意味もある消極の方でいへば、涅槃の意味は然ういふ意味でありま
 すが、それと同時に、積極の意味を含んでゐるのであります。「常樂我淨」之れを四徳の涅槃といふの
 であります。世の中は無常なり、苦なり、無我なり、不淨なり、そして寂滅といふのが小乘涅槃で
 言ひ換へれば、消極的涅槃であります。消極的では、無常なり、無我といふものを壊つて、大我なり、
 世の中は苦なり、一つ活眼を開いて見れば直ちに快樂なり。泣いたり、笑つたりする中に活動して往
 くのは、一種の快樂的であります。此世は不淨なれども、悟つた上に於ては、其儘百寶莊嚴の淨土だ。
 併し今多くの西洋の學者の言ふてゐるのは、大抵小乘的涅槃で、寧ろ消極的涅槃が、基督教に優れて
 ゐると言ふてゐます。話が頗る擴がつたが、さて趙州和尚が、諸方を廻つて、先方の力を試めして見
 たのであります。往昔は日本でも、武者修行、道場破りをして廻つた人がありますが、それと同様に
 修行的に廻つて、先方の力を試めするのであります。禪宗では自分が修行をする爲めに、廣く江湖に出
 て、到る所に門戸を張つてゐる高僧とか、碩學とかいふ人の所に往つて、先方の力を看破するのであ
 ります。此趙州も然うした意味を以て、一庵主の所へ往つたのであります。庵主といへば、日本言葉
 では尼のことを庵主といひますが、これは然うではない。全體僧の出世するといふのは、大本山に出

世するとかいふのが、本當の意味に爲つてゐるのでありますが、庵主といへば、世に隠れて道を養つてゐる人でありませぬ。其庵主の所へ往つて、趙州が「有麼有麼」これは日本言葉では「居るか居るか」といふ意であります。訪問して居るか居るかといふのと同じことで、「有麼有麼」と言ふたところが、其庵主が「拳頭を竖起す」で、何も言はずに拳を振り上げたのであります。人を撲る氣色で、お出しが出て來ても、此處へは寄せ付けぬぞといふやうに解釋する人がありますが、然ういふのではない。禪宗は何うしても口で解釋することが能きぬといふのは、此點であります。此一つの拳頭、無限の間、無限の空間も、此拳頭に歸するのであります。萬法一に歸すといふ有様を現はしたのであります。迂遠のやうでありますが、それ以上の妙理を現はすと爲ると、唇も及ばぬので、思慮分別で考へようとすれば、其考へが滅びて了ふ。絶對界に近づくと、然う爲つて來るのであります。眞實平等の境界に入つて往くと、最う我れと彼れと一つに爲つて、同化して了ふ。併し禪宗では、然ういふことをゴテ／＼言ふのは、大の禁物であります。須達長者が、廣大なる寺を建立しようと、佛と共に出懸けて往つて、此邊が可からうと、長者が馬や牛に踏まれてゐる往來の一本の草を採り、地上に挿して、既に梵刹を建立し終れりと言ふた例もあります。又天龍一指頭の禪、指一本といふのがありましたが、これは類則と見て置いて宜しい。其他聖書を繙いて見ても、只一本の百合の花でも、縱令ソロモンの榮華といへども、これには及ばぬといふのであります。當て箴めて言つても不可ぬが、此意味

が分つて、世間に應用するならば、取つて以て我が藥籠中のものにするのが能きます。「居るか、居るか」といふのに、何んとも答へずに拳を出した。其處で趙州は「水浅くして是れ缸を泊する處ならず」と言ひました。却々言葉の上では見えぬ、心が解ると、言葉は自然と碎けて往くが、言葉の上で悟らうとしても、薩張分らぬやうに爲つて來ます。其精神が解つたら、本文は自ら通するのであります。趙州が此言葉を示したところに於て、拳頭を見やうとしても不可ませぬ。趙州は、趙州の力で言つたのが名物だ。趙州恰も拳頭を肯はなかつたが如き口吻であります。水浅くして船を泊するところでないと言ふて、スーツと去つて了ひました。どんな港でも、水の浅いところへは、船を繋ぐことは能きぬ。眞個の軍港、眞個の商港にすることは能きぬ、それ程の淺墓なところには居らぬ、といふやうに、水浅くして船を泊する處にあらずと言ふて、出て往つて了ひました。然うして又一庵主の所へ往つて、「有麼有麼」居るか居るかと言ふたら、前の庵主と言ひ合はせたやうに見えるが、決して然うではありませぬ。千里同風見てゐるところの力は同じことで、東洋の豪らい人が見てゐるところは、西洋の豪らい人が見るのも同じことで、其庵主も同じく拳頭を出したところが、今度は趙州和尚は「能縦、能奪、能殺、能活」と言つて、能く縦ち、能く奪ひ、能く殺し、能く活かす殺活自在の力あり、有難いところの拳頭であると言ふて禮を作した。初めは袂を振つて去つたが、今度は作禮した。一方では肯ざるが如く、一方では肯つた如くでありますが、其處が主眼と爲つてゐます。此處に妙

味があるのであります。之れを世間に應用して見たら、吾々總て道理を事實の上に應用する時には、知らず識らずの間に用ゐてゐます。眞理なるもの千差萬別であります。一つの道理を以て、幾重にも用ゐてゐます。我れにも人にも、靜なる上にも、動なる上にも用ゐてゐます。それが妙であります。日用に應用する上は、皆然うなければなりません。一つのもを二つに應用して行かねばなりません。只一つの見識を以て、彼の庵主は肯はなかつたが、此庵主だけは肯つたといふやうに、解釋をしたら大いに間違ひであります。これは氣に適つた、これは氣に適しないといふのはありません。或は肯つた如く、或は肯はざる如くに見えます。それを無門和尚が左の如く評しました。

無門曰、一般豎起拳頭爲甚麼、肯一箇不肯一箇、且道誦訛在甚處、若向者裏得一轉語、便見趙州舌頭無骨扶起放倒得大自在、雖然如是爭奈、趙州却被二庵主勘破、若道二庵主有優劣、未具參學眼、若道無優劣、亦未具參學眼。

(讀訓) 無門曰く、一般に拳頭を豎起す。甚麼と爲すか。一箇を肯ひ、一箇を肯はざる、且く道へ誦訛甚の處にか在る。若し者裏に向つて一轉語を下し得ば、便ち趙州の舌頭に骨無く扶起放倒大自在を得ることを見るに、然かも是くの如しと雖も争奈せん、趙州却つて二庵主に勘破せらるゝことを。若し二庵主に優劣有りと道はゞ、未だ參學の眼を具せず、若し優劣無しと道はゞ、亦未だ參學の眼を具せず。

「一般に拳頭を豎起す」庵主の示した拳頭に異りがないのに、何んとして一つは肯ひ、一つは肯はなかつたか。「且く道へ誦訛甚處の處にか在る」此入り組は何處にあるぞと評したのであります。「誦訛」とは、日本言葉で言へば、魂膽入組と言ふやうな意味であります。若し此入組のところを、とつくり

と見抜いた上で、一轉語を下し得たならば「便ち趙州の舌頭に骨無く、扶起放倒自在を得」勿論舌には骨見たやうな物はないやうですが、此處で言ふのは、自由といふことで、口に光りを放つ言句の自由を得たるものと言ふのであります。「扶起放倒」片一方で扶起して、片一方で倒す。一方では活かして、一方では殺す、兩方の働きに於て、大自在を得た有様が分かるのであります。無門は無門のものにして言ふたのであります。各々の手に渡してから、何んとも己れの力で取り廻されるのであります。趙州こそ却つて二庵主に看破せられました。二庵主の肚を見ようとして、却つて二庵主から己れの肚の中を看破られた場所があるか、何うかと言はれる。若し二庵主の見處に優劣があるから趙州が彼のやうに言ふたなど、其様なことを言ふては、參學の眼を具備してゐるとは言へぬ。二庵主の見處が同じことだ、優劣もないといふても、それでも不可ぬ。「未だ參學の眼を具せず」、丁度釣針を下したやうなものであります。優劣がないといふても不可ぬ。優劣がありといふても不可ぬ。果して然らば何う解するかと、無門が學者の力を見ようと言ふのであります。

頌曰

眼流星、機掣電、殺人刀、活人劍。

(訓讀) 頌に曰く、眼は流星、機は掣電、殺人刀、活人劍。

批評の外に、例に依りて偈頌があります。「眼は流星、機は掣電」三言絶句であります。灰韻の三言絶句で、本則の宗旨を丸出しにしてあります。此趙州といふ人は、宗旨にかけたら、其眼の鋭いこと、宛然流星の如きものである。今星が飛んだと思ふたら、跡形もないといふやうな有様、餘程敏銳なる眼の働きて、言語を絶するものである。「機は掣電」稲妻のピカリと光つたやうなもので、閃いたと思ふたら、最早其處には居らぬ。肉眼と同時に、心の眼が開いた人であれば、單に趙州ばかりでなく、外交上でも其通り、宗旨や學理の上ばかりでなく、俗事紛々たる中にありて、洵に活殺自在に働かせることができます。「眼は流星、機は掣電、殺人刀、活人劍」それから出て働く有様は、一本の刀を二様に使ふのであります。刀は殺すものであると思ふてゐるのは、大なる間違ひであります。刀は活かす意味の刀でなければならぬ。これが眞個の刀であります。武士が帯してゐるのは、人を活かす爲めで、殺さうとするのは追劔、強盜的の刀であります。日本の武士道を解した武士の刀は、活かす爲めの刀でありません。活かすことができれば、殺すことも容易であるが、殺すことばかりを知つた人は、活か

すことはできない。大小二刀を帯びてゐたのは武士であります。一本の刀を二本にも三本にも、四本五本にも使はなければならぬ。日本刀は日本人の腕で研究されるが、これは人々持前の刀といふて宜しい、趙州が二庵主が出した同じ拳頭を自由に二機に見たのは、刀の使ひ方を知つてゐるので、前のは肯はず、後の有難い拳であるといふて禮拜しました。其使ひ方は何うであるか。恚ういふことは書物の上、悟道の上だけでは狭いことで、此偈頌は毎日應用し得られると思ひます。先きの軍醫總監石黒忠憲男爵から聞いた話であります。日清戦争の時、下の關で李鴻章が、小山豊太郎の爲めに傷を受けた際、日本の醫師に手術を托するやうに爲つたのは、石黒男爵の働きでありました。勿論石黒男爵のみの力でもありませんが、主として同男爵の力であつたのであります。初め李鴻章は、獨逸と、支那の醫師を連れてゐるから、好意は受けるが、此方で手術なり、療治をすると言ふて肯き入れなかつた。餘程際どい場合であつたのであります。それを石黒男爵が引受けて、佐藤進博士を連れて、李鴻章の乗つてゐる船に乗り込んだが、其際船は錨を揚げつゝあつたのですが、愈々錨を揚げて、出發したら事面倒でありますから、引き止められた苦心談もありますが、それは先づ措き、李鴻章をして日本の醫師佐藤博士に手術を任すことに爲りました。恚う爲ると互に打ち解けて話をし合ひましたが、此李鴻章といふ爺さんは、却々喰へない人で、佐藤博士の帯してゐた一刀を見て、

「醫師に刀は要りさうもないが、貴方の刀は、何んの爲めに使ふのですか。」

と訊くと、佐藤博士は悠々迫らず、

「これは活人劍だ。」

と書いて見せたので、李鴻章は手を拍つて喜んだといふことであります。これは何んでもないこと、やうであるが、多少心を修養して居たから、心に浮かんだので、活人劍と書いたのであります。これは活かす刀であるといふたのは、實に巧妙な答へで、李鴻章も此處で満足して、日本醫師の治療を受けたのであります。支那の文字には、一字一句の間に、無限の意味を具へてゐるので、漢字は却々廢するどころでなく、益々獎勵しなければならぬと思ひます。勿論漢字漢文は、日用に使ふには不便か知らぬが、文學の一つとしては、何うしても保存して置かねばなりません。畢竟刀は人を活かす爲めのものであります。軍人の帯してゐるのは、殺す爲めのものでなく、各自有つてゐる一本の刀は、平素振り廻さねばならぬが、それは人を活かす爲めであります。多くの人を使つたり、家庭の中に妻子眷屬を使つてゐる上に、此活人劍を使ふのが、巧く往けば可いのであります。殺すといふことは、何時でも能きるが、殺すと後で後悔することに爲ります。活人劍を振り廻はすのは結構であります。無門和尚は恚ういふ工合に、拳頭を頌してゐます。佛一代の本意は僅にこれだけであります。活かす刀と、殺す刀を、無邊無量に使ふのであります。即ち精神を修養するといふのも、之れを鍛錬するのであります。

趙州和尚の傳は、前に掲げたから、爰には略す。

一一、巖 喚 主 人

瑞巖彦和尚毎日自喚主人公、復自應諾。乃云惺惺著諾、他時異日莫受人瞞。諾諾

(訓讀) 瑞巖彦和尚、毎日自ら主人公と喚び、復た自ら應諾す。乃ち云く惺惺著、諾、他時異日人の瞞を受くること莫れ諾々。

瑞巖和尚のことに就いては、随分逸事が多いが、それは『五灯會元』といふやうな書物を見れば、詳しく出てゐますから、それに譲つて、此處には諄々しく説きませぬ。往昔の人には、何か一つの特色があるもので、吾が禪門の祖師方にも、一人々々皆他人の眞似得ることの能きぬ特色があります。此瑞巖和尚の大得意といふのは、和尚自ら主人公と喚びかける。其意は音で言ふならば然うであるが、或は在宅かなと、恚ういふやうな有様であります。そして『復た自ら應諾す』で、誰れも返事をする

者が無いから、自分自身がハイと答へる。即ち「主人は在宅かな。オーイ」とやる。「乃ち云く、惺惺著」此惺の字は、眼の醒める有様で、眼を醒まして居れよといふのも同じことであります。乃ち「眼が醒めてゐるかい。ハイ眼が醒めてゐる」といふ心であります。「他時異日人の瞞を受くること莫れ。」毎度も決して人の瞞着を受けてはならぬぞ。即ち「他人に瞞されまいぞ。ハイ〜」と返辭をするといふことであります。これが此瑞巖和尚の一本槍、自問自答でありまして、誰れも他人が喚ぶのではなく自分が喚んで、自分が應へて、珍重してゐるのであります。何んと面白いではありませんか。苟も精神を修養するとか、心膽を鍛錬するとかいふ場合には、何か一つの掟がなければなりません。此和尚のは即ち此主人公であります。總て人間には、一つの大きな自覺がなければなりません。それがなければ唐辛に辛味がないも同然で、若し嚴密に調べて見ると、吾々自身は朝から晩まで、他人の瞞着を受けてゐます。併し他人といふても、人間ばかりといふ意味ではない。何んでも總て自分に對するものは、假りに人と見て宜しい。人間の姿ではなくとも、眼に映する像、耳に響く音、鼻に嗅ぐ香、口に對する味、それから自體に接觸するものも、假りに皆人と云ふても差支はない。即ち我れを取圍んでゐる千態萬狀のものは、人の一字で意味してゐるのであります。恚くて吾々は、多く無意識で饒舌つたり、有頂天で働いてゐます。眼からは眼の反射作用で、彼れは黒い姿、これは白い姿と反動を起すまでのものであります。耳から來ても、鼻から來ても、口から來ても、我れを取圍んでゐるもの、

攻撃する反動に依りて、無意識に働いてゐます。吾々人間の行動も、それだけでは一つの感情に過ぎないのであります。暑いといへば、暑熱に逐ひかけ廻はされ、寒いといへば、寒さに逐ひかけ廻はされる。嬉しいに就け、悲しいに就けても、他から出て來たものが、原動的に爲つて、自分は被動的だ。終日只無意識に七顛八倒してゐるのであります。大體教育の本意から言ふても、此心的反射作用を制止するといふことは、最も大切な點であります。言ひ換ゆれば即ちウイルスといふ力を以て、フィリソグを制止するのであります。若し此感情が奔逸して、甚だしきに至れば、其結果は例の華嚴病に感染して、可惜一生を誤るのであります。怖れて慎まねばならぬのは、此人間の盲目的感情であります。凡そ人間の聖といひ、凡といひ、賢といひ、不肖といふも、其岐れるところは、無意識の働きのしてゐる、有意識の働きのしてゐるかの別であります。縱令人間彭祖の壽を保ちても、只喰ふて寢て死んで了ふならば、人生こんな無意味なものはありません。所謂殺潰しであります。又顔回のやうな人で、以て三十の齡を保たずに死んでも、自身の道德的意志を以て働いて行く人は、或る意味に於て、長壽の人と言ふて可い。此瑞巖和尚は却々名物を有つてゐます。「在宅か、オー居る。眠つて居りはせぬか、人に瞞着せられてはならぬぞ、ハイ〜」これだけであります。「日々新に日に又新なり」で、恚う毎日同じことを繰り返へし繰り返へしてゐる中に、意味を存するのであります。或る日或る僧が、玄沙和尚の所へ修行に往きました。其時玄沙和尚が、其僧を捉へて、

「お主は何處から来た。」

「私は瑞巖和尚の所から来ました。」

「然うか、それでは其處に居つたら可いではないか。態々此處に來ないでも可からうに。」

「ところが瑞巖和尚は、最早遷化せられました。」

すると玄沙和尚は、言葉を改めて、

「瑞巖和尚は、平素どんなことを示して居られたか。」

と尋ねた。すると僧は、瑞巖和尚の此主人公の因縁を話しました。其處で玄沙和尚は、

「ハ、あ其和尚が死んだと言ふか。それでは喚んでも應へがないであらう。」

今主人公と喚んだら、誰れが答へるだらうと切り込んだのでありました。悲しいかな其僧は、何んとも答へが能きませぬ。之れを瑞巖和尚の噂だと思ふたら違ふ。其僧は一種の鑄型坐禪に拘泥してゐたから、瑞巖和尚が死んだら、誰れが啞々と言ふかと問はれて、答へが能きなかつたのであります。

無門曰、瑞巖老子、自買自賣弄出許多神頭鬼面。何故、響、一箇喚底、一箇應底、一箇惺惺底、一箇不受。人瞞底、認著依前還不是。若也働他、惣是野狐見解。

(訓讀) 無門曰く、瑞巖老子、自ら買ひ自ら賣りて許多の神頭鬼面を弄出す。何が故ぞ。響、一箇は喚ぶ底、一箇は應ずる底、一箇は惺惺底、一箇は人の瞞を受けざる底、認著すれば依前として還つて不是。若し也た他に働はゞ、惣て是れ野狐の見解ならん。

それを無門和尚が批評したのであります。批評といふても、禪宗的の批評は、簡潔なもので、瑞巖和尚自ら買ひ、自ら賣るは實に面白い。畢竟自分が、自分の品物を賣つて、それを自分が買ふのであります。世間に於ける商賣も、恚ういふ意味に見たら面白い、決して人を瞞着することは能きないに違ひない。主人公……オーイ……惺々著啞……ハイ……人の瞞を受くること莫れ……ハイくは洵に面白い。「自ら買ひ、自ら賣り、許多の神頭鬼面を弄出す。」神頭鬼面は化物といふて宜しい。支那語では鬼神といふのは、幽霊といふやうな意味を有してゐるので、「其鬼に非ずして祀れるは詔るなり。」

といふてある位で、「神頭鬼面」といふ時には、何か怪しい化物見たやうなものを、さらけ出したが、其化物は何にか。これは何うと差しつけた言葉であります。何にが「神頭鬼面」か、假りに開けて見ると言つてゐます。「一箇は喚ぶ底、一箇は應ずる底」で、其化物は主人公と喚んでゐます。一人の化物はハイと言つてゐます。「一箇は惺惺底」で、眼を醒ましてゐるから、「一箇は人の瞞を受けざる底」で、人に瞞されては不可ぬぞよと、假りに幾個にも分けてゐるのであります。自ら買ひ、自ら賣つてゐるのは「認著すれば」で、即ち認るので、今恚う言つて喚んでゐる。それを聞いてゐる其心のことでありま

す。或は神のことだ、佛陀のことだなど、早合點すると矢張不可ぬ。「依前として還つて不是」で、大抵の者は心のことであらうといふが多い。影法師見たやうなものを捉へて、心だ心だと言ふてゐる。「認著すれば依前として還つて不是、若し也他に倣はぬ」の他といふのは瑞巖和尚のことでありま

す。其口眞似をしてゐるならば、「惣て是れ野狐の見解ならん」で、所謂野狐禪である。主人公……「惺々著諾……他時異日人の瞞を受くる莫れ……諾々と口眞似をしてゐます。これは無門和尚が、野狐の見だ。野狐禪といふのは、然ういふ輩のことだと言ふのであります。果して然らば「響」と人人大活眼を開いて、何う見たものであらうと、評を下されたのであります。「響」といふ字は、物を指す貌で、梵書には語助として用ゐてある場合があります。

頌曰

學道之人不識眞、只爲從前認識神、無量劫來生死本、癡人喚作本來人。

(訓讀) 頌に曰く、學道の眞を識らざることは、只從前識神を認るが爲めなり。無量劫來生死の本、癡人は喚んで本來の人と作す。

無門和尚は、前の如く評を加へて置いて、更に偈頌を作つたので、換言すれば禪的漢詩に吟じたのであります。大體理屈といふものは、其文字言語の跡を隠さうとすればする程、屑が出来ます。それ故理論を熄めて、天然の儘を語ふ、それが偈頌であります。「學道の人眞を識らず」で、道を學ぶ人は澤山あるが、恐らくは野狐の見を以て、是なりとしてゐる者が多い。眞といへば、眞理の極所で、多くの者は修行して見よう、學問をして見ようと思つてゐるが、多くは質物を捉へて、眞實を得る者は少い。それは外でもない「從前識神を認るが爲なり」で、識神といふのは、世間普通では使はぬが、神は心といふ意味で、意識とか、情識とかいふやうな字を使つてゐると同じ意味であります。大體佛敎の中には、唯物論もあれば唯心論もあり、又唯理論もあり、其外二元論、一元論、相對論、絶對論、孰れも悉く佛敎に網羅してあるので、彼の具舍論、婆娑論などの三世實有法體恒有の説は、即ち一

種の唯物論である。それから進んで唯心論で、即ち彼の唯識論の説はそれで、其唯心論の自家たる法相宗も、古は盛んであつたが、中途で亡びて、又今日再興せられたのであります。それから進んで法華の唯一乘法とか、涅槃の扶律談常とかに爲ると、即ち唯理論のやうなものだ。併し何も佛法の法理を、強いて世間の哲學などに當て嵌めるには及ばぬ。今此「識神」といふことを説く序に、ザツと八識のことを言ふて見ようと思ふ。此八識といふのは、今の「識神」の識といふ字で、其處で吾々が絶對的心の本體は、八識以上のものであります。下つて相對的心の作用を分けて見ると、先づ八通りあります。數字を以て假りに分けてあるので、即ち八識、七識、六識、五識、此五識を一つ宛に言ひ分ければ、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識といふも構はるので、乃ち之れを合はせて八識であります。假りに吾々の心の姿を如何やうに八通りに分けたかといへば、前五識は前境涯に對して起る心で、前境界とは、目前森々羅々として、宇宙に充滿して居る一切萬法のことであります。或は之れを五塵ともいひ、動もすると我が心を汚すといふ意味で、塵の字が付きました。此五塵の相手方が五根で、即ち眼、耳、鼻、口、身體の五に分けてあります。佛教では五官と言はずして、五根といひます。根とは樹木は根から生ずる如く、五官が根と爲つて、さまざまの枝葉を生ずるといふ意味であります。ところで如何程前境に對して、眼を睜つてゐたところが、無意識なものであります。眼ばかりでは、妙な作用が現はれぬ。眼根は丁度其處に、硝子障子が嵌められてあると同じで、其硝子障子に樹木な

り、人物なり寫つてゐても、眼識といふ活物が働かねば、物の性質を極めることができない。其處で何んといふて可いか、例へば鐘があつて撞木もあり、此鐘と撞木が相會つてゴーンと鳴る。其處で鐘が鳴つたと感ずるのが耳識で、眼、鼻、舌、身の識も同じことであります。それを世間では感覺といふてゐます。總て吾々の感覺といふ心を離れて了つたら、殆んど物の性質といふものはない。敷居も柱も何もそれ自身の性質がない。それが吾々の感覺と相會つて、始めて性質が定まつて來るのであります。若し感覺といふものが、總てのものを見定めなかつたなら、暗中に牛が角突き合ひの喧嘩をしてゐるやうなもので、何が何んだか分らぬのであります。吾々の感覺といふ心の一方の關門を通過して、始めて性質が分るのであります。佛法に諸法無自性といふのは此ことでもあります。さて前五識眼には眼の心、鼻には鼻の心、舌には舌の心、耳には耳の心、身には身の心と皆一々別かといへば、決して然らず、眼、耳、鼻、舌、身各地位が變ると、名が異なるのみで、其心は同じことでもあります。第六番目の意識といふのは、所謂意馬心猿と名づくる奴で、頗る難物であります。丁度野山から捉へて來たところの荒馬のやうなもので、又鎖で繋がれて憚りに憚つてゐる猿見たやうなものであります。六番目の心は、頗る手に合はぬいたづら者で、これが眼の上、耳の下鼻に口に手に足に殆んど荒馬の飛び跳ねる如く、猿の狂ひ廻はるが如く、朝から晩まで、散亂してゐる。吾々がキヨロツとしてゐると、直ぐに此中着切に瞞着されて了ふのであります。然ういふ心の働きを、第六意識と云つてゐる。

又其上にゐるのが七識であるが、六といふから、七といふ名を付けたので、これは六と八との前後の連絡を通ずる役を勤むる意味から、傳相識とも名づけてあります。即ち八識の命令したものを六識に傳へ、六識から報告したものを取次いで、八識に持つて行く、恚く中間に往來して居る心を七識といふのであります。さて又七番目の上にゐるのが八識で、梵名は阿頼耶識爰には含藏識といふ。含は含む、藏は藏むと書いてある。即ち天狗も多福も極樂も地獄も皆此心の中に含藏してゐるのであります。下駄が欲しければ下駄もあり、焼味噌が入用なれば焼味噌もある。所謂何んでも屋とは、此八識のことでありませう。又心所といふて、所屬的心作用に對して、此八識を心王識ともいふ。即ち心の親分といふ意であります。恚く一心を八ツ程に細工して、切目を付けて見たので、併し一端豁然して貫通の境涯を得たら、それは八識以上の沙汰であります。他力門で言ふても、一向に南無阿彌陀佛と切り込まねば、本當の往生は能きぬのであります。例へば基督教のグレースといふても、此八識以上の境界でなければ、頼むに足らぬと、自分は左様に思ふのであります。つまり八識以下前五識まで相對的心象であるから、即ち汚れた心に對する淨き心、善心に對する惡るい心、佛に對する凡夫の心、恚ういふ風であります。ところで八識以上といふのは絕對的心で、白隠禪師の所謂八識田下一萬といふ立場にありては、我と彼との別なく、善と惡との別なく、乃至極樂、地獄、煩惱、菩提の別がないのであります。若し毫厘もあつたら、本當の悟りとは言へない。兎に角世間多くの人は、心といへば、

八識以下の一時的な心、其心を捉へて、これが本當の心だらうと誤り認めてゐる。八識以下の心の一時的なるは、恰も風のない時の清水のやうで淨らかであります。去れど其心を捉へて、これが悟りだと思ふたら、大きな間違ひであります。若し暴風が襲ひ來ると、靜かであつたものが、忽ち大浪小浪を起して、洪波洪渺白浪滔天の慘景を現する。そんな一時の表面の心の姿に付き廻つてゐると、大變な間違ひが出来る。これが所謂「從前識神を認むるが爲めなり」で、一時の現象を捉へてゐるからであります。「無量劫來生死の本、癡人は喚んで本來の人と作す」其永久に迷ひの根本と爲るものを買ひ被つて、多くの莫迦人が、それを本當の心と誤解してゐるといふ意味であります。其處で瑞巖和尚が、毎日主人公とやつて、又ハイと自分が返答する底の妙處は、却を以て心の影法師を捉へるやうな阿房氣たことでないとして、此頌を著けたのであります。

瑞巖師彦は支那閩の許氏の子、幼にして出家し、巖頭全齋に謁して領悟す。更に夾山に參侍し、遂に臺州丹丘の瑞巖山に住す。常に盤石に坐し、終日愚の如し、寂後本山に塔し、空照禪師と諡された。

一三、德山托鉢

德山一日托鉢下堂、見雪峰問者老漢鐘未鳴鼓未響托鉢向甚處去、山便回方丈。峰舉似巖頭。頭云大小德山未會。末後句、山聞令侍者喚巖頭來、問曰汝不肯老僧那、巖頭密啓其意。山乃休去。明日陞座果與尋常不同、巖頭至僧堂前、拊掌大笑云、且喜得老漢會。末後句、他後天下人不奈伊何。

(訓讀) 德山一日托鉢して堂に下る。雪峰に者の老漢鐘未だ鳴らず、鼓未だ響かざるに、托鉢して甚んの處に向つて去ると問はれて、山便ち方丈に回る。峰巖頭に舉似す。頭云く大小の德山未だ末後の句を會せず。山

聞いて侍者をして、巖頭を喚び來らしめ、問ふて曰く汝老僧を肯はざる那、巖頭密に其意を啓す。山乃ち休し去る。明日陞座し果して尋常と同じからず。巖頭僧堂の前に至り、掌を拊して大笑して云く、且喜すらくは老漢末後の句を會することを得たり。他後天下の人伊れを奈何ともせず。

此一則是、白隱門下に於ても、室内の調べとして、却々重い一則であります。而かも本則の如きは、禪宗の眞隨を示してゐるとも言ふて可く、古人も『向上の一路先聖不傳』と云ひ、戲論を飛び躡えて、眞個實參實究する向上の一路に於ては、先聖も之れを傳へず、全く親不レ知子不レ知の境界であります。或は又『末後の一句初めて牢關に至る』ともいふてあります。牢關は堅固なる關所といふことで、此堅固なる關所を越えずんば、眞實佛見法見を打ち越える境界に至ることは能きませぬ。此『德山托鉢』の一則是、眞に堅牢なる關所で、之れを越えなければ、佛と面して語ること能はざるといふ程、重きを置かれてある一則であります。さて本則に入る前に、前辯として、托鉢に就き所感を述べて置きたい。托鉢といへば人の門先に立つて、食を乞ふ乞食と全く同一視されてゐます。今日では同一視されても致方のない邊もあるが、禪宗では殊に衣鉢といふて、之れは喧ましいことに爲つてゐます。

衣と鉢とは師資相傳して、師の道を弟子が継ぐことに爲つてゐます。初め釋迦牟尼如來から、迦葉、阿難と相傳して、二十八祖達磨に至り、支那では達磨より六祖、其後五家七宗と分れても、必ず其衣鉢を相傳して、最も大切なものとしてあります。これは世間の身代讓りのやうなもので、無形の身代讓りを譲り、家督相續して、相續權を握つたやうなものであります。今は衣の方は言はない、鉢の方に就いて言ふが、此鉢を廣げて言ふたならば、實に佛教僧侶の生活問題に關係すること、捨て置く可からざる重大なる問題と爲つて來ます。僧の生活問題などいふと、何んだか變に聞えるが、併し實際考へて見れば、此生活問題は敢て僧だと云ふても、捨て置く問題ではない。さて此頃或る學者などが、頻りと簡易生活は良いといふが、僧程簡易生活の者はありませぬ。何故かといふと、僧の身代は只鉢一つであつて、此鉢を持つて托鉢に出懸け、其日々々の生活をする、是程シンプルライフはない、簡易生活はないと思ふ。けれども現在日本の僧侶の生活は、餘程變化して來ましたが、錫蘭、暹羅、緬甸、カンボチャ、支那の一部西藏などでは、二千數百年前釋迦牟尼如來や御弟子の實行せられた通り、印度式に行つてゐます。即ち其托鉢に依りて得た食物を「正命食」といふてゐます。即ち僧侶の生活問題のことであり、元來托鉢をするといふことより、從つて我慢我執を伏滅して、無我の境に入ることが能きる。之れは自利の功德であります。同時に有緣無緣の居士に、功德を積ませることが能きます。即ち利他行にも爲るのであります。尤も印度式の托鉢は、日本佛教僧の行つた托鉢のやう

に、門付けがましく鉢を振つたり、呼ばつたりするのではなく、恰も羅漢が空中から下つて、通り過ぎるやうに、只鉢を掲げて、スツと足音もさせずに、靜かに通り過ぎるのであります。それでも其時刻が定つてゐるから、有緣無緣の者が、門へ出て待つてゐて、出來合はせのものを献じて、鉢に收めるのであります。さて慾といふものは、人としての持前であつて、我がものは無くしたくない、人の物でも良いものは、自分の物にしたいといふ慾心がある。其慾心を殺いで、縱令粗末なものでも、それを以て布施するといふは、洵に美しい心であります。其布施も身分以上の布施をさせるのではない、有り合はせ、持ち合はせ、出來合はせの一分を割いて布施するのであるから、之れは如何なる窮民と雖も、決して不可能のことではありませぬ。恚ういふ風にしても、有緣無緣の者に、功德を積ませたいとは、實に釋尊の慈悲であります。其處で釋尊は、此托鉢の習慣を造つて、弟子に托鉢せしめて、自利、利他の二徳を積ませたのであります。故に此托鉢生活はシンプルライフ即ち簡易生活の好模範であらうと思ふ。英國のハーバート大學教授エリオット博士なども、此簡易生活の主義であるさうだが、些と托鉢でも行らせて見たい。ところで現代の日本僧侶間に於ける托鉢は、其托鉢の精神を忘れたる單に形式だけの托鉢であります。斯くの如き托鉢なら、寧ろ斷然廢止して了ふが可い。納は然う思ふ。けれども托鉢の精神をも捨てるのではない。精神は實に可い。故に言ひ換へるなら、托鉢をして復活せしめよといふことであります。精神ある托鉢にせよといふことであります。又日本僧侶

の現時の状態から見る時は、鉢一つが其身代でなくて、寺に附いた不動産もあり、檀家といふやうなものもある。甚だしきに至りては妻子までもある。斯くの如き立派な財産があれば、別に托鉢するに及ばぬ。此點より言ふも、托鉢は寧ろ廢止して宜しい。併し天災地變のあつた時、之れを救済する爲めに、淨財を募るといふやうな場合には、大いに印度式の托鉢を行ふべしといふ考へであります。此種の托鉢は、納も行つたことがあります。然らば此托鉢を廢して、坊主の生活問題を何うするかといふに、大いに葬祭を行ふべしだ。此葬祭といふと、今の坊主が現に行つてゐるのではないか。葬祭は坊主の一手販賣であるといふだらうが、納には然う見えぬ。成程坊主は死人の取扱ひをする。これも宗教家には意義あることであるけれども、更に一步を進めて、務めざるべからざるものがあります。それは何んであるかといふに、死人の葬祭でなく、生きてゐる人の葬祭であります。死人に引導を渡すのでなくて、活人に引導を渡すことであります。死人を取扱ふのでなくて、活人を取扱ふことであります。即ち現時の流行語を以て言はゞ、布教傳道を先きにせよといふことであります。僧侶自身は、其生活問題を全く忘れよ、そして其本分に復へり、専心活人の葬祭を營めといふのであります。見よ教主釋迦は、正覺の道場が立ちし後より涅槃の雲に隠るゝまで、専ら布教傳道のみを事として居られたではないか。然るに外護の士續々ありて、覓めざるに祇園精舎も出來れば、竹林精舎も出來、其他種々の寄附を得て、一日として生活問題に其頭腦を悩まれたことはなかつたではないか。故に坊主は、

暫く生活問題を忘れて、其本分に復へれと勸むるのであります。併し坊主も社會の一員として在る間は、社會の人は、此坊主の生活問題を不問に附して了ふのは間違つてゐます。寧ろ坊主の生活問題は、社會の人の責任でありまして、坊主の忘れてゐる如く、社會の人が亦忘れて了つては、社會の罪であります。別して坊主に依つて、其心靈の葬祭を行ふて貰ふ身分であるから、決して之れを不問に付するの罪を爲さず、進んで外護の任に當らなくてはなりません。今「徳山托鉢」の一則を講ぜんとするに方り、感じてゐることを述べて見たのであります。「徳山一日托鉢して堂に下る」徳山和尚が一日鉢を持ち出て來ました。雲水僧が袈裟文庫の前に吊るして置く鉢で、雲水間では之れを出臍といふてゐます。雲水に取つては、之れが大切なること、天下一品の鉢であります。此鉢を以て徳山和尚がスツと出て來た。雪峯に「者の老漢、鐘未だ鳴らず、鼓未だ響かざるに、托鉢して甚の處に向つて去る」と問はれました。雪峯といふのは、雪峯義存禪師といふて、却々の遣り人、陰徳を積む爲めに、丁度其時飯炊きをしてゐました。禪宗では總て鐘や太鼓の鳴り物を以て、口で呼んだりする代りにしてゐまして食事の時にも、入堂する時にも然うであります。其處で雪峯が師匠の徳山和尚が、鉢を持つて出て來たのを見て、此老僧飯の鐘も鳴らぬのに、鉢を持ちて何處へ行くと問ひました。此一問には、さしもの徳山和尚も凹まされ「山便ち方丈に回へる」で、スゴ／＼と自分の居間へ戻つて行つた。此徳山は却々容易の者に凹まされるやうな和尚ではありませぬ。其家風は一本の棒を持つてゐて「言ひ

得るも三十棒、言ひ得ざるも三十棒、有語不_レ得、無語不_レ得、速に言へ速に言へ」といふ行り方で、何んでもかでも三十棒といふのが、此徳山和尚であります。然るに此時は、確に雪峯に一本参りました。『峯巖頭に舉似ず、頭云く大小の徳山未だ末後の句を會せず』此事を雪峯が語つた。巖頭といふのは、徳山和尚よりも一層の偉者であつたけれども、巖頭も尚且徳山和尚の門下でありました。『大小』といふのは、其時代の俗語で、有繋といふ意味であります。巖頭が此事を聞いて、有繋の徳山和尚も、未だ末後の一句が解らぬわい。肝心要の一句を會得して居らぬわいと批評しました。すると徳山和尚が、巖頭の此批評を聞いて『山聞いて、侍者をして巖頭を喚び來らしめ』で、巖頭を喚び付けて置いて『問ふて曰く、汝老僧を肯はざる那』で、貴様は我れを肯はざるとは何んぞやと叱り飛ばしました。『巖頭密に其意を啓す、山乃ち休し去る』で、巖頭却々巧い遣り方で、『密に其意を啓す』で、徳山和尚の耳へ口を寄せて、其意を告げました。其處で徳山和尚は然うかくと言ふて、許し去つた。さあ此處が調べどころであります。禪宗には斯る密啓といふのがあるから、世間から誤解されます。過ぐる日或る博士の著書を見たら、禪宗はメスメリズム（神秘教）だと書いてありました。成程それだけ知つて居つた者では、メスメリズムともいふてありませう。又然ういふても可いかと思ふ。心さへ得てゐるならば、何んと言ふても可い。『明日陞座す、果して尋常と同じからず、巖頭僧堂の前に至りて、掌を拊して大笑して云く、且喜すらくは老漢末後の句を會することを得たり。他後天下の人伊れを奈

何ともせず』で、『陞座』は須彌壇に陞つて、弟子達に教ゆることであります。徳山和尚が其明くる日、須彌壇上に在つて、弟子達を説得することが、果して平常と異つてゐて、實にピシ／＼と手厳しく行りました。爰に於てか巖頭が起ち上つて、『掌を拊す』で、手を拍つてカラ／＼と大笑し、『さて／＼嬉しや、吾が徳山老漢も、末後の句を得てゐるぞ。これから後は、天下の如何なる偉者が來ても、徳山を何んともすることは能きまい。』と大衆に向つて披露しました。文句はこれだけのことでありますが、其眞意果して如何。徳山と、雪峯と、巖頭とは、之れ同穴の狐狸にあらずや。云く得て語るべからず。何んとも言ふべからず。此處が調べどころで、人々工夫して見るべしで、これ即ち無門の牢關であります。

無門曰、若是末後句、巖頭德山俱未夢見在。檢點將來好似一棚傀儡。

(訓讀) 無門曰く、若し是れ末後の句ならば、巖頭、德山俱に未だ夢にだも見ざることに在らん。檢點して將ち來れば好し一棚の傀儡に似たり。

これが無門の尙の批評であります。白隠和尚は、此批評など眼中に置かず、一體無門は、これが解つて批評したのか、解らずに批評したのか、恐らく無門にも解らなかつたらうと言ふてゐます。併し無門和尚は自分の見解を以て批評したのであります。若しこんなことで、末後の句だといふなら、德山も、巖頭も、俱に未だ夢にだも末後の句を見ざるものである。先づ一見したとては、一棚舞臺上の芝居だといふことであります。『傀儡』は土偶の人形のこと、

傀儡師首にかけたる人形箱

佛出さうと鬼を出さうと

といふ道歌がありまして、『傀儡』は人形使ひが使ふ人形のことでもあります。

頌曰

識得最初句、便會末後句、末後與最初、不是者一句。

(訓讀) 頌に曰く、最初の句を識得すれば、便ち末後の句を會す、末後と最初と、是れ者の一句にあらず。

此最初の句と、末後の句と分けて擧げたのを、白隠和尚などは駭してゐるけれども、最初の句は即ち末後の句でありまして、佛敎が自力、他力、聖道、淨土と分れてゐても、其發足點は釋迦如來が正覺山前菩提樹下に於て、曉天の明星を見て、正覺を取られた最初の心にあります。亦涅槃の會座に於て、『我れ四十九年一字を説かず』と言はれた心も、二にして而かも不二なるところでもあります。此敎相的偈頌活禪意のない偈頌は、全く白隠和尚に斥けらるゝ點と爲つてゐるのであります。若し最初と末後と同じといふならば、又惡平等の難に陥る。此難を禦がなが爲めに、『末後と最初と、是れ者の一句にあらず』と、不二にして而かも二なることを示して注意したのであります。愆う見れば無門和尚の批評も敢て價値なきものとするには及ばぬ。併し本則の如きは、人々考へて見るが宜しい。文句の上ばかりでは、眞の會得にならぬ。宜しく實參すべく、實究すべく、言以ていふべからざるところであります。

徳山宣鑑は、支那劍南の人、俗姓は周氏、初め律を學び、性相の學に通じ、常に『金剛經』を講ずるので、人呼んで周金剛といふた。南方に歴遊の途次、婆子に一拶され、龍潭崇信に參じて漆桶を打破し、澧陽に在ること三十年、偶々唐武の破佛に依り、一時獨浮山の石室に避けたが、大中興の時に當り、武陵の太守薛廷望、徳山の精舍を再建し、古徳禪院と號し、禪師を請して第二世とした。唐の咸通六年十二月三日寂す、壽八十六、臘六十五、見性大師と謚す。

雪峯義存は、泉州南安の人で、姓は曾氏唐の穆宗帝長慶二年に生る。十二歳の時莆田の玉澗寺に慶玄律師に師事し、十七歳で落髮受具し、長じて芙蓉山恒照に事へ、尋いで諸所を徧參し、終に法を徳山宣鑑に嗣いだ。其苦修練行は『三たび投子に至り、九たび洞山に至る』の語を以て知られる。唐の咸通十一年福州府西二百里象骨山に庵を結び、地を雪峯と名付けて之れに居る。其名聲僧俗の間が高く、千五百人の大善智識と稱せられた。大順二年出で、丹丘四明の地に遊び、閩に入り、後梁の太祖開平二年（西曆九〇八年）五月寂す。壽八十七、臘七十一、唐の僖宗皇帝勅して眞覺大師の謚號を賜ふた。

巖頭全蕘は、支那泉州の人で、俗姓は柯氏、清原誼公を禮して落髮し、長安に行き寶壽寺に戒を享く、これより雪峯義存、欽山文邃と友と爲り、臨濟義玄を訪ふたに、既に遷化してあらず、仰山慧寂、徳山宣鑑に參じ、遂に徳山の下に漆桶を打破して、洞庭湖畔の臥龍山（巖頭）に菴を結び、

學侶雲集した。常に衆に言ふて曰く「老僧去る時大吼一聲して了らん」と。光啓の末盜賊鋒起し、一日全蕘の居に至り、刃を加へて之れを殺す、師神色自若、大叫一聲して終る。實に光啓三年四月八日であつた。壽六十、僖宗皇帝清嚴大師の謚號を賜ふ。

一四、南泉斬猫

南泉和尚因東西兩堂爭猫兒、泉乃提起云、大衆道得即救、道不得即斬却也。衆無對、泉遂斬之。晚趙州外歸、泉舉似州。州乃脫履安頭上、而出、泉云子若在即救得猫兒。

(訓讀) 南泉和尚因みに東西の兩堂猫兒を争ふ。泉乃ち提起して云く、大衆道ひ得ば即ち救はん、道ひ得ざれば即ち斬却せん。衆對ふる無し。泉遂に之れを斬る。晚に趙州外より歸へる。泉州に舉似す。州乃ち履を脱して頭上に安じて出づ、泉云く子若し在りしかば即ち猫兒を救ひ得ん。

此「南泉斬猫」の一則は、白隠下に於ても難透といふてあります。難透といふは、平たく言へば、難解といふことで、如何にも透り難い。尤も此難透といふ術語を以て評する場合には、利他上に於て

言ふことであります。古則公案に依りて自利、利他をするに、利他は却々困難であります。小兒に利刀を與ふる如く危険千萬であります。實は何の古則公案も皆難透ではあるが、就中此則は難透であります。さて此則の題號に於て、既に「南泉斬猫」即ち南泉和尚が猫を斬るといふ怖しい題號と爲つてゐます。斬るとか殺すとかいふことは、無下に考へてゐると、何んとも思はずに瀆ますものだが、さて水も滴らんばかりの白刃を以て、犬でも猫でも、生きものとして生きてゐるものを斬殺するのは、洵に容易ならぬことであります。此世界を見渡すに、小はバクテリアの類より動物界、植物界、人間界總て生物の集合で此世界が構成されてゐます。言ひ換へれば、社會でも、國家でも皆生物の集合であり組合であります。縦令蟻一つでも、社會組合の一メンバーであります。だから此世界、此國家の構成上、生物は互に相助け合ふて往かねば、世界も、社會も構成されて保つことができません。其社會成立の爲めに、相互資助することが必要で、これが亦自然法であります。然るに此世界には、戦争といふものがあります。これは自然法に背いたものであるから、無論罪惡であります。自然法より見て、戦争罪惡を主張するのは、之れが常道といふもので、普通履むべき道であります。併し此常道の上に、一步飛び越えたる地平線以上の所に立つて見る他の半面があります。常道のみ見て、常道に著して、常道以上に飛び越えることの能きぬものは駄目であります。其常道以上に存する超然たる一道を呼んで、險道といふのであります。佛教に於ては一般に戒、定、慧の三學といふことを言ふて、

三學中ても戒を一番先きに擧げてあります。戒にも種々ありまして、五戒、八戒、十戒、二百五十戒などに分れてゐるが、先づ戒の初めに置いてあるのは「不殺生戒」といふて、生物を殺さぬ戒法であります。此「不殺生戒」といふ戒律を、佛が制定された其本意は、何れにあつたか、これは言ふまでもなく、形の上の不殺生ではない。これは宏大無邊なる佛の大慈大悲心が流露したのが「不殺生戒」となりました。即ち水原に於て、水がブク／＼と湧き立つて流れ出る如き、大慈大悲心の表現であります。此「不殺生戒」の涌き出した根源を確定して置いて、此「不殺生戒」を見れば、能く分るのであります。それで此「不殺生戒」を應用し、活用する場合に於て、亦常道と險道とがあります。若し戒律的術語を以て言ふならば「開遮持犯」があります。「開遮持犯」も大慈大悲であります。だから刀を以て斬るとか、斬らぬとか、殺すとか、殺さぬとかいふ形に現はれて來るところは、抑も末の話で、小枝の葉先きの論であります。古人も

「護生は須く殺すべし。殺し盡して始めて安居。」

といふてゐます。此語でも殺すといふことを表面から見たら、大變怖しくて寄りも付けぬが、其殺すといふたのは、吾々の根本無明を殺すことで、根本無明といふのは、吾々の罪惡の根本妄念妄念の根本を指すので、此根本無明の妄念を磨ぎ澄ましたる利刀を以て、一刀兩斷せよといふのであります。痛快なことである。斬れ、斬れ、斬り盡して初めて平和、眞のピースといふものは、戦ひ、戦ひ、戦

ひ盡して其處に現はるゝ、一面の罪惡無明を殺し盡して、同時に他の半面の大慈悲が流露して來るものであります。言ひ換へると、打つのは愛するので、殺すのは活かすので、棄てるのは救ふのであります。彼の醫師が手術するを見るが可い。病み煩らふてゐる患者に向ひ、利刀を揮つて切開し、切り盡して患者を殺すか、否な、其切るは患者を活かさんが爲め、其刀を刺すは救はんが爲めであります。醫師ですら、患者の生命を救はんが爲めには、却つて刀を以て、患者の身を刺し、其肉を切つて平氣なものであります。況んや佛の大慈大悲心に於てをや。衆生救済の爲めには、殺す場合のあること、些の不思議もあるまい。其處で或る經典にも、

「國を助け、良民を救ふ爲めには、惡虐非道のもの切り平ぐべし、殺すべし、戦争も可し、戦争も斯る場合には罪惡でない。」

といふ意味が説いてあります。今一々經名を擧げて居られぬが、「尼乾子經」などにもあつたと記憶する。恚ういふのは、總て殺すとは活かすことに爲つて來ます。故に戒にも開く場合と、遮る場合と、持つ場合と、犯す場合とあるけれども、其本來を明らかに居れば足れりであります。戒だといふて只遮斷されては、第一吾々が今日生きてゐることができませぬ。吾々が生きてゐる爲めには、肉食しないからといふても、菜食で植物の生を斷つて殺さねばならぬ。一呼吸にも、顯微鏡でも見えぬやうな虫を殺さねばならぬ。若し之れをも殺すことがならぬと制したならば、第一戒を定めた佛自身も活